II．遺跡調査の概要

調査の理由と工程

1．発掘調査

調査委託者	調査の理由	遺跡名		面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
日本道路公団	東海北陸自動車道	田所遺跡	A	1,970	93. 4～93. 10	太田・高橋・西原・鬼頭
愛知県土木部			B	1,125	93. 4～93. 10	太田・高橋・西原・鬼頭
			C	586	93. 4～93. 10	太田・高橋・西原・鬼頭
			D	1,706	93. 4～93. 10	太田・高橋・西原・鬼頭
			E	1,500	93. 4～93. 8	太田・酒井・黒田・牧
			F	742	93. 4～93. 7	太田・酒井・黒田・牧
			G	1,391	93. 8～93. 10	太田・酒井・黒田・牧
			H	1,986	93. 9～94. 1	太田・酒井・黒田・牧
			I	962	93. 11～93. 12	太田・酒井・黒田・牧
			J	2,193	94. 2～94. 3	太田・酒井・今西・鬼頭
		(14,759㎡)	K	598	93. 11～93. 12	太田・服部信
		大毛池田遺跡	A	2,299	93. 4～93. 9	服部信・北條・今西
			B	2,100	93. 9～94. 3	服部信・北條・今西
			C	3,191	94. 1～94. 3	服部信・北條・黒田
		大毛沖遺跡	A	2,697	93. 8～93. 10	服部信・永井・小池・栗林
			B	1,177	94. 2～94. 3	太田・高橋・栗林
			C	3,830	93. 4～93. 7	服部信・永井・小池・栗林
			D	2,449	94. 2～94. 3	太田・高橋・栗林
			E	653	93. 11～93. 12	太田・高橋・西原・栗林
			F	2,566	93. 11～94. 1	太田・酒井・西原・栗林
		(24,702㎡)	G	3,740	93. 11～94. 2	服部信・永井・小池・牧
		西上免遺跡		550	93. 6～93. 7	太田・赤塚・今西
		門間遺跡他	試掘	490	93. 4～93. 12	服部信・鬼頭
愛知県土木部	下水道浄化センター	一色青海遺跡	A	1,750	93. 5～93. 12	前田・池本
			B	3,200	93. 8～93. 12	前田・池本
			C	2,530	93. 8～93. 12	前田・池本
			D	1,050	93. 11～94. 1	前田・池本
(下水道課)		(8,800㎡)	E	270	93. 11～94. 1	前田・池本
(道路建設課)	馬飼井掘線	正楽寺儀長城遺跡		460	94. 1～94. 3	大竹・前田・池本
(河川課)	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	620	93. 4～93. 5	大竹・小澤
			B	600	93. 4～93. 5	前田・池本
		(1,520㎡)	C	300	93. 10～93. 12	大竹・小澤
(道路建設課)	新川清洲線	清洲城下町遺跡	D	500	93. 7～93. 9	大竹・蟹江
愛知県総務部	三ノ丸共同施設	名古屋城三の丸遺跡	A	2,804	93. 4～93. 10	杉浦・松田・伊藤
			B	600	93. 11～94. 2	杉浦・松田・伊藤
愛知県企業庁	内陸用地造成	刀池古窯跡群		1,800	93. 5～93. 11	杉浦・余合・秋田
愛知県土木部	国道155号	鳥帽子遺跡	A	1,000	93. 11～93. 12	杉浦・余合・秋田
(道路建設課)			B・C	1,040	94. 1～94. 2	杉浦・余合・秋田
愛知県総務部(地方課)	東三河総合庁舎	吉田城遺跡		2,700	93. 4～93. 7	野本・水谷・小嶋
愛知県土木部(道路建設課)	堀切中山線	川地遺跡		840	93. 4～93. 7	野本・神谷・川井・原田
愛知県土木部(道路建設課)	橋梁改築	島田陣屋遺跡		1,682	93. 7～93. 12	野本・神谷・水谷・原田
建設省	国道23号バイパス	広坪遺跡	A	1,400	93. 9～93. 11	野本・水谷・川井
			B	1,400	93. 11～94. 1	野本・神谷・水谷・原田
		(4,200㎡)	C	1,400	94. 1～94. 3	野本・神谷・水谷・原田

2．整理報告書

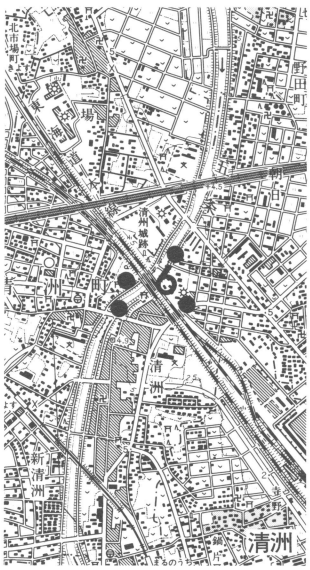
調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省	名古屋環状2号線	朝日遺跡	49,624	昭和56・昭和60～平成元年度
日本道路公団		松河戸遺跡	65,306	昭和62～平成3年度
建設省	国道23号バイパス	室遺跡	8,800	平成3年度
		牛ノ松遺跡（整理）	13,000	平成4年度
	国道302号拡幅	貴正町遺跡	1,088	平成4年度
		月縄手遺跡	311	平成4年度
	小田井山田共同溝	貴正町遺跡	540	平成4年度
愛知県総務部	東三河総合庁舎	吉田城遺跡（整理）	5,300	平成4～5年度
愛知県土木部	新川清洲線	清洲城下町遺跡	2,297	平成元年～平成4年度
（道路建設課）	新川甚目寺線	外町遺跡	2,570	平成3～4年度
	名古屋祖父江線	堀之内花ノ木遺跡	7,100	平成3年度
	馬飼井堀線	跡ノ口遺跡	2,560	平成3年度
		一色長畑遺跡	880	平成3年度
	稲沢祖父江線	船橋宮裏遺跡	1,600	平成3年度
	豊田知立バイパス	黒笹40・89号窯跡	2,100	平成4年度
	橋梁改築	島田陣屋遺跡（整理）	2,682	平成4～5年度
	五条川改修	清洲城下町遺跡	29,750	昭和61～平成5年度
（河川課）	五条川改修	清洲城下町遺跡（整理）	29,750	昭和61～平成5年度
愛知県企業庁	内陸用地造成	子持古窯跡	1,300	平成4年度
愛知県道路公社	知多中央道拡幅	立楠古窯跡	600	平成4年度

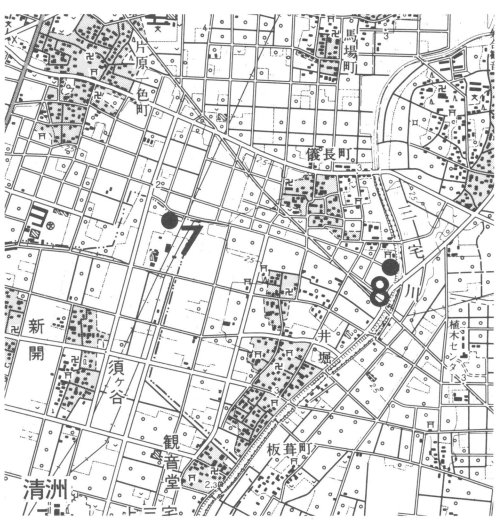
2．整理報告書

調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省	名古屋環状2号線	朝日遺跡	49,624	昭和56・昭和60～平成元年度
日本道路公団		松河戸遺跡	65,306	昭和62～平成3年度
建設省	国道23号バイパス	室遺跡	8,800	平成3年度
		牛ノ松遺跡（整理）	13,000	平成4年度
	国道302号拡幅	貴正町遺跡	1,088	平成4年度
		月縄手遺跡	311	平成4年度
	小田井山田共同溝	貴正町遺跡	540	平成4年度
愛知県総務部	東三河総合庁舎	吉田城遺跡（整理）	5,300	平成4～5年度
愛知県土木部	新川清洲線	清洲城下町遺跡	2,297	平成元年～平成4年度
（道路建設課）	新川甚目寺線	外町遺跡	2,570	平成3～4年度
	名古屋祖父江線	堀之内花ノ木遺跡	7,100	平成3年度
	馬飼井堀線	跡ノ口遺跡	2,560	平成3年度
		一色長畑遺跡	880	平成3年度
	稲沢祖父江線	船橋宮裏遺跡	1,600	平成3年度
	豊田知立バイパス	黒笹40・89号窯跡	2,100	平成4年度
	橋梁改築	島田陣屋遺跡（整理）	2,682	平成4～5年度
	五条川改修	清洲城下町遺跡	29,750	昭和61～平成5年度
（河川課）	五条川改修	清洲城下町遺跡（整理）	29,750	昭和61～平成5年度
愛知県企業庁	内陸用地造成	子持古窯跡	1,300	平成4年度
愛知県道路公社	知多中央道拡幅	立楠古窯跡	600	平成4年度

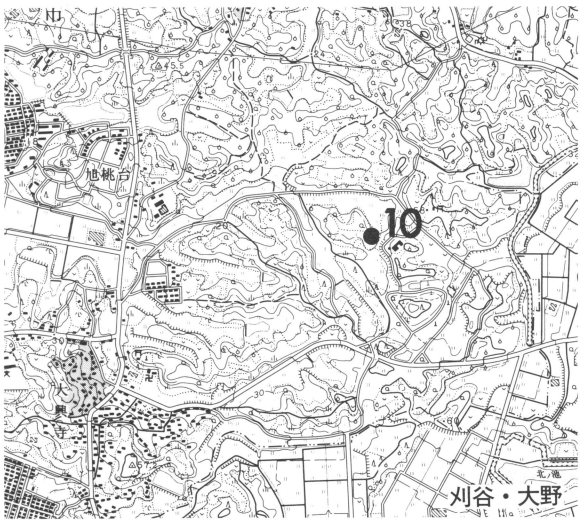


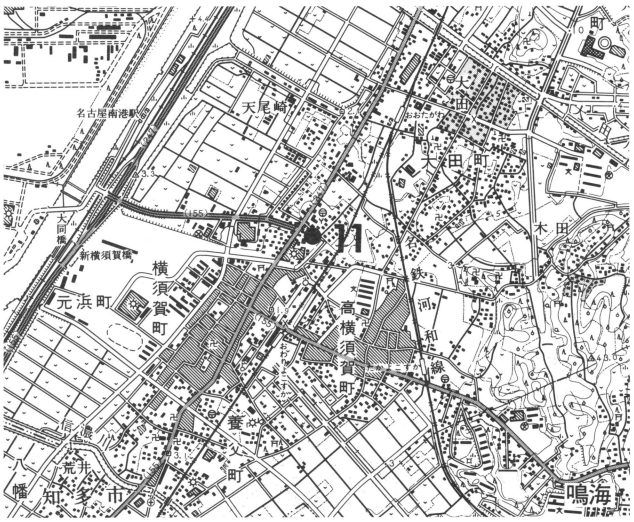
1．田所遺跡
2．大毛池田遺跡
3．大毛沖遺跡
4．西上免遺跡
5．東海北陸自動車道
　関連試掘調査
6．清洲城下町遺跡
7．一色青海遺跡
8．正楽寺・儀長城遺跡
9．名古屋城三の丸遺跡

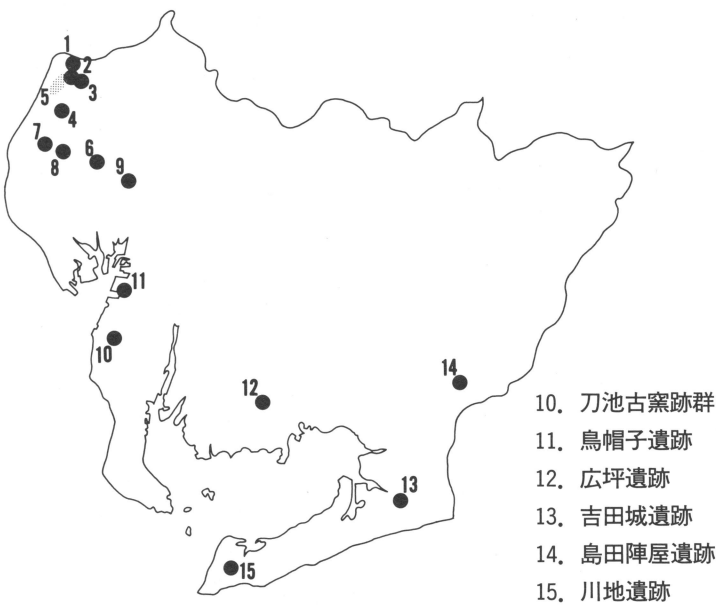




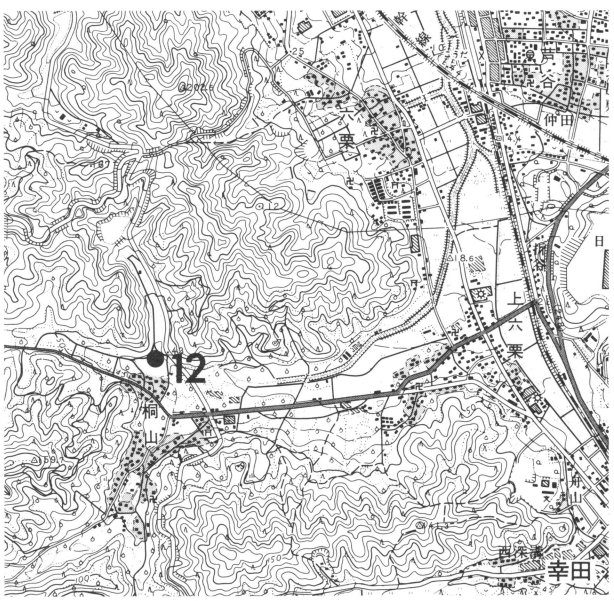


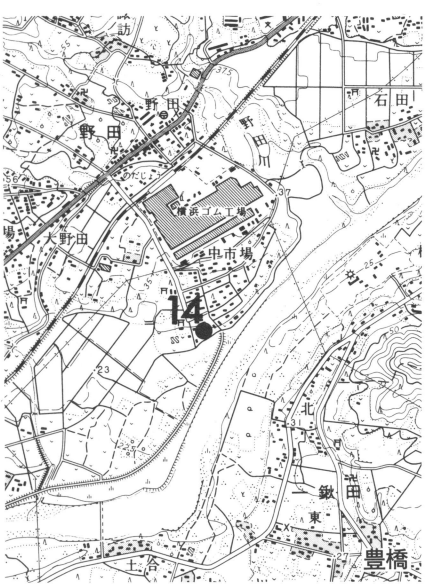


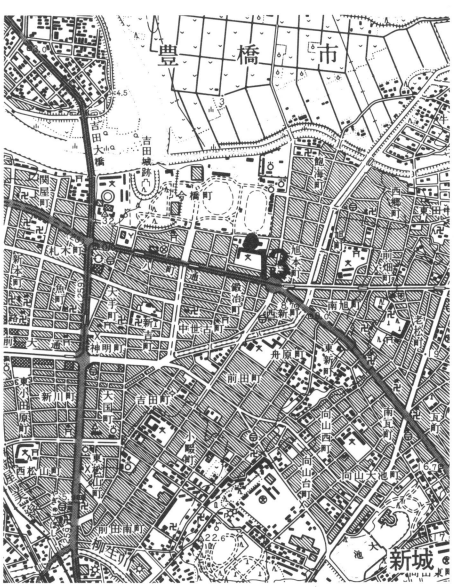


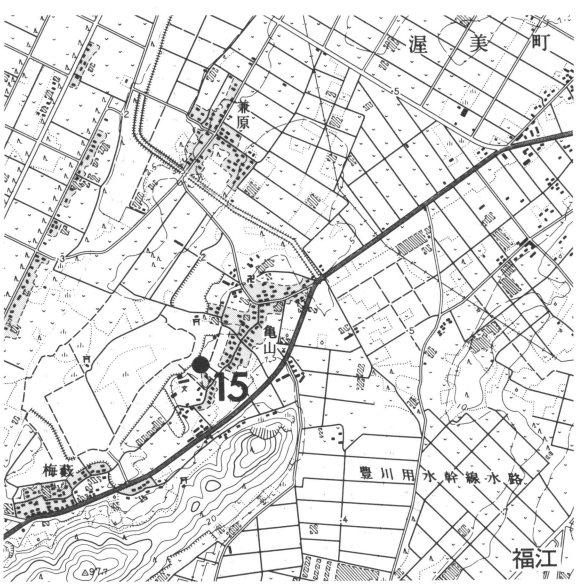


10. 刀池古窯跡群
11. 鳥帽子遺跡
12. 広坪遺跡
13. 吉田城遺跡
14. 島田陣屋遺跡
15. 川地遺跡









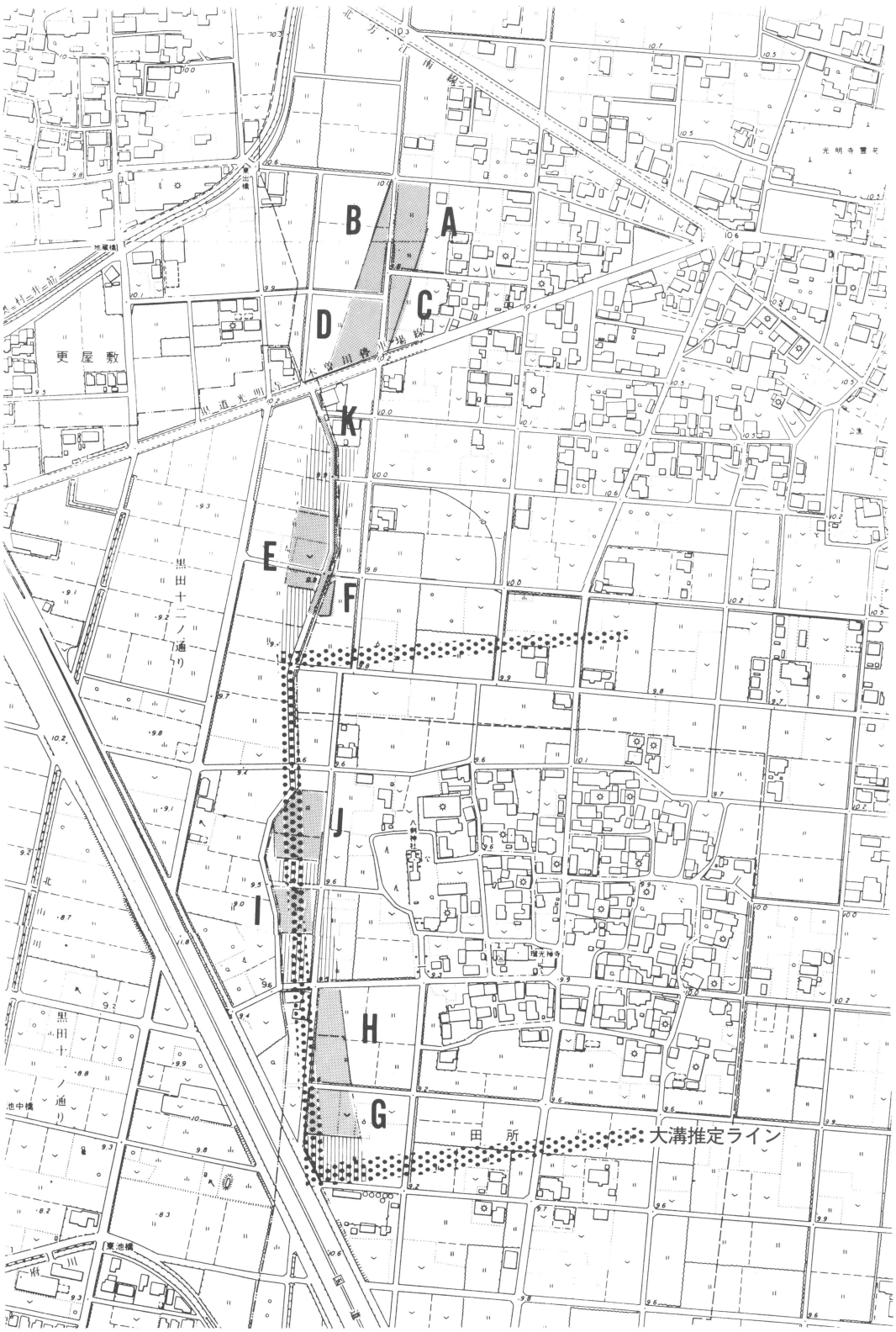
田 所 遺 跡

調査の経過　一宮市大字田所と隣接する葉栗郡木曽川町黒田にまたがる田所遺跡は木曽川によって形成された自然堤防及び後背湿地上に位置している。現況は標高10m前後の水田及び畑地である。東海北陸自動車道の建設にともなう事前調査を、日本道路公団及び愛知県土木部から愛知県教育委員会をとおして委託を受け昨年度より実施している。今年4月から県道光明寺木曽川停車場線の北側にA～D区を設定し、10月まで調査を行った。また、それと並行して92F・92G区に隣接する南側にE・F区を設定し7月まで調査を行った。それにひき続き、遺跡の南限92H区から北へむかう地点のG～J区の調査を3月まで実施した。その間、11月中旬から12月にかけて92E～G区周辺の道路部分K区の調査を実施し、今年度の調査面積は14,759㎡に及んだ。

調査の概要　今年度は田所遺跡の北限から南限まで調査が及び、田所遺跡の発掘予定地内の全容がほぼ解明されてきた。昨年度の調査で県道光明寺木曽川停車場線南で墳墓堂を中心とする墓域の遺構が検出されるとともに、旧集落を囲むと推定される大溝など中世の遺構が検出された。また、古代の住居跡、古墳時代後期の水田も検出された。昨年度及び今年度の調査をふまえると、田所遺跡はⅠ：弥生時代中期、Ⅱ：古墳時代前期、Ⅲ：古墳時代後期、Ⅳ：奈良時代、Ⅴ：平安時代、Ⅵ：中世と大きく6期にわけて考えることができる。今年度の調査で県道光明寺木曽川停車場線の北のA～D区において、Ⅱ期を中心とする遺構群が検出され、従来の田所遺跡とは遺跡の性格を異にすることがわかってきた。　（太田芳巳）



田所遺跡全景

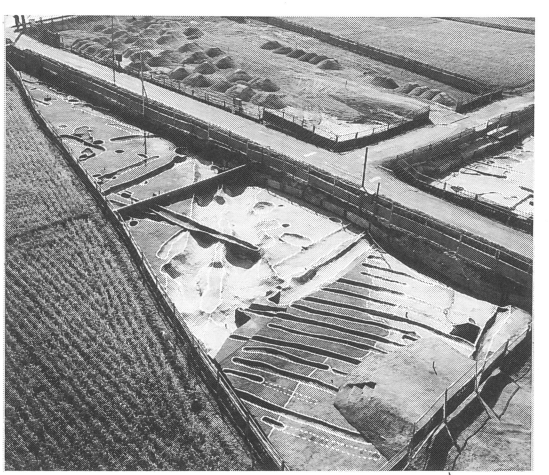


第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：5000）

A～D区の概要　本調査区の基本層序は、第１層：耕作土、第２層：床土、第３層：褐色土、第４層：黒色砂質土、第５層は基盤層である砂層（又はシルト層）となる。本調査区の中心時期となるII期の遺構は、第４層の上面（II－b）と下面（II－a）で確認できた。II期の遺物・遺構は共に最も充実しており、ここでは便宜上、田所遺跡の一部として報告するが、従来呼称されてきた田所遺跡とはその性格を異にすることは明白となった。遺跡の景観は、A区からD区にかけて東北－南西方向に幅１m程の溝（SD10）が延び、その北側に土坑等が展開しており、さらに、A区の北西からB区の北にかけて当時の自然流路が北から南に流れている。すなわち調査区は、川辺に沿う遺跡の西端部と考えられる。SD10以南ではII期の遺構・遺物は希薄となるが、逆にIII期の遺構・遺物は多く認められる。V期以降の遺構としては、調査区の中央部及び西側で南北方向の溝を確認できたに留まる。

A～B区の遺構　I期に属する遺構としては、２基の土坑を確認した。

II期が本遺跡の主要な時期である。この時期の遺構は、調査区の北西をかすめる自然流路と、C区とD区を北東から南西にかけて掘削されているSD10との間に、濃密に分布する。特徴的なのは２つの土坑群である。特に注目されるのは、SK58をはじめとする一群で、いずれも直径約250cm、深さ約80cmと大型で、自然流路に平行して並んでいる。この土坑群は水辺の祭祀に関わる遺構であろうと思われる。その根拠は、①遺物の出土状況、②土坑の規則的な配置、③調査区内で住居跡が検出されていないこと、④自然流路の水際という立地条件などである。さらにはSK58に隣接するSD28は、祭祀に使われた建物の周溝とも予想される。SK18とSK29などを中心とする土坑群は、この大型土坑群に付随するものであろう。



C区の全景（北東から）

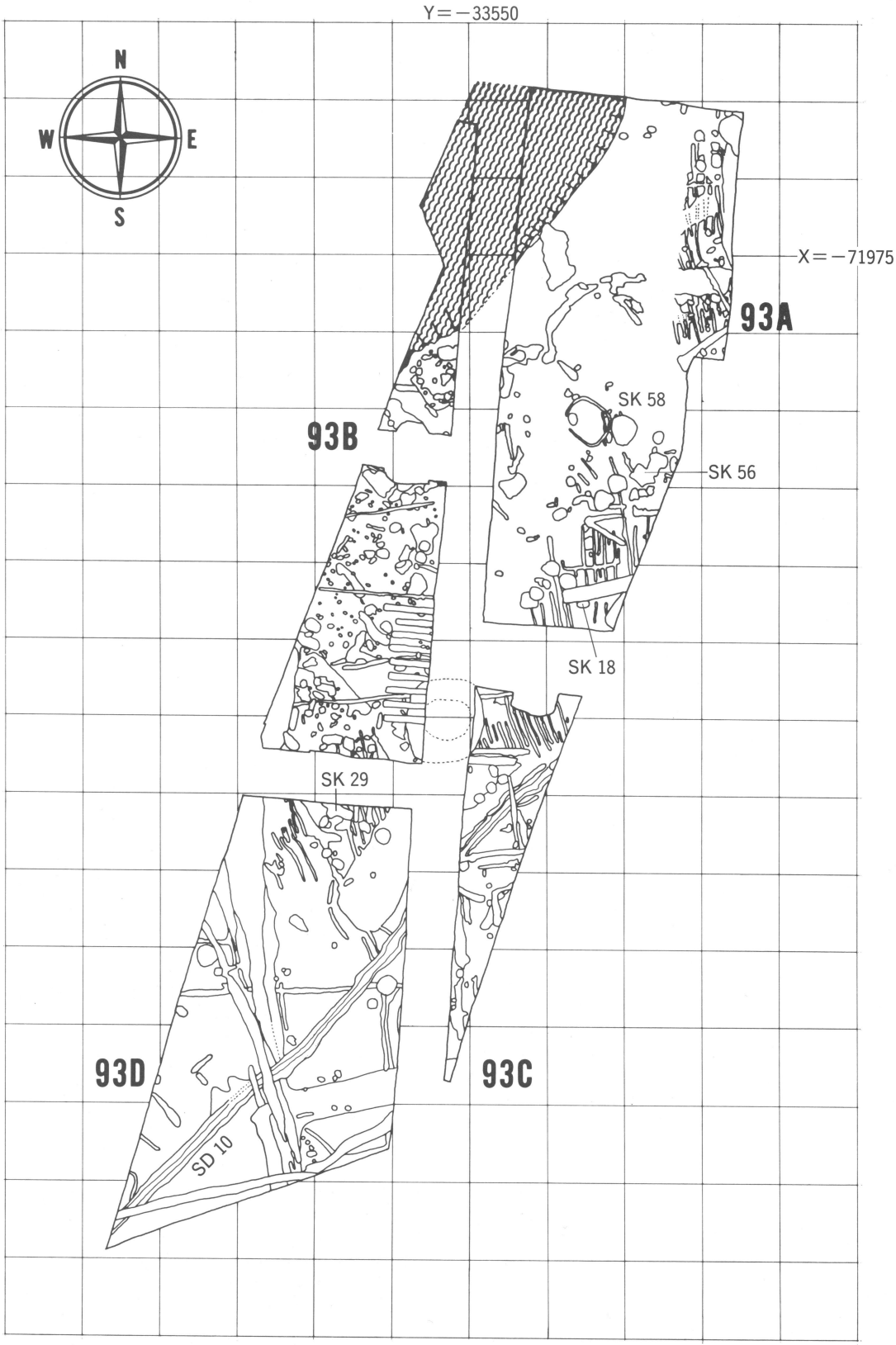
IV・V期の遺構は、SD10以南に集中する傾向が見られる。須恵器を含むこれらの溝と土坑は少数であり、この時期の本遺跡は衰退化傾向にあると言えよう。

VI期の遺構は、調査区南部を中心に、溝数条が検出されているにすぎず、むしろこれらの遺構は、本調査区との関わりよりも、南に展開している「墳墓堂」に関連するものと考えられる。

（西原正佳）



A区南半分の全景（北から）



第２図　遺構全体図（1/800）

Ａ－Ｄ区の遺物　ここでは、本遺跡の中心をなすII期と若干III期に属する出土遺物について述べてみる。

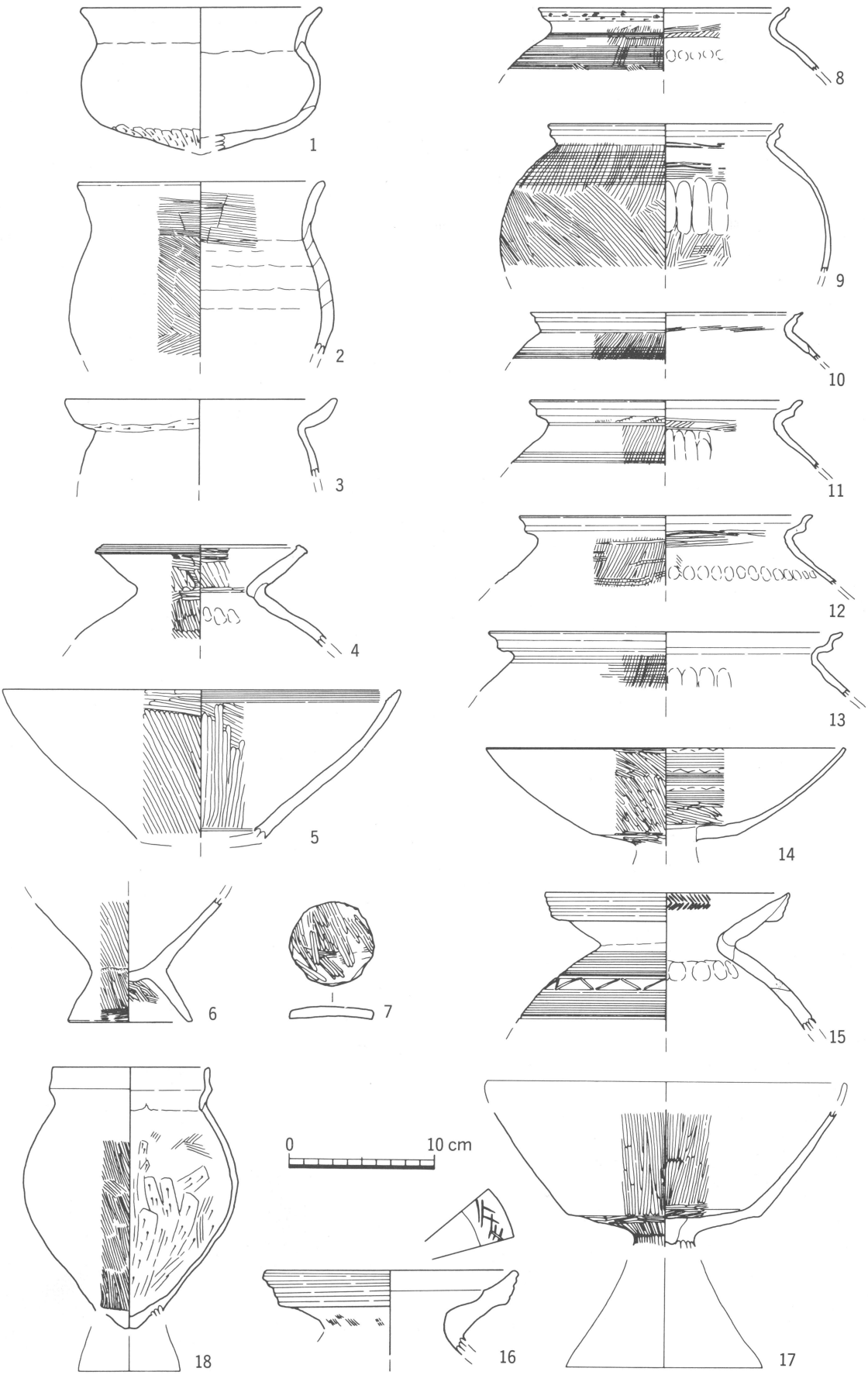
II期に属する遺物は、多くの土坑および溝から出土しており、特に土坑のありかたは、本遺跡の本質的な解明にも関わってくるため、ここでは3基の土坑（ＳＫ18・56・19）を例にとり出土遺物を概観する。ＳＫ18の遺物は、壺・甕・高杯・鉢・円盤状土製品の構成であり、煮沸具としてのＳ字甕とパレス型壺を欠いている点を特徴としている。壺（4）は外方に短く外反し、口唇部をわずかに拡張してここに4条の沈線を施している。体部はヘラミガキによる整形である。甕は脚台を持つタイプで占められるが、口頸部の形態により（2）のように緩く外反する口縁部を持ち、体部には球形を示さずむしろ長胴化してハケ調整が施されたタイプと、(3)のように受け口気味に短く下方に肥厚させた口縁部形態を示すタイプとがある。体部は未調整に近いナデ調整のままで終わっている。(6)はこの時期にみられる一般的なタイプである。(1)は強く外反する口縁部に偏平な体部がつく。器面はナデ調整である。底部を欠くものの、ヘラケズリ調整によって突出させていると思われる。口縁部と体部下半にススの付着が認められる。(5)は、内彎の杯部を示し、口唇部は内側に面取りして沈線を4条施している。こうした、高杯の内面に加飾（高杯に限定されない）する傾向は、尾張北部から美濃西部に広く認められ、ひとつの地域性と考えられる。(7)は壺の体部破片による二次加工製品である。ＳＫ56はＡ区の中央部で検出され、列をなす4基の大型土坑のひとつである。土坑の底から（14・15）が出土し、他は埋土中の遺物である。出土土器群の特徴は、煮沸具がＳ字甕によって占められていること、貯蔵具としてパレス型壺のみが出土していることにある。ＳＫ18と対照的な様相は、その遺構の性格の違いに起因するものと考えられる。(8～13)のＳ字甕には、口縁形態と内外面の調整の違いによって時期差が認められる。(8・9・10)は口唇部が短く上方にたちあがり、頸部内面の荒いハケ調整、肩部の横線に共通点を持つが、(8)は口縁の屈曲部に刺突文がめぐらされている点で（9・10）より古い様相となる。体部は球形を呈す。(11～13)は、口縁屈曲部から外方に強く外反している。これは、口縁部成形時の強いナデ調整によるものと考えられる。その結果刺突文が無くなっている。また、頸部にヘラによる沈線を巡らしている傾向が認められる。(13)は、口縁形態や頸部内面ヨコハケ消失の点で後出的な様



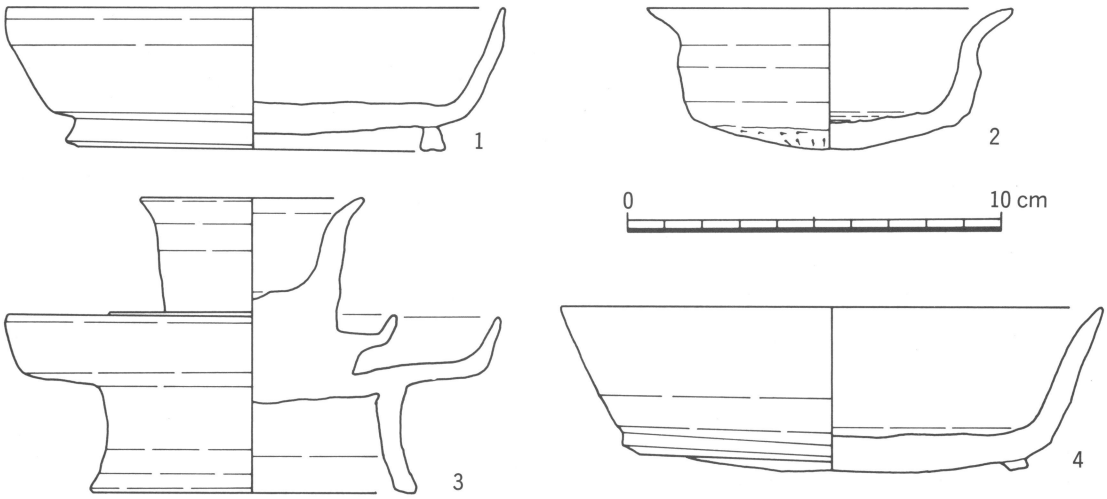
Ｃ区ＳＤ10上面遺物出土状況（北から）



Ｄ区ＳＫ29（奥）遺物出土状況



第３図　出土遺物実測図Ⅱ期ＳＫ18（１－７）ＳＫ56（８－17）ＳＫ29（18）　Ｓ＝1/4



第４図　出土遺物実測図（Ｓ＝1/2）　１．２検出　３．４遺構

相を示すが、頸部外面に依然として沈線を残している。(14) は杯部下部に弱い稜を持ち、杯部が大きく広がる。杯部内面にヘラ状工具による鋸歯文と沈線を３段に配している。胎土・焼成共に良好である。パレス型壺である (15) は、口唇部を下方に肥厚させ３条の凹線文を施している。内面にはヘラによる羽状文を配している。体部上半にクシ描横線とヘラによる鋸歯文を相互に配している。また、口頸部の外面と内面（文様帯を除く）に丹彩を塗布している。(16) も同様な壺であるが、口縁内面に稜を持つ点で異なる。(17) の高杯は、杯部下部に稜を持ち上方に大きく開く杯部形態を示す。(14) の高杯よりは古い様相を示している。(18) は、ＳＫ29から出土した。口縁部で屈曲し受口状に立ち上がる形態を持つ台付甕である。体部外面はハケ調整・内面はヘラケズリ調整であり、口頸部は内外面共にナデ調整である。口縁形態からすれば外来的様相が窺われる。以上の出土土器は当地域の土器編年上、概ね廻間Ⅰ・Ⅱ式に該当すると思われる。土器以外の出土遺物として、打製石鏃４点（チャート１点、他はガラス質石英安山岩：Ⅰ期）と膝柄鍬１点：Ⅱ期－ａ（ＳＫ58出土）がある。

Ⅲ期の遺物は検出面及び遺構から若干出土している。概ね７世紀から８世紀代に比定できる。有台杯身（１・４）は腰に明瞭な稜を持たず、低い台が付く。（１）は口縁端部で立ち上がる特徴を持つ。８世紀後半に比定できる。（２）は底部付近を手持ちによるヘラケズリ、口縁を外半させる椀である。７世紀代に比定。（３）は特殊な形態を呈した燭台ふうの造りで、白色系陶器と思われる。　（高橋信明）

ＥＦＫ区　Ｅ・Ｆ・Ｋ区は、昨年度調査した92Ｅ・Ｆ・Ｇ区と隣接する調査区であり、昨年度確認された墳墓堂を中心とする中世の墓域との関連を確認することが調査の第１目標であった。その結果中世の墓域との関連が認められたのは、Ｅ区の北部（Ｅｂ区）とＫ区であり、Ｅ区の南部（Ｅａ区）とＦ区では墓域との明確な関連については認めることができなかった。

Ｅａ区・Ｆ区では、遺構については中世・近世の水田、溝、土坑などが確認されたものの、ほとんど遺物を伴っておらず、若干の灰釉系陶器が出土する程度であった。また、下層の遺構が展開することは認められなかった。しかし、弥生時代の石鏃や古墳時代の須恵器が出土しており、本調査区の周辺に弥生時代～古墳時代の遺構が存在している可能性は十分に考えられる。

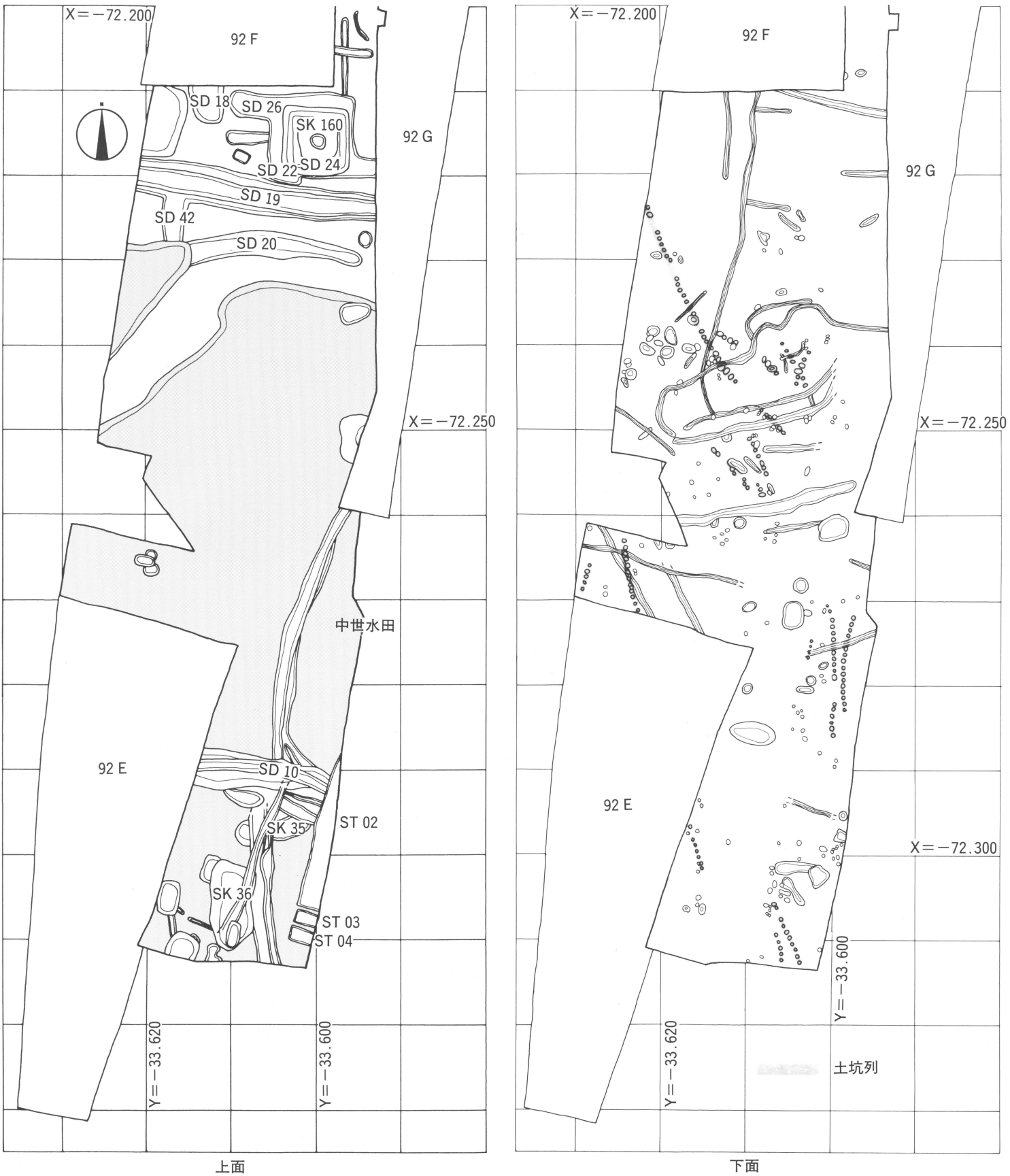
墳墓堂関係　昨年度の調査結果に加えて、墳墓堂を中心とする中世の墓域について以下のことが新しく確認された。

まず、中世の墓域の範囲のうち南限を示すと考えられる２条の溝（ＳＤ19・20）を確認した。ＳＤ19は溝幅約２ｍ・深さ0.8ｍであり断面が２段となっている。ＳＤ20は溝幅約1.5ｍ・深さ0.5ｍであり、断面がＵ字型となっている。これらの溝が中世の墓域の南限と考えられる根拠は次の２点である。すなわち92Ｆ区で確認した墳墓堂へと通ずる道を構成している溝（92Ｇｂ区ＳＤ58）が、ＳＤ19・20の近辺で終了していること、さらに、Ｅ・Ｋ区ではＳＤ19・20の南側で中世の墓域に関連する遺構・遺物がほとんど検出されず、墓域を構成する遺構の大部分がこれらの溝の北側部分に集中していること、この２点によりＳＤ19・20は墓域の南限を示していると思われる。また、北限については明確に確認できなかった。墓域の北方に位置する93Ａ～Ｄ区では、確実な遺構は確認されず、またその出土遺物からも、その関連性は薄いと考えられる。このことからおそらく、Ｋ区のやや北部に北限を画する遺構が存在するものと推測される。

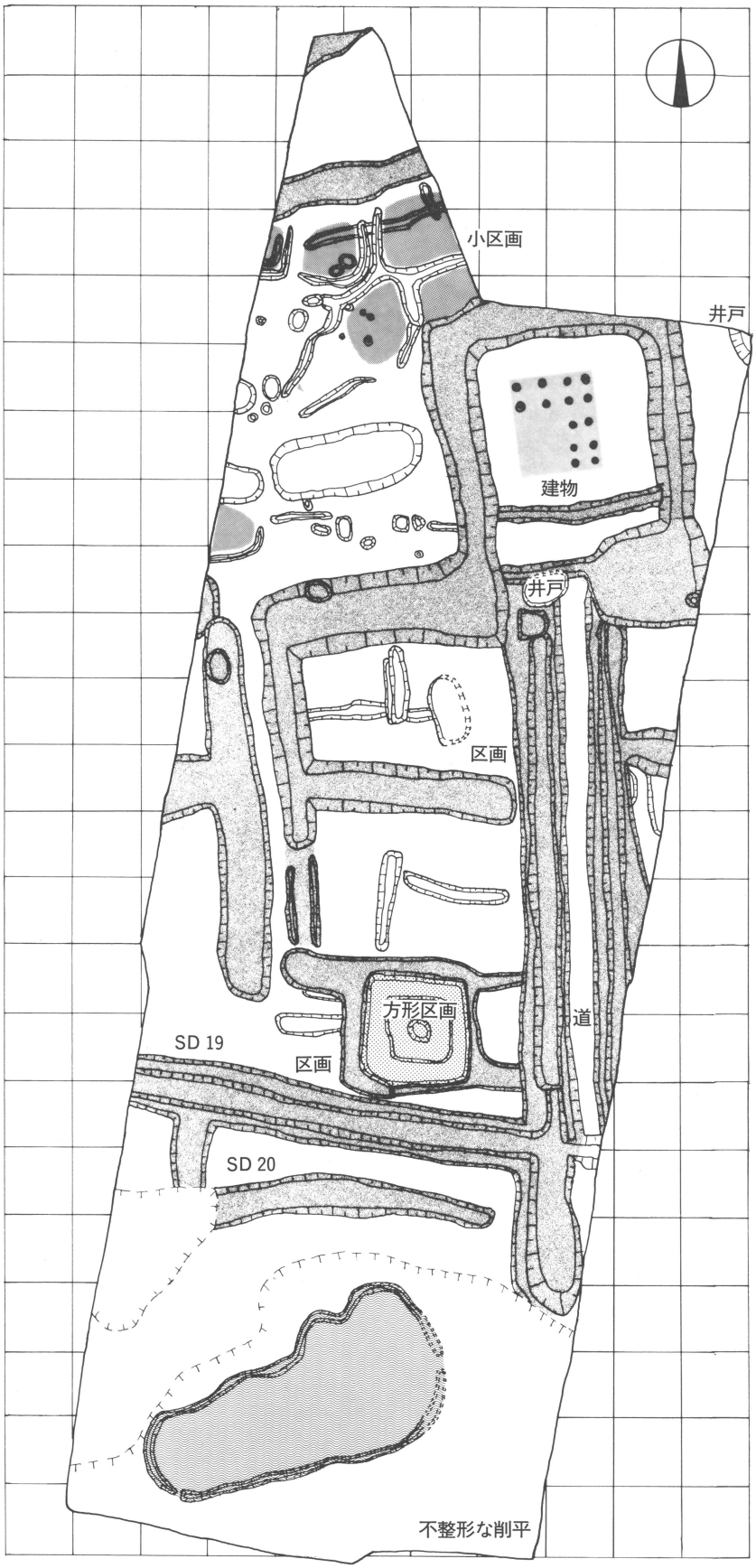
次に、Ｅ・Ｋ区の墳墓堂の南西部において周溝を巡らせた方形区画を確認した。台状部の規模は５×５ｍ、溝は幅１ｍ・深さ0.8ｍで断面がＶ字型となっている。さらに、台状部の中央で直径１ｍほどの土坑が検出され、この土坑から土師質皿が１点出土している。この遺構は墓域の内部に位置していること、及びその形状から中世期の塚墓と思われる。しかし、墳墓堂との関連については今後の課題である。

さらに、92Ｇ区で確認された墳墓堂を取り囲む周溝の西側部分を確認した。溝幅約３ｍ・深さ0.8ｍで断面はＶ字型となっている。出土遺物は昨年度と同様に13～14世紀の灰釉系陶器が中心であり、溝の北側より下駄が１揃出土している点は興味深い。また、昨年度の調査に引き続きこの周溝が墓域の区画溝と接続することが確認された。

最後に墓域の南部についてであるが、Ｅｂ区南半において黒色土が大きく不整形に削平され、その周囲を楕円状に走る溝が確認された。この溝の持つ意味は現時点では確認できないが、墳墓堂を中心とする中世の墓域と何らかの関連性があるものと思われる。今後の調査・研究によって墓域のとの関連について考察していく必要があろう。　（牧　謙治）



第５図　ＥＦＫ区遺構図（1/600）



第 6 図　墳墓堂関連遺構図（1/500）

G～J区　G～J区は、田所遺跡の南部にあたる。昨年度はこの地区で4調査区の調査を行い、今年度はこれに隣接する部分に4調査区を設定した。これまでの調査によって、古墳時代の水田跡、奈良時代と平安時代の竪穴住居跡、中世の大溝などが確認されている。

基本層序はH・G区では現表土下から明褐白色粗細砂層、黒褐色土層となり、基盤に至る。I・J区では現表土下に明黄白色粗砂と灰褐色シルトからなる不安定な層が存在し、黒褐色土層を挟んで基盤となる。この地区の遺構の基盤は灰白色シルト層あるいは細砂層である。H・G区では明褐白色粗細砂層の上面で奈良時代から中世にかけての遺構を検出し、この砂層内および古墳時代の水田耕土である黒褐色土層の上面で古墳時代の遺構を検出した。I・J区では黒褐色土層上面で遺構検出を行った。G区からJ区南部にかけては基盤はほぼ水平の堆積であり、J区以北及びG～J区の調査区の西面に対して微高地となっている。J区北部で基盤は緩やかに高度を下げ、湿地性の堆積土が厚く堆積する。

今年度の調査ではⅢ．古墳時代後期　Ⅳ．奈良時代　Ⅴ．平安時代　Ⅵ．中世前半の4時期の遺構が検出された。

Ⅲ期の遺構としては、水田の畦畔及び耕作土が検出された。G・H区においてH区北端からG区中央部にかけて北に向かってわずか西に振れつつほぼ南北に一直線に延びる大畦畔と、H区の中央部でこれに直交してほぼ東に向かう大畦畔が確認された。大畦畔は典型的な部分で幅約1.8m、耕作土面からの高さ約0.3mで、明黄褐色シルトを盛ったものである。その上端部は、上層の砂層上面で検出できる部分もある。H区北半ではその後の削平によって遺存状況は悪く、またG区南半では確認できなかったが、大畦畔は南北方向及び東方向にさらに延びるものと考えられる。H区では大畦畔内を区画する小畦畔が検出された。確認できた部分では、大畦畔に対して角度が若干振れながらそれに沿う形で大畦畔による区画を矩形に分割している。幅は0.4m前後、高さは0.2m以下である。大畦畔と同じく明黄褐色シルトを盛っている。この水田遺構の耕作土と考えられる黒褐色系の粘土層がG区からH区南半にかけて明褐白色砂層下にほぼ水平に堆積している。厚い部分で20cmで、大部分は10cm前後の層であり、H区北半では消失している部分もあるがI区まで安定して広がっている。

Ⅳ期のみに属する遺構は確定できなかった。I区のST01はこの時期からⅤ期の初頭の時期に属するものと考えられる。検出面より0.2～0.3mで水田底面に達し、埋土は黄褐色粘土である。

Ⅴ期の遺構としては、竪穴住居跡、溝、土坑などが検出された。竪穴住居跡は、H区とG区の北端部でそれぞれ5棟と3棟が切り合って、またH区南部で1棟のみ切り合いなく確認された。これらは、明褐白色砂層の上面で検出されたが、H区SB06以外は遺存状況が悪く、床面に近い部分のみを確認した。これから平安時代初頭の灰釉陶器、須恵器、土師器（第7図）が出土した。また、G区北端部からH区南端部にかけて同時期の土坑十数基が検出された。H区北半部の中世水田遺構の下面で平安時代前半の溝2条が検出された。いずれも幅5～8m、深さ約0.6mで、1条は東西方向に走り、他方は南西から北東に延び、

北東端で合流する。性格は不明である。

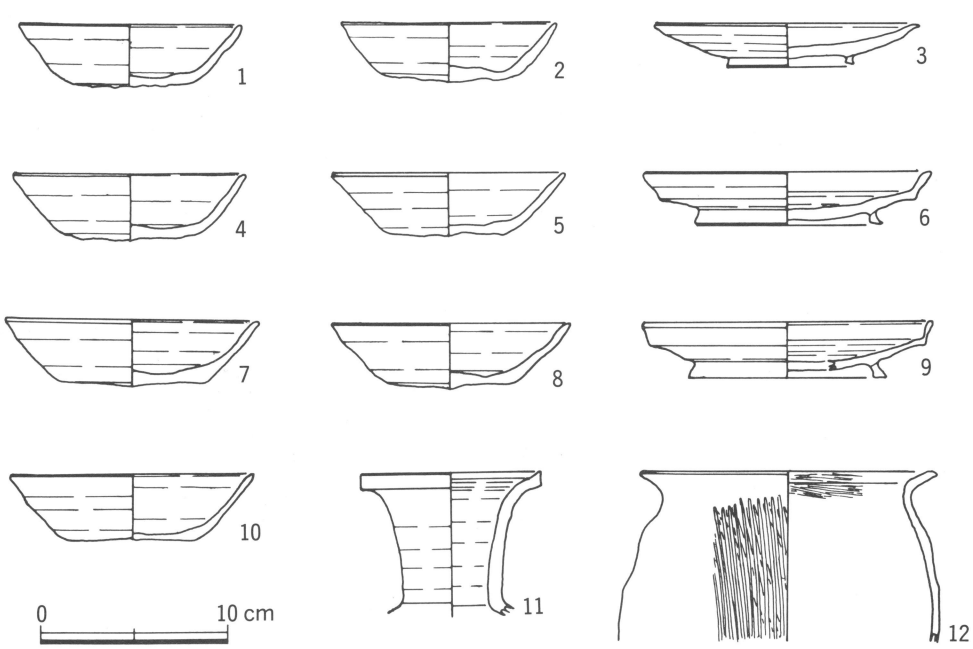
Ⅳ期の遺構としては、溝、井戸、土坑、水田などが検出された。H・I・J区において、確認できる部分で幅最大約８m、残存部の深さ最大約1.5mの大溝（I区SD03）が確認された。南北方向に直線状に延び、先年度の調査から集落の外郭をなすと考えられる溝である。埋土は明黄白色粗砂で、強い流水による堆積が認められる。G区で、この時期の土坑、井戸、小溝などが集中して検出された。井戸は１基重複して５基検出され、そのうち４基に曲物および木組などの構造物が遺存した。溝は十数条検出され、いずれも東西方向、あるいは南北方向をとる。SD02からは比較的多量の灰釉系陶器が出土した。また、百数十基の小土坑が検出されたが、掘立柱建物などは確認されなかった。この時期の水田の耕作土層は現水田面下に連続して堆積し、I・J区では全面に広がり、H区では明褐白色砂層と黒褐色土層を掘り込んで調査区の中央から北部に広がっている。　（酒井俊彦）



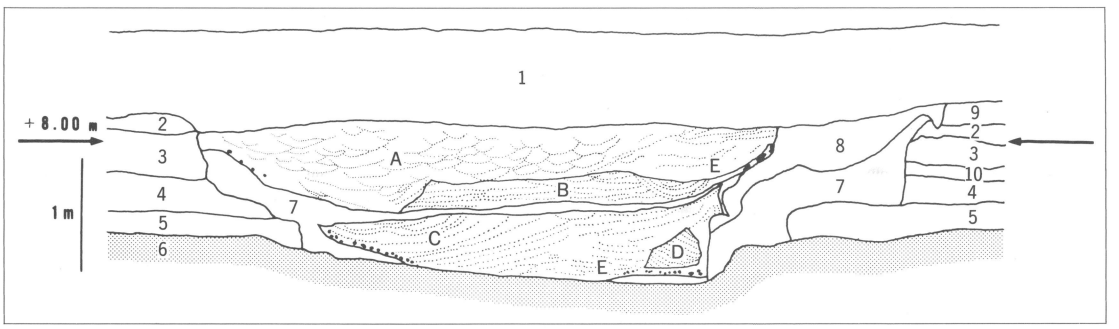
G区　SE02



I区　SD03（大溝）



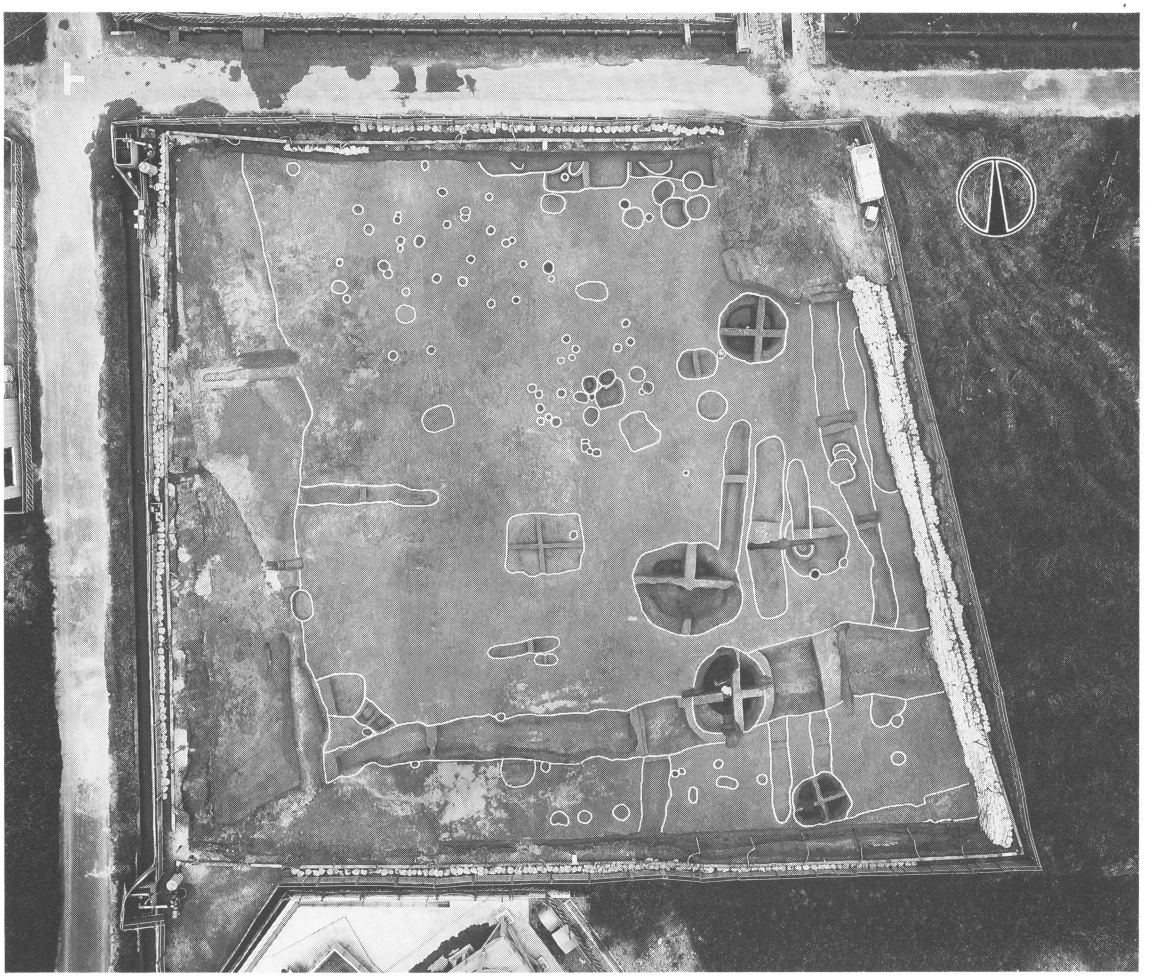
第７図　G区SB01・02・03出土遺物（1/4）



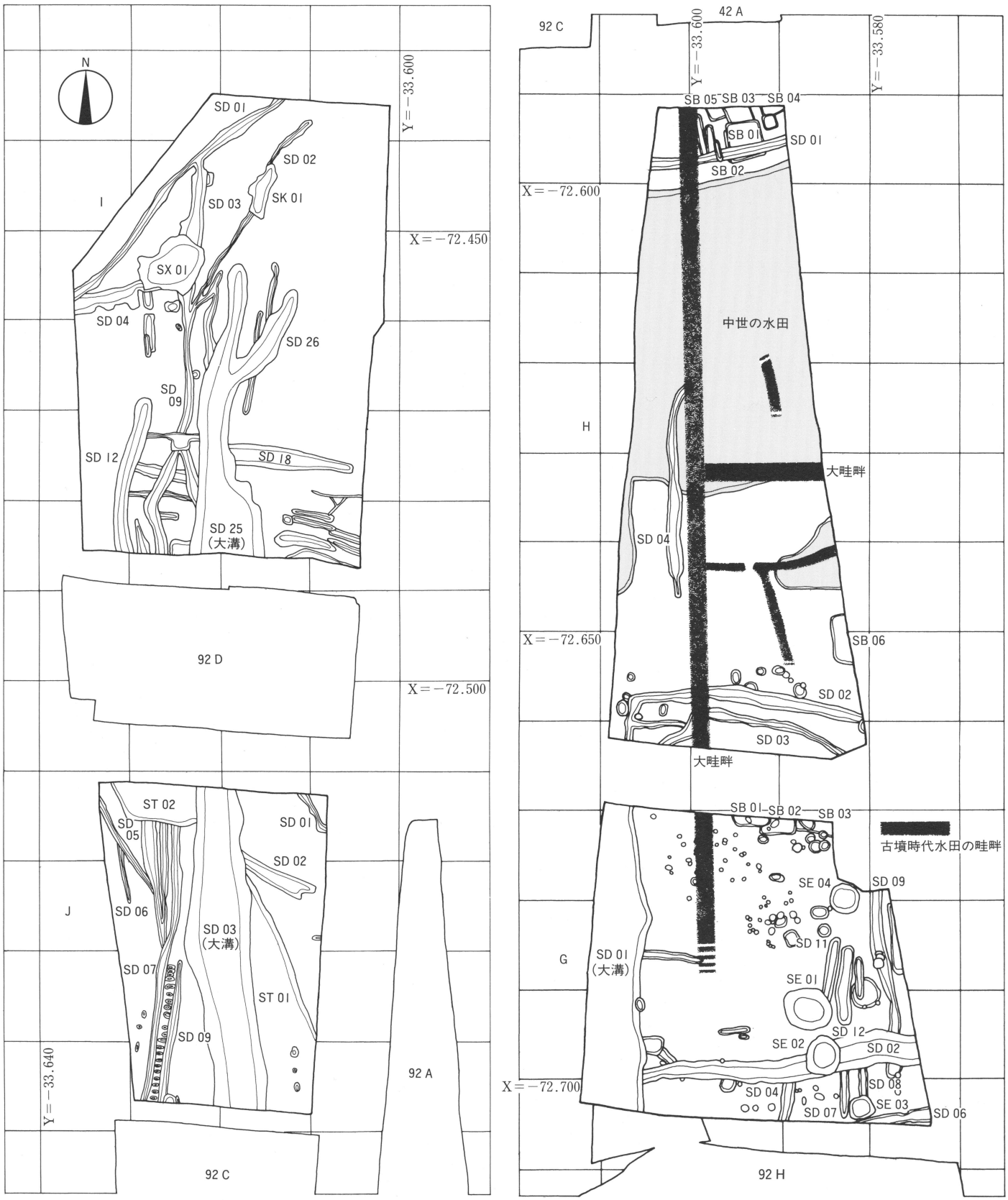
1．褐色シルト質粘土
2．暗黄褐色粘土
3．暗オリーブ色シルト
4．灰色極細粒砂
5．灰色シルト
6．黄灰色極細粒砂
7．黄褐色シルト
8．暗黄色シルト
9．灰黄褐色粘土
10．暗黄褐色粘土質シルト

A．中粒～粗粒砂（トラフ状斜交層理）
B．細粒砂（平行葉理、トラフ状斜交層理）
C．細粒砂（トラフ状斜交層理）
D．シルトと細粒砂の互層からなるブロック
E．液状化跡

第８図　Ｉ区ＳＤ03断面図



Ｇ区全景



第10図　G H区遺構図（1/600）

自然科学的分析

田所遺跡Ａｂ区、Ｂ区において、砂層の液状化およびそれに伴う流動化跡が確認された。Ａｂ区の西半分には、古墳時代の遺物包含層を切る河川堆積物がみられたが、この堆積物中に砂層の液状化跡がみられ、極細粒砂とシルトからなる平行葉理が乱されたコンボルート葉理（Convolute Laminations）と、遺物包含層である黒色の中粒砂質腐植質土が砂層中に取り込まれた粘土の集合片（Mud clast aggregates）が確認された。コンボルート葉理は、黒色の中粒砂質腐植質土の境界面に沿って東西の幅約３～４ｍ、南北約15ｍにわたって発達しているが、境界面より離れる（西側へ向かう）と変形構造はみられない。泥質堆積物の集合片は、砂層内部の堆積構造とはほとんど無関係に全く不規則な形で含まれている。集合片は平均数㎝程度の角礫状を呈し、淘汰は悪く配列に規則性は認められない。Ｂ区では、遺物包含層である黒色の中粒砂質腐植質土を切る砂脈が多数確認された。これは地震により間隙水圧の高くなった砂が構造的に弱い部分をめがけて貫入したものである。また、ＳＤ79では遺構を埋積する層厚約25㎝のシルト中にコンボルート葉理がみられた。このコンボルート葉理や泥質堆積物の集合片という現象は、共に地震などで繰り返し応力を受けた堆積物が粒子間応力（有効応力）を失って浮遊・流動状態になり形成されるものである。田所遺跡でみられるコンボルート葉理の特徴には次のようなものがある。

①砂層全体または単層上部に発達する。

②褶曲はなめらかで小断層はみられないことが多い。

③褶曲は砂層の下部より上部で著しい。

④平行葉理や斜交葉理の変形でその存在がわかる。

田所遺跡では砂層の変形構造が顕著である。これは、田所地域が木曽川に近く地下水面も高いと想定され、砂層内の水は少なからず飽和状態にあったと考えられるからである。飽和した砂の液状化現象が地震などにより普遍的に生じることは、Seed & Lee（1966）などにより報告されており、本地域の現象も地震により生じたことは確実である。

（鬼頭　剛）



Ａ区液状化跡平面（南から）



Ａ区液状化跡断面（南から）

まとめ　今年度の調査結果を要約すると以下のようになる。

A～D区　1　弥生時代中期（Ⅰ期）から古墳時代前期（Ⅱ期）そして中世（Ⅴ期）にまたがる複合遺跡であるが、遺物・遺構の多い古墳時代前期が中心時期である。

2　本調査区は、犬山扇状地と沖積地とが交錯する扇端部上に立地している。検出した遺構から判断すると、集落等の遺跡の中心域はより東の高燥地に展開していると思われる。

3　検出遺構で注目されるＳＤ10は、等高線に沿うように走り集落中心域とを区画するように配置されている。

4　ＳＤ10とその北西部で確認された自然流路に挟まれた地域から多くの土坑群が検出された。土坑は規模（径及び深さ）の違いにより径250cm以上の大型土坑群と径200cm以下の中型土坑群の二群に分けられる。前者はＡ区中央部に集中（列をなす）傾向が認められるのに対して、後者は前者を取り囲むように南側に展開している。機能の違いを窺わせる。

5　遺構・遺物共に最も多いのはⅡ－ａ期であるが、これらが埋没した後、各調査区で規則性（規模、配列等）のある小溝群が検出されている。この段階がⅡ－ｂ期である。こうした遺構の大きな違いは、遺跡における大きな変動に起因したと考えられる。

6　これまでは、本調査区を従来通り「墳墓堂」を中心とした田所遺跡に包括してきたが調査の結果から別個の遺跡であることが明らかになった。今後は田所遺跡から切り放して北道手遺跡の名称を用いて報告することにする。

7　従来周辺地域で確認されていた地震痕は濃尾地震による噴砂のみであったが、本調査区のＡ・Ｂ区において新たにコンボルート葉理が確認された。　（高橋信明）

E～K区　8　Ｈ区の北側に位置する92Ａ区の調査で検出された古墳時代の水田遺構の区画は比較的小区画であり、矩形を基本としつつも不定形なものである。今年度の調査では南北方向と東西方向にほぼ直線的に走りＨ区で直交する２本の大畦畔を軸として、この畦畔による区画を矩形に分割する小畦畔からなる水田遺構が確認された。大畦畔は地形的な制約がないことから今年度の調査区外に延びることが予想され、大畦畔のあり方や包含層の広がりから広範囲にわたる計画的なものと考えられる。周辺の調査によってこの時期の水田のあり方を検討する必要がある。

9　中世については昨年度の調査で一辺400ｍの方形に巡る大形の溝が検出され、今年度の調査ではこの溝に囲まれた集落の一部が確認された。Ｇ区に集中して検出されたこの時期の遺構がこれにあたるが、Ｇ区と同様にこの大溝に近接した位置の北隣のＨ区からは集落に関係する遺構は南端部以外は検出されていない。Ｇ区の位置は、溝の方形の区画の中で南西のコーナーにあたり、集落域において特殊な部分にあたるためと考えられる。また、先年度の調査で検出された墳墓堂の区域の南西部にあたっているＥ区の調査により、南端を画する溝や特殊な墓域を画する方形区画溝などが検出され、その様相が明らかになった。中世集落の構成と墳墓堂との関連を明らかにすることが今後の課題となるものと考えられる。　（酒井俊彦）

大 毛 池 田 遺 跡

調査の経過　大毛池田遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に広がりが認められる遺跡である。

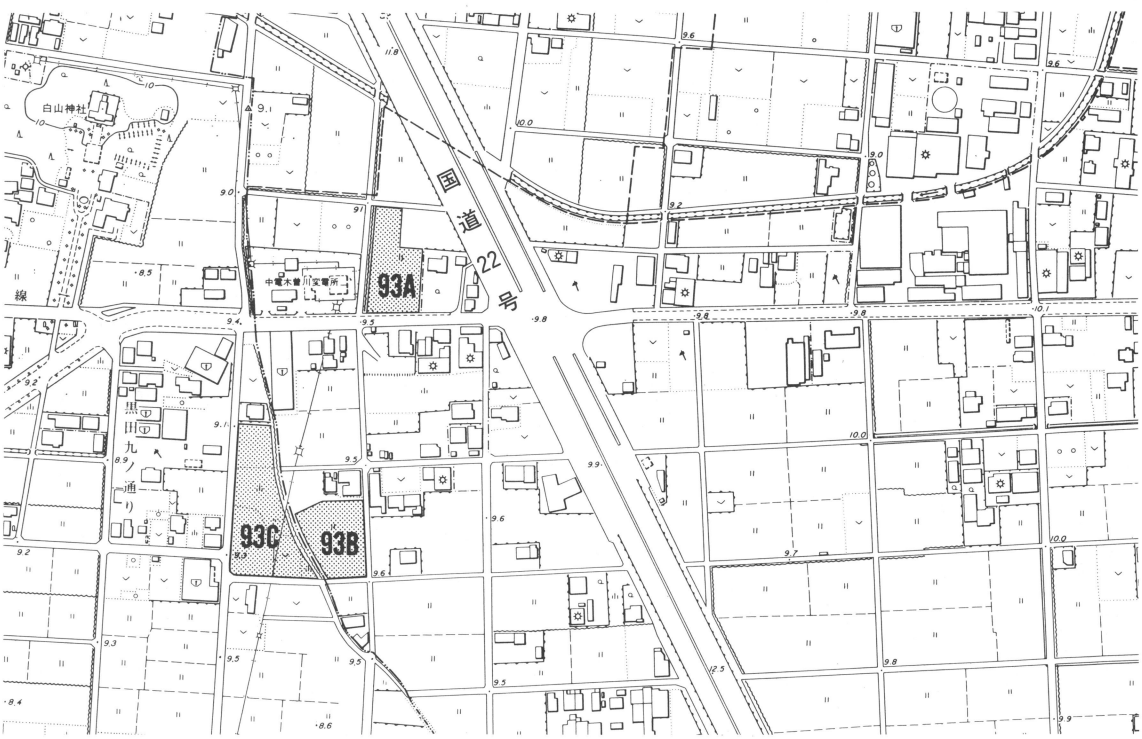
発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通した委託事業として、本年４月より7600㎡をＡ～Ｃの３調査区に分割して調査を実施した。

調査の概要　検出された遺構と遺物は、古墳時代前期（Ⅰ期）、古代（Ⅱ期）、中世（Ⅲ期）、戦国から近世（Ⅳ期）の４時期に大きく区分することができ、概ね１層：耕作土、２層：暗灰黄色シルト、３層：暗灰黄色シルト、４層：灰褐色粘土、５層：暗紫褐色粘土、６層：灰オリーブ粘土、７層：灰褐色中粒砂の順に堆積する基本層序を確認した。概ねⅡからⅣ期の遺構は２層上位で、Ⅰ期の遺構は５層上位で検出した。

調査の結果、以下の点は注目することができよう。

①　現状において県内最古と考えられる古墳時代前期の水田跡を広大な面積で確認できたこと。

②　Ⅱ期に属する遺構として、基壇を有すると考えられる建物跡を検出し、同時に鎮壇具と推定される銅椀・小形壺型土器を確認したこと。　（服部信博）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）

A区Ⅰ期の遺構・遺物

今回の調査では、調査区東半部分下層から古墳時代前期の水田遺構を良好な形で確認することができた。当該時期の水田遺構の検出例としては県内では最古の例となるきわめて重要な発見となった。

水田跡は、最初に南北方向に延びる大畦畔の高まりを検出し、次いでこれに沿って整然と配置された長方形状の小区画水田を確認することができた。

大畦畔は幅が80cm、高さが18cm、断面は台形状を呈し、両側には取水・排水に利用されたと思われる浅い溝を伴っていた。この大畦畔は、小畦畔とは規模、機能とも明らかに異なっており、また、この大畦畔に規制される形で小区画水田が整然と配置されている点よりみて、水田を構築する際、最初の段階に設定されたことが予想される。

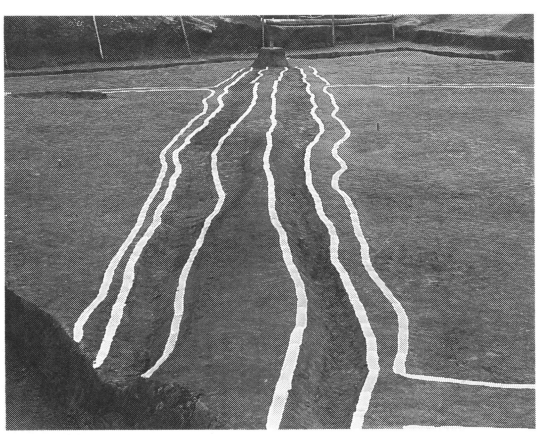
小畦畔は平均して幅30cm、高さ5cm未満で所々が低く途切れ、水口が設けられていた。水田一区画の規模は、最大（ＳＴ07）が16×8m、最小（ＳＴ10）は6×3mとかなりばらつきがみられるものの、大畦畔から遠ざかるにしたがって面積が小さくなる傾向が認められた。

なお、水田経営にとって最も重要な水回しの問題については、北方から南方へ緩やかに傾斜する傾向は認められたが、判然としなかった。

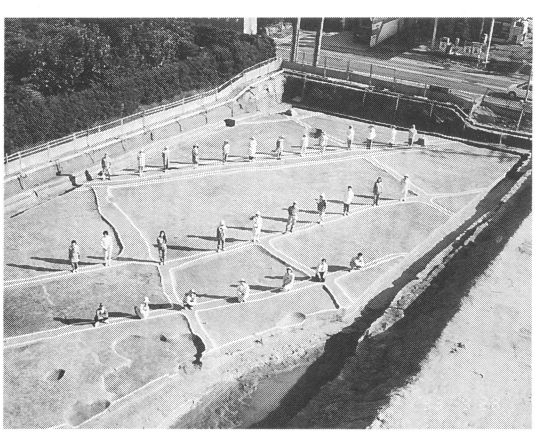
水田からの出土遺物は土師器台付甕が大半であり、僅かに高杯の小片が1点みられた。遺物は畦畔のコーナーに近い地点に集中する傾向がみられ、ＳＴ06からは「く」字甕、Ｓ字甕がほぼ一個体のまとまりで、ＳＴ10、13の遺物集中地点でもＳ字甕口縁部片が数個体出土した。いずれも廻間Ⅲ式期後半に比定することができ、比較的存続期間の短い水田と想定できよう。また出土土器の器種、分布地点が限られ、遺物集中地点の周囲に炭化物の広がりもみえることから水田耕作に関わるなんらかの祭祀が行われていた可能性も考えられよう。

なお、Ｂ・Ｃ区下層においても古墳時代前期の水田遺構が確認されており、Ａ区水田との関連が注目される。

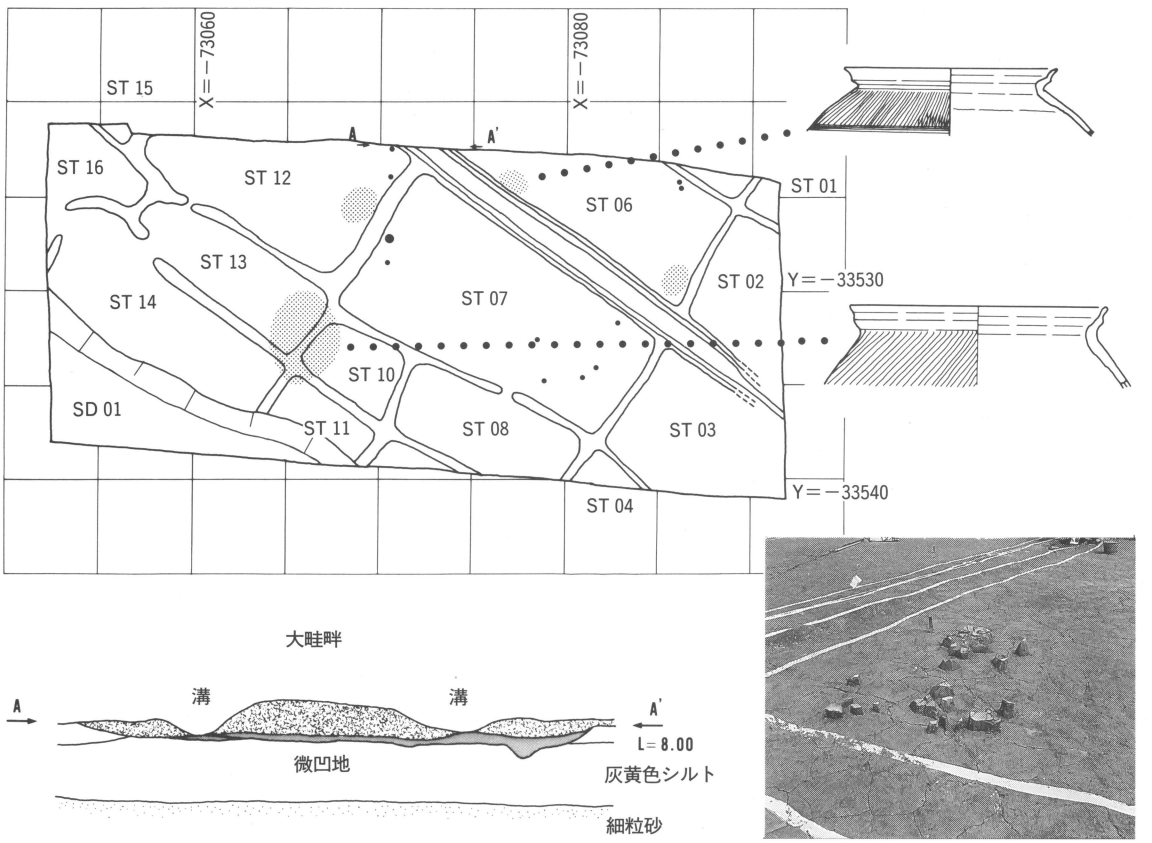
（北條真木）



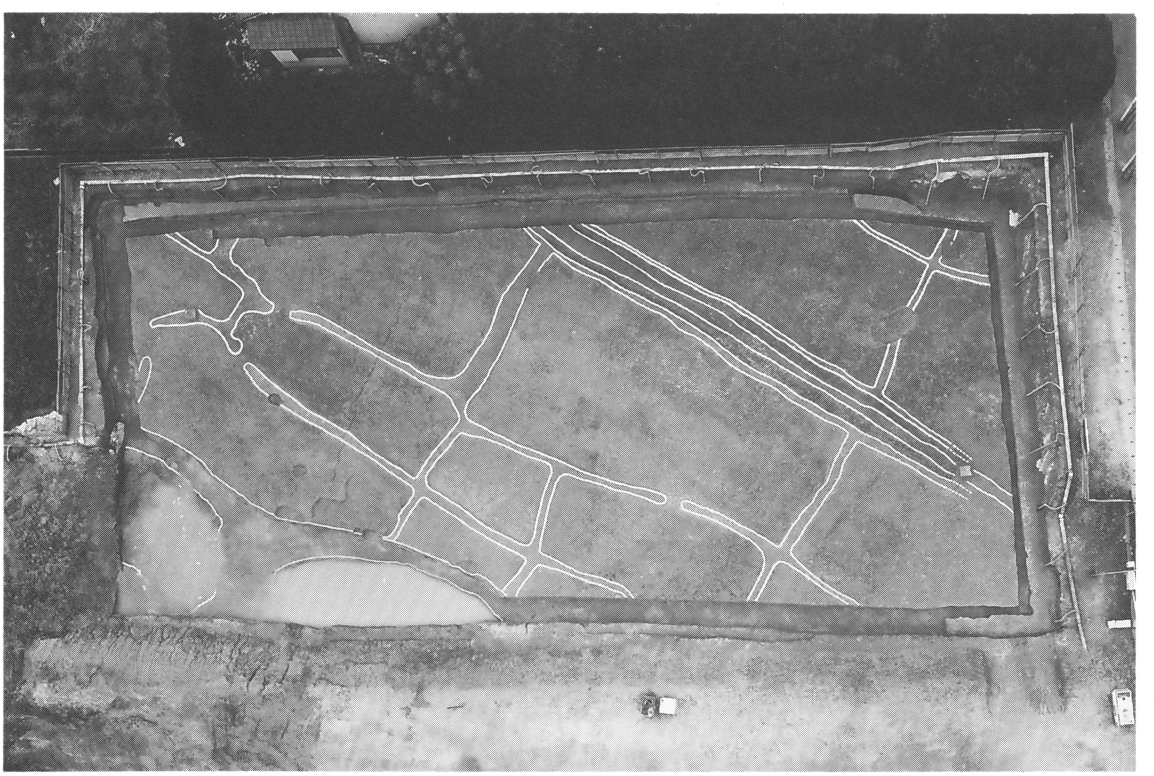
水田大畦畔（東から）



水田全景（西から）



第２図　Ⅰ期遺構配置図（1/400）・大畦畔断面模式図　　ＳＴ06遺物出土状況

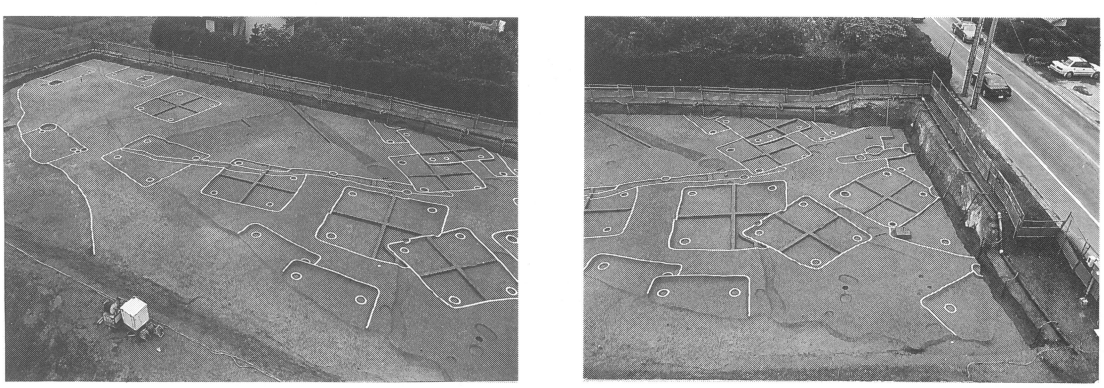


水 田 全 景

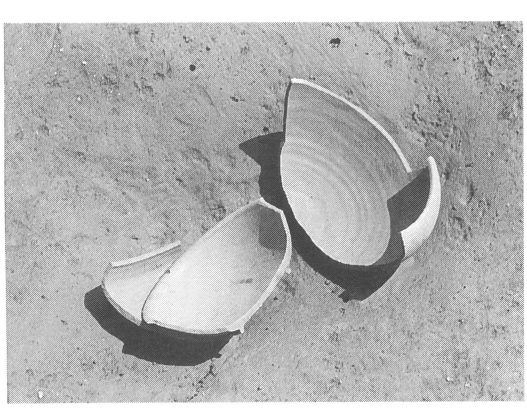
II～Ⅳ期の遺構　II期の遺構としては、調査区東半部分において竪穴住居跡19棟を検出した。すべて方形プランを呈していた。平面形の軸線方向からすると二つのグループに大別でき、一つはN－0°－Eを中心とするもので10棟あり、もう一つはN－40°－Wのもの９棟である。平面形の一辺の長さは、前者のグループが約4.5～5.6mで、後者のグループが約3.8～4.8mとなり、平面規模にも相違がみられる。ＳＢ13からは火を受けた丸石が出土し、ＳＢ14では炭化物を含む小土坑を確認したが、かまどなどの遺構は確認できなかった。遺物は少量であったが、ＳＢ12・13・14から８世紀後半から９世紀前半の須恵器・灰釉陶器が出土している。

III期の遺構は調査区西半全体に展開していたが、主要なものとしては溝ＳＤ01・03があげられる。ＳＤ01は幅約５m、北端では９mと広がり、最深部では1.1mを測る。ＳＤ03は幅約1.6m、深さ約0.4mで、ＳＤ01から西側に約８mの間隔をおいて平行に走っている。これらの溝からは13～14世紀に相当する灰釉系陶器やまれに輸入陶磁器などが出土しており、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

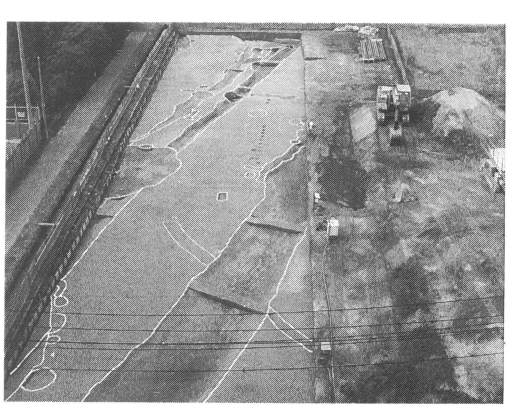
Ⅳ期の遺構としては調査区北端の土坑ＳＫ06があげられる。深さは1.1mで、埋土からは一気に埋めた状況がうかがえる。また、検出面より0.6mほど下層の青灰色砂層からは、建築部材の転用材と考えられる木組が出土した。　（今西康二）



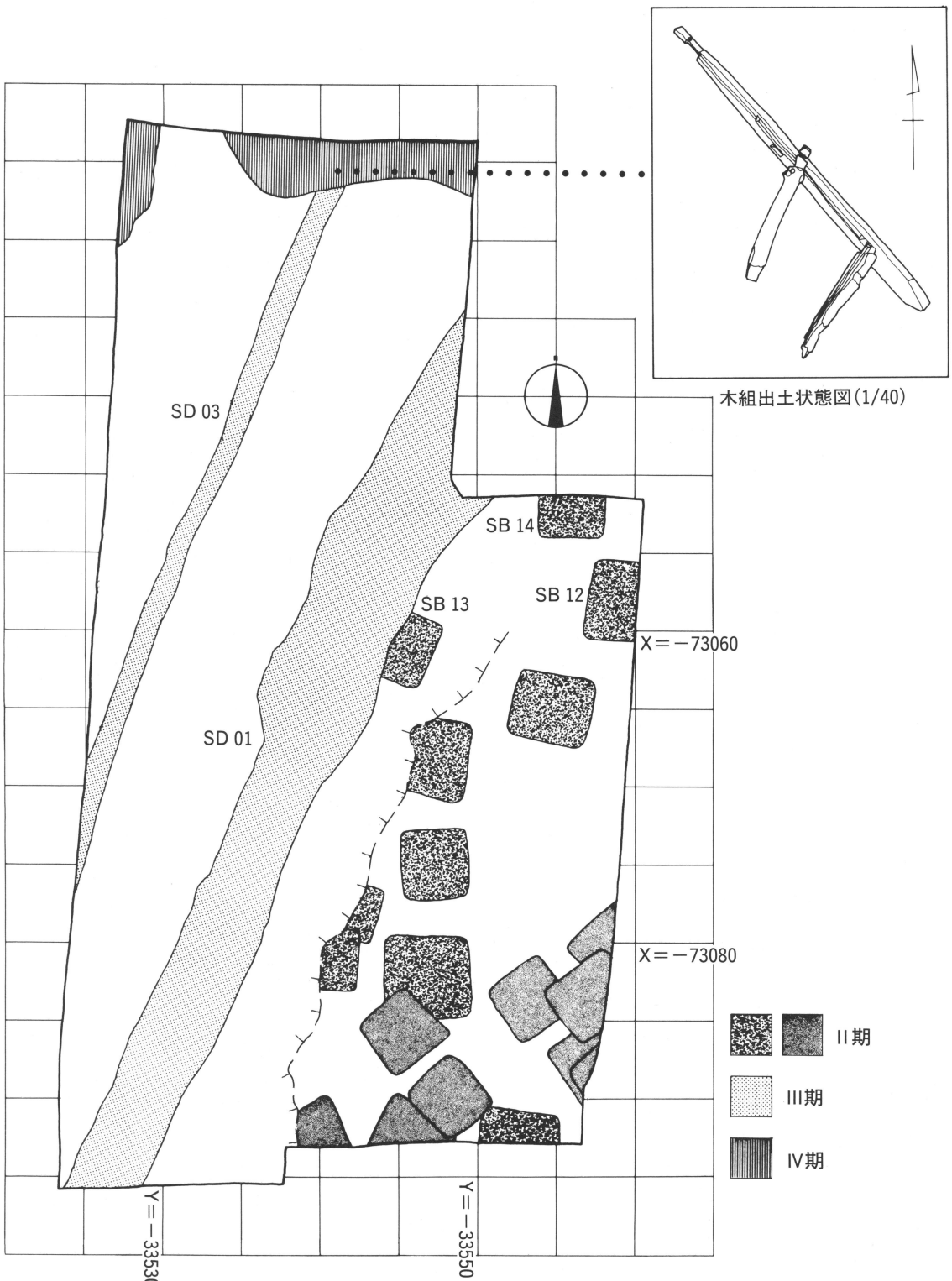
II期　竪穴住居（西から）



ＳＢ12遺物出土状況



III～Ⅳ期遺構全景



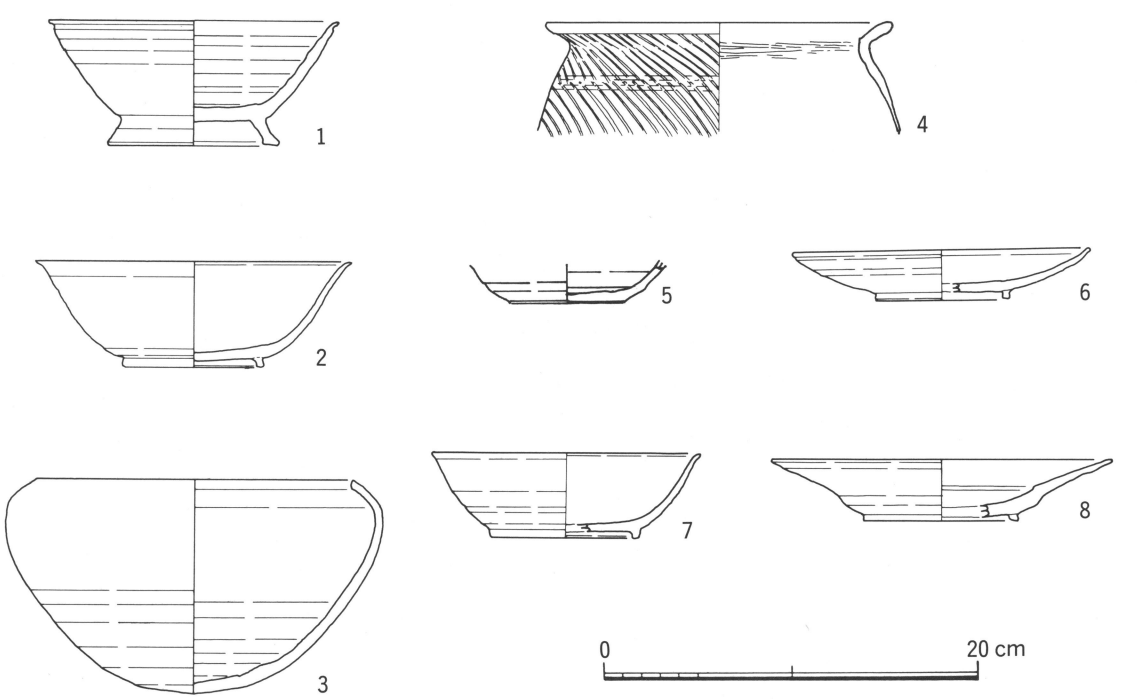
第３図　Ａ区Ⅱ～Ⅳ期主要遺構配置図（1/400）

II～Ⅳ期の遺物　調査区の大部分が近世以降の水田によって大幅に削平され、遺物包含層の残存状況がきわめて悪く、遺物の出土総数は全体的に少なかった。検出された竪穴住居のうちＳＢ12、13、14からは８世紀後半から９世紀前半に比定される良好な資料を得ることができた。

II期の遺物としてはＳＢ12中央から、Ｋ－14号窯式期に併行する灰釉の椀と若干時期がさかのぼる可能性が考えられる須恵器鉄鉢がセットで出土した。鉄鉢は胎土が精良で淡い青灰色を呈し、体部下半部にヘラ削り調整が施されている。ＳＢ13からは、高台部分が高く、口縁外面に断面が丸みを帯びた沈線をめぐらす特異な形の須恵器杯や墨書のある底部糸切りの須恵器杯が出土した。ＳＢ14からは土師器の甕、灰釉陶器の皿などが炭化物を含む小土坑から少量出土している。

Ⅲ期の遺物は概ね調査区全体で検出された。主要な遺構と考えられるＳＤ01、03からは若干の須恵器甕、壺、杯、灰釉陶器の椀、皿や磁器片などが混じるものの、13～14世紀に相当する灰釉系陶器を中心とする遺物が出土し、なかには底部に墨書が施された資料もみられた。

Ⅳ期では、ＳＫ06から、主に灰釉系陶器椀、皿類と大窯II期以降に属すると考えられる天目茶碗や擂り鉢などの施釉陶器が出土した。また、この土坑の最下層からは建築部材の一部とみられる木組が出土した。ほぞを用いて組み合わされているが、その他にも数ヵ所みぞやほぞ穴があり、廃材を利用した転用材と思われる。　（北條真木）



第４図　II期出土遺物（1．5：ＳＢ13、2．3：ＳＢ12、4．6：ＳＢ14）

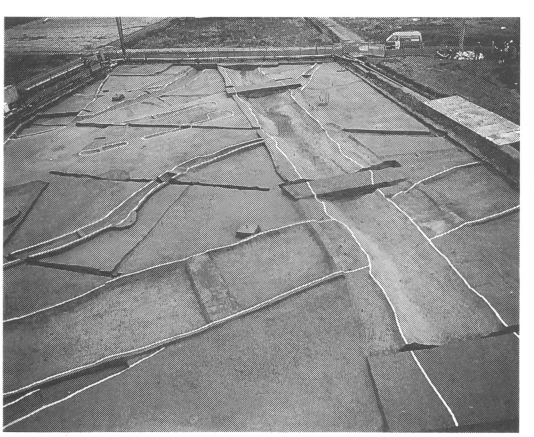
B区の遺構　Ⅰ期の遺構としては、溝を２条確認した。ＳＤ14は調査区の南端から東に向かって弓状に延び、幅は１～２ｍ、深さ50cm程度でＵ字形の断面形態を呈する。埋土は暗灰黄色シルトで、遺物としては須恵器甕が出土した。ＳＤ18は調査区の北端から南西へ延び、自然流路（ＮＲ01）に接する。幅は60～90cm、深さ30cmほどでＵ字形の断面形態を呈し、須恵器が出土した。また調査区の下層では、Ａ区と同様に古墳時代前期の水田跡が確認され、２条の溝とそれに規制される形で整然と配置された小区画水田跡が検出された。

Ⅱ期では、溝と基壇状の施設を持つ建物跡（ＳＸ10）を確認している。ＳＤ10は調査区の南東から北西へ延び、ＳＤ14と接する部分で屈曲する。幅は溝の東端が調査区外のため特定できないが、６ｍ前後と推定される。深さは50cm程で皿状の断面形態を呈し、須恵器甕が出土した。ＳＸ10は、４ｍ×12ｍの長方形の平面形態を呈し、調査区の下層で検出された自然流路かとも思われる溝の上に黄褐色粘質シルトの盛り土を行い、基壇状の施設を形成し、周囲に溝を配置し区画した建物跡と推定される遺構である。この区画の上面から鎮壇具と考えられる須恵器の小形壺、および銅製の椀蓋が出土している。また、周辺からは中小のピットが多数確認された。

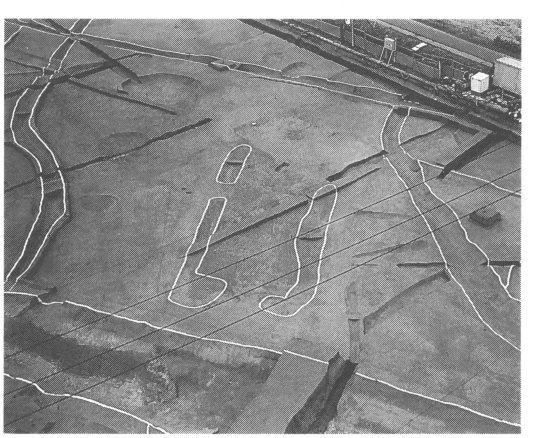
Ⅲ期の遺構は調査区全般で認められたが、主要な遺構としては、ＳＤ02・08とＳＫ16があげられる。ＳＤ02は調査区の西半を北西から南東にかけて貫き、出土遺物からみて13世紀に掘削され15世紀には廃絶したと考えられる。幅４～６ｍ、深さ70cm程であり、下層では須恵器、灰釉陶器など古代の遺物も多く含みながら13世紀代を中心とする灰釉系陶器が出土し、上層からは15世紀代の陶磁器片が出土している。ＳＤ08は幅約50cm、深さ25cmを測る。Ｕ字形の断面形態を呈し、埋土は灰色シルトで、遺物は13世紀代の灰釉系陶器主体であった。ＳＫ16からは灰釉系陶器が出土した。

Ⅳ期については、調査区の北東隅で、現代の水田耕作土、床土下から近世以降の水田面が確認された。

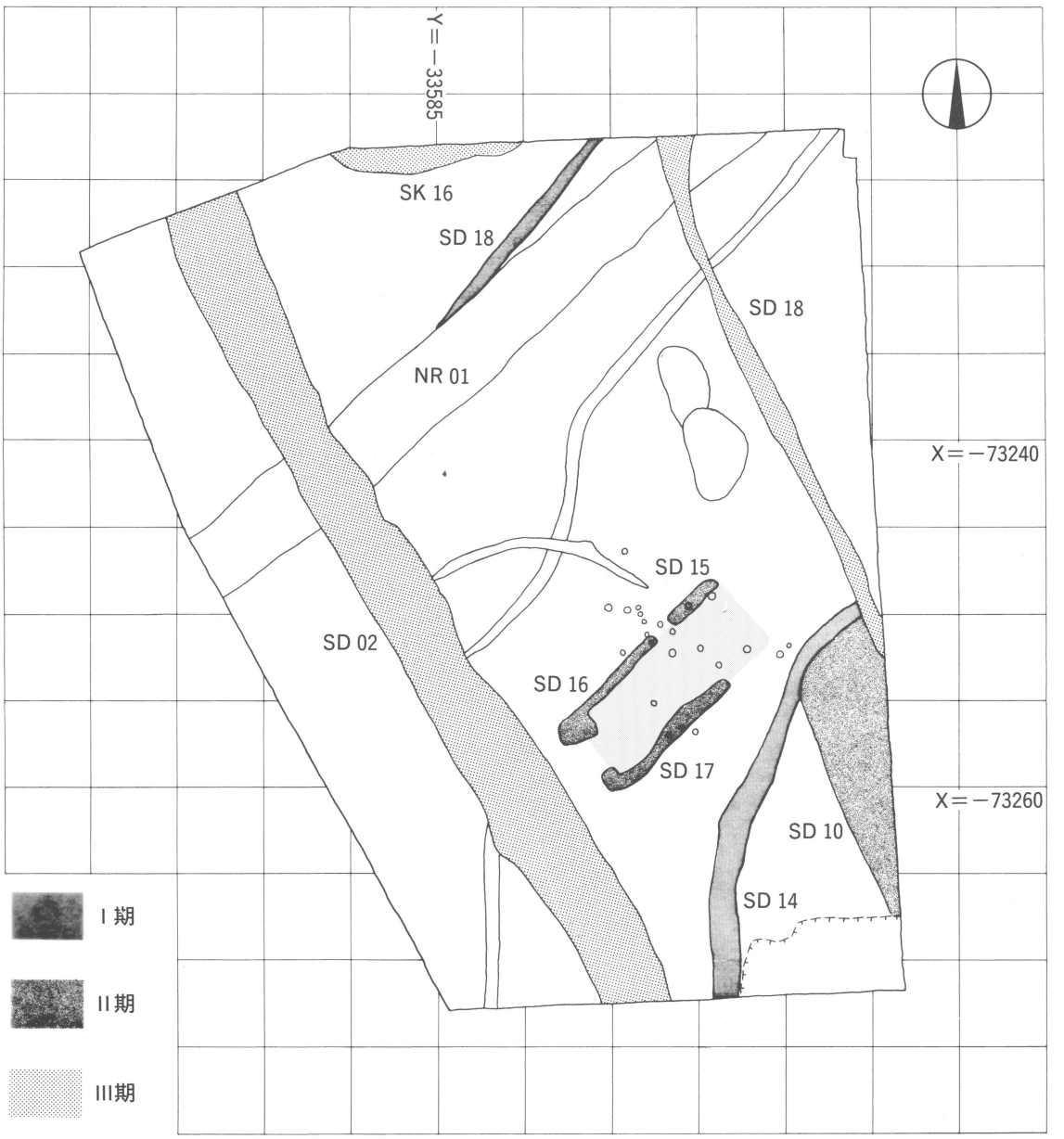
（黒田哲生）



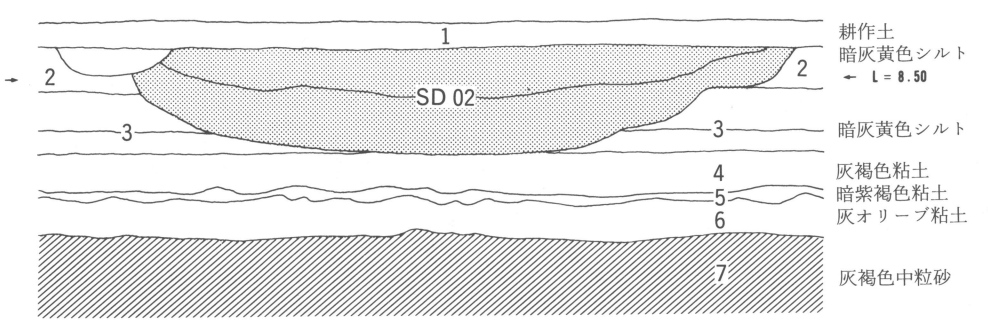
全景（北から）



ＳＸ10（西から）



第５図　93Ｂ区遺構配置図（1/400）



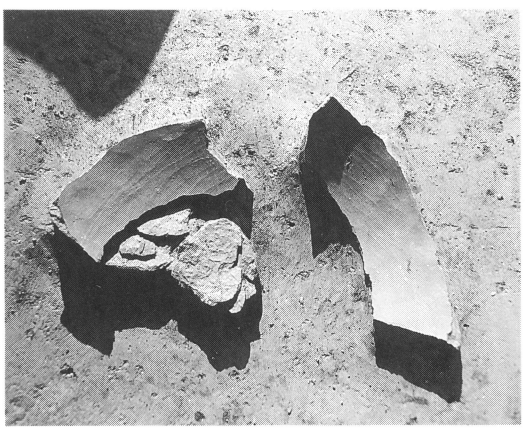
第６図　93Ｂ区基本層序（1/50）

B区の遺物　Ⅰ期の遺物では、須恵器大形の甕がＳＤ14から出土している。遺物は淡い青灰色を呈し、胎土は緻密で精良だが剥離するように割れ易く焼成はあまり良好ではない。他に包含層中より、須恵器高杯の脚部などが出土している。

Ⅱ期では特筆すべき資料としてＳＸ10より銅椀蓋の破片２点が出土しており、同一個体と考えられる。これは天井部を欠くものの復元すると口径11.6cm、残存高1.6cmとなりやや小形の感がある。体部中位に稜をもち、口縁端部は鋭く屈曲する。これとセットになる椀身は発見されなかったが、後出の縁釉稜椀のモデルとなっていく金属器の一例として貴重な資料といえよう。またＳＸ10からはＯ－10号窯式期に併行すると思われる須恵器の小形壺などが出土している。小形壺は口頸部を欠損しており、意図的に欠いた可能性も考えられる。これらは銅椀とともに鎮壇具としての性格を推定することができよう。

そのほかⅡ期に属する包含層からの出土遺物として、Ｋ－14号窯式からＫ－90号窯式期にほぼ併行すると思われる灰釉陶器の椀、段皿、耳皿などがあげられる。

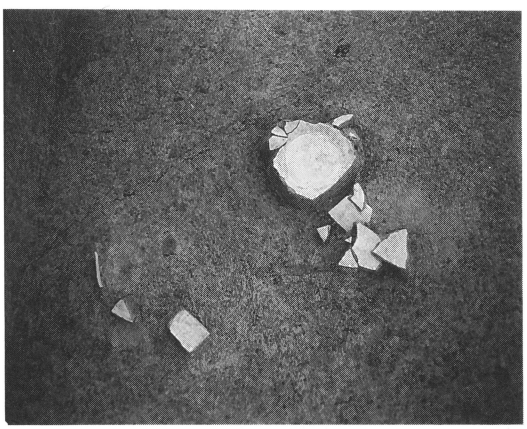
Ⅲ期の遺物は13～14世紀に相当する灰釉系陶器の椀、皿が多数出土し、他に伊勢型鍋、輸入陶磁器、土錘などが出土している。　（北條真木）



ＳＤ14　須恵器甕出土状況

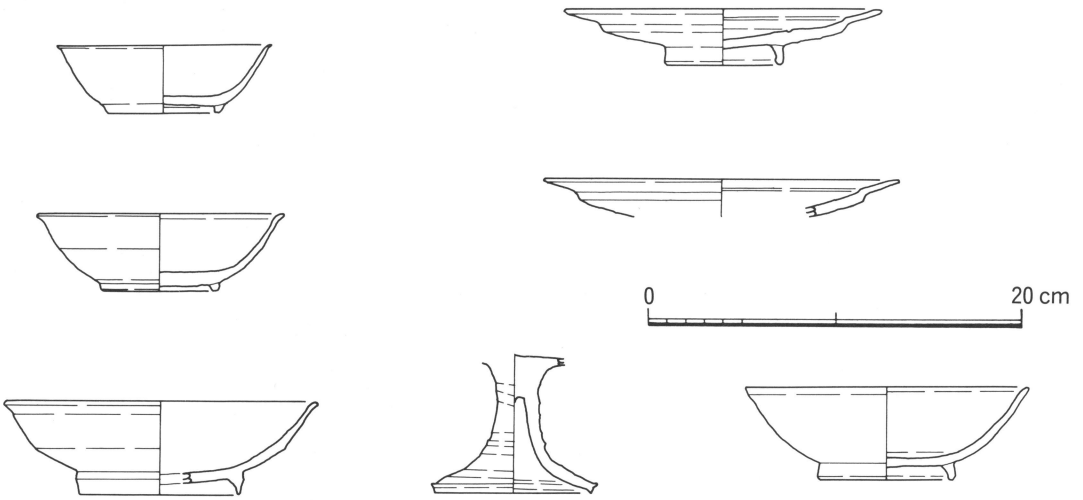


銅椀蓋片出土状況





ＳＸ10　遺物出土状況



第７図　II期出土遺物

まとめ　今回の調査ではＩ期（古墳時代前期）～Ⅳ期（戦国から近世）の遺構・遺物を確認することができた。以下、今回の調査で判明した点を各時期別にまとめておきたい。

Ｉ期　大きな成果として、現状において県内最古の事例となる水田遺構を広大な面積で確認できたことが挙げられる。今回の調査では特徴的な大畦畔を検出し、これを基本とした計画的な小区画水田配置のあり方について認識を深めることができた。しかし、水田経営において最も重要な水回しの問題については、十分に解明することができなかった。また、これらの水田経営に携わった直接的な集落の存在も不明である。今後の検討課題である。

II期　検出された遺構は概ね奈良時代および平安時代に分けられる。前者では基壇状の施設を有し、銅椀・小形壺型土器など鎮壇具と推定される特殊な遺物を出土した建物跡を検出することができた。また、後者では２グループに分かれる竪穴住居から構成される居住空間を確認した。遺跡の周辺は古代大毛郷との関連が注目される地域でありながらも具体的な史・資料に欠き、その実態は不明な地域であった。これら新たに確認された遺構・遺物が直接的にそれとつながるとは言えないが、尾張北西部の古代史を解明するうえで貴重な発見となった。

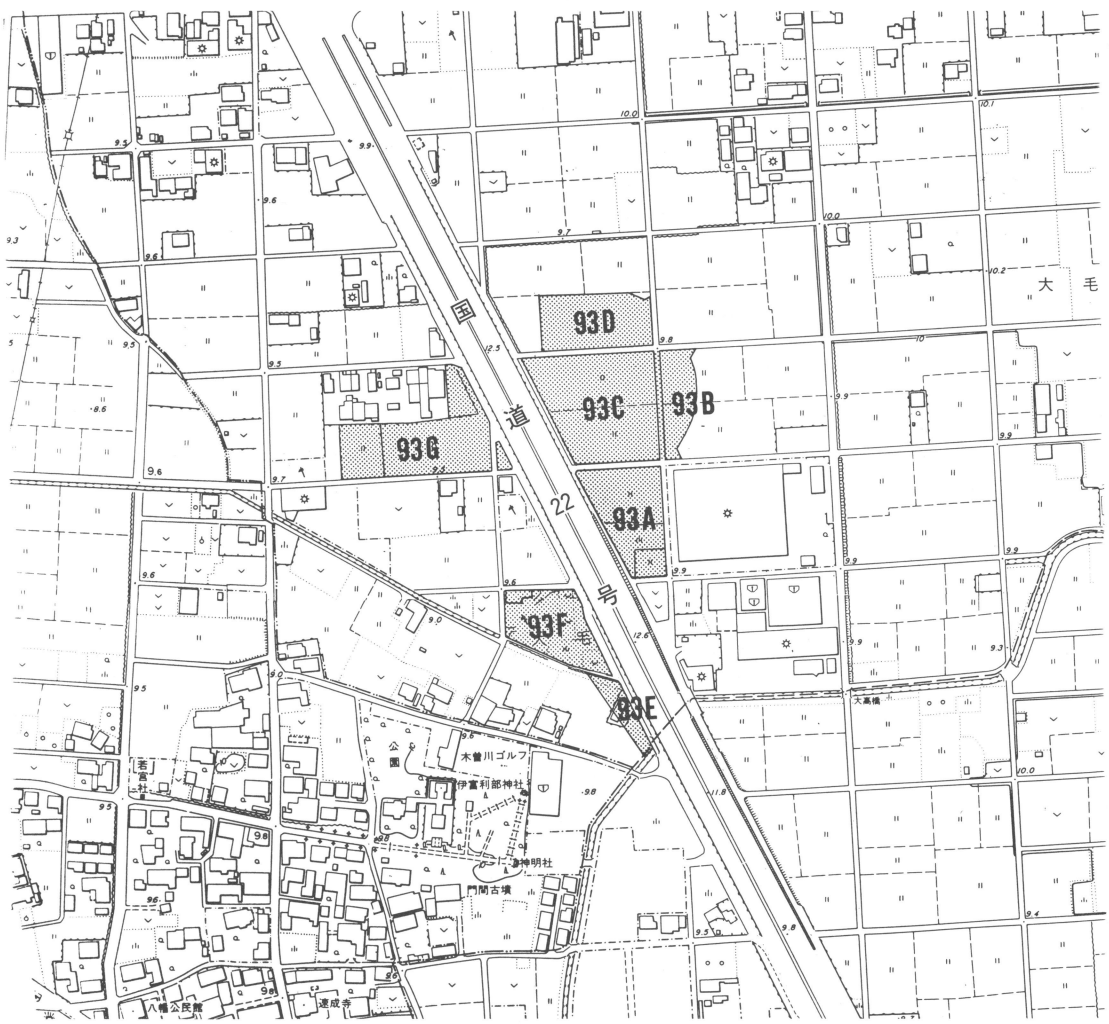
Ⅲ期　Ａ・Ｂ区ともに幅５ｍ以上の溝を検出したが、その性格、掘削の目的などについては判然としない。

Ⅳ期　Ａ区において土坑状の落ち込みを確認し、廃材を利用した木組を検出したが、他に明瞭な遺構はみられず、その展開については不明な点が多い。（服部信博・北條真木）

大 毛 沖 遺 跡

調査の経過　大毛沖遺跡は、広大な濃尾平野のほぼ中央部に位置する一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防上に広がりが認められる遺跡である。遺跡の周辺には、縄文晩期のタイプ・サイトとして著名な馬見塚遺跡、古墳時代後期に築造された浅井古墳群や尾張でもめずらしい集石遺構が確認された大塚遺跡、古代製鉄遺構が確認された清郷遺跡など数多くの遺跡が分布している。

発掘調査は、愛知県一宮市と富山県小矢部市をむすぶ東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成５年４月より17102㎡をＡ～Ｇの７調査区に分割して調査を実施した。調査の結果、大きく古代（Ⅰ期）、平安時代末から鎌倉時代（Ⅱ期）と室町時代（Ⅲ期）の３時期に区分される遺跡であり、



第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：5000）

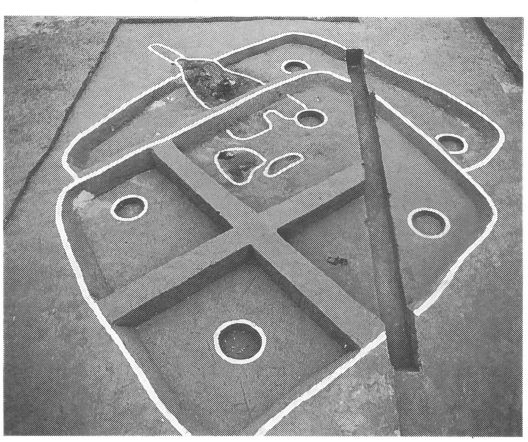
さらにⅠ期については、古墳時代終末から奈良時代（Ⅰａ期）および奈良時代末から平安時代（Ⅰｂ期）に細分できることが明らかとなった。

調査の概要　遺跡の基本層序は、調査区により若干異なりをみせるが、概ね上位より１層：耕作土、２層：淡灰褐色シルト層、３層：灰色砂質シルト、４層：灰色シルト層の順に堆積し、基盤面と考えられる５層：灰褐色砂層に至る。Ⅱ期およびⅠｂ期の遺構は２層上位で、Ⅰａ期の遺構は３層上位で検出した。

Ａ・Ｃ・Ｇ区では、Ⅱ期の遺構を中心に検出でき、Ｃ区北西端からＧ区南東端に分布する墓域とその両側の微高地上に展開する居住域が明らかとなり、尾張北西部における中世集落の様相を把握する良好な情報を得ることができた。また、下層の調査では奈良時代の竪穴住居を中心とした遺構群を確認している。Ｅ・Ｆ区は、遺跡の南端に位置し、希薄ながらもⅡ期およびⅢ期に属する溝・土坑・集石墓などを検出した。　（服部信博）

Ａ・Ｃ区の遺構（Ⅰ期）　Ⅰ期の遺構としては、Ａ区北端を頂点に南に向けて徐々に下降する灰色砂質シルト層上において、住居跡９棟、大溝３条、溝26条、井戸１基及び土坑１基を確認し、さらに自然流路２条を検出した。

住居跡については、ＳＢ01・ＳＢ06・ＳＢ07の３棟と、ＳＢ08・ＳＢ09の２棟が、それぞれ重複して検出された。ＳＢ01・ＳＢ06・ＳＢ07は調査区北西角で検出されたため、規模は不明瞭である。ＳＢ01は奥行80㎝、幅90㎝の、北側に開口部をもつカマドを有しており、カマド内から出土した土師質甕の口縁部より、Ⅰｂ期の竪穴住居と考えられる。ＳＢ06においても床面に炭化物が帯状に広がり、土師質甕を中心とした遺物が出土した。ＳＢ07からは灰釉陶器の段皿、土師質甕及び灰釉陶器をかぶせた状態で角柱状の石が出土した。



Ａ区　ＳＢ08、ＳＢ09完掘状況



Ａ区　ＳＢ07角柱状の石出土状況

3棟の年代は、その切りあい関係からＳＢ01が最も古く、次いでＳＢ06、さらにその後にＳＢ07が位置づけられ、少なくとも2度の造り替えが行われたことを想定できる。また井戸（ＳＫ06）からも灰釉陶器が多数出土しており、竪穴住居と同様にＩｂ期の遺構と思われる。ＳＢ08・ＳＢ09はともに約5ｍ×約4ｍの規模をもち、柱穴も確認できた。ＳＢ09からは奥行2.3m、幅1ｍのカマドを検出し、遺物も焼土近辺から集中して出土した。ＳＢ08からは須恵器の杯蓋が出土しており、これらの竪穴住居はその出土遺物からＩａ期のものと考えられる。

調査区の西寄りに住居跡が展開したのに対し、東寄りの位置では「大溝」と多数の「並行する溝」が検出された。「大溝」についてはＳＤ01が北東～南西を結ぶ方向で、ＳＤ02が北西～南東を結ぶ方向で延び、直交している。両者ともに幅約1ｍ、深さ約30cmのものである。さらにＳＤ03はＳＤ01と同方向に延び、幅・深さともにほぼ同様である。「並行する溝」はいずれも幅約50cm、深さ5cm前後～20cm前後で、「大溝」に区画されるかのようにＳＤ02と同方向に、整然とまさに畝状に配置されていることから、この区域をＩａ期の畑地と推定することも可能である。

調査区南寄りの区域では、自然流路がやはり北西～南東を結ぶ方向で2条検出された。大溝との切りあい関係を考慮すると、古墳時代以前の流路であったと思われる。

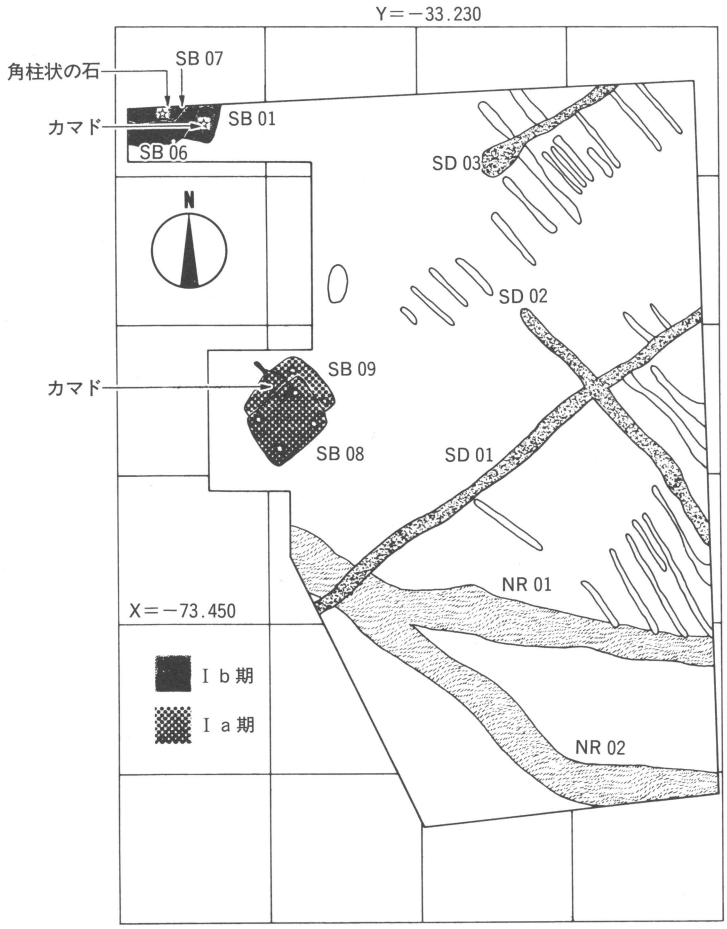
なお、Ａ区の北に隣接するＣ区において検出したＳＸ01・ＳＫ09についても、灰釉陶器及び土師質甕を出土しているので、これもＩ期の遺構として加えておきたい。

以上のことから、Ａ区及びその周辺の調査区では、居住域・生産域及び自然流路という生活環境を構成する諸要素が確認されたが、古代における集落景観の全体像を構築するためには、さらに今後の調査の成果が期待されるところである。　　（小池一徳）

（II期）　II期の遺構は、Ｃ区の中央を流れるＩ期末に埋没した自然流路を挟んで、北西から南東にかけて広がる微高地部分の第2層（淡灰褐色シルト層）上に展開する。検出した遺構は、溝76条、井戸8基、土坑68基、大型土坑1基、大型竪穴状遺構4基、ピット53基を数える。

Ａ区では、調査区の中央部でコ字状に折れ曲がる溝ＳＤ14・17を検出した。この溝の西側からは、南北方向に並行する十数条の溝が確認された。これらの溝はいずれも幅約30cm～40cm・深さ7cm前後で、畝状に並ぶものであった。また、この溝に伴って昆虫塊を7ヶ所で確認した。コ字状の溝の北側からは、大型土坑ＳＸ01や井戸ＳＫ04・53を検出した。ＳＸ01は、約7ｍ×8ｍ・深さ1.1 ｍの不定形な擂鉢状の遺構で、煤の付着した灰釉系陶器や割れた河原石が多数出土した。ＳＫ04の基底部からは、井筒として転用された常滑の甕（13世紀）が完形品で出土した。この甕の上部には、口縁部に接して曲物が一段残っていた。また、畝状の溝の北側に位置する井戸ＳＫ10の基底部からも、曲物が良好な状態で出土した。遺物から見て、ＳＫ04と同時期のものと思われる。

以上のことから、Ａ区ではコ字状の溝の西側に畑地、北側に大型土坑や井戸を配した中世の生活環境が浮かび上がってくる。そうであるならば、この溝は何らかの意味をもった



第２図　Ａ区Ｉ期主要遺構配置図（Ｉ：500）



Ａ区　ＳＫ04（井戸）常滑甕出土状況



Ａ区　完掘状況

区画溝であった可能性が高い。区画溝の内側には遺構が少なく、その性格を特定するには今後の調査の成果を待たねばならないが、Ⅰ期の遺構の調査結果を踏まえ、あえて推定するならば居住域が考えられるであろう。

C区では、自然流路の南側で井戸を5基確認した。このうちSE03は、上部径約1m・下部径約20cm・深さ約1.2mで、約25cmの河原石からなる逆四角錐状の石組遺構を有しており、出土する遺物から13世紀頃のものと思われる。これに隣接するSK06は、基底部に曲物を有する井戸で、遺構内から煤の付着した灰釉系陶器の他、墨書土器や漆器椀・箸・刃渡り23cm・幅2.5 cmの小刀・板状木製品等が出土した。これらの遺物から見て、SK06もSE03と同時期と思われる。

またC区の南西部では、平均長軸約12m・短軸約8m・深さ80cmの大型の竪穴状遺構(SX02～05)を4基検出した。これらの遺構は、L字状の溝SD08やSD05・06及び01～04で囲まれた区域に2基が一単位の形で並んでおり、おそらくは倉庫的建物であろうと考えられる。遺構内からは、13世紀代の灰釉系陶器が出土している。

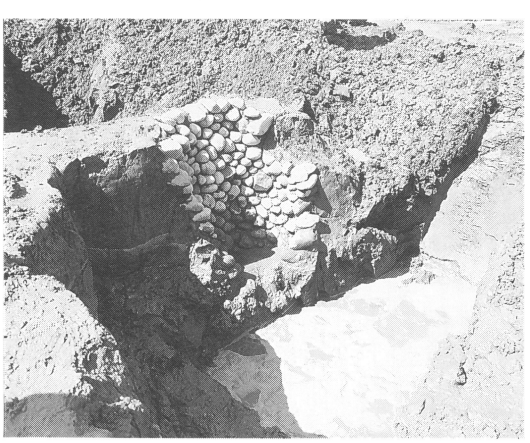
なお、SX04南端から、砂岩の角柱状の石を囲む状態でⅠb期の土師質甕が出土したが、これは、A区の北西端に展開する住居跡に伴うものであると考えられる。

一方、自然流路の北側では旧地形が北西に向かってしだいに下がっており、黒色有機土層の厚く堆積した低湿地が広がっている。G区の東側に続くこの低湿地の上面では、唯一方形土坑SK09を検出したのみである。遺構内からは、灰釉系陶器が若干出土している。

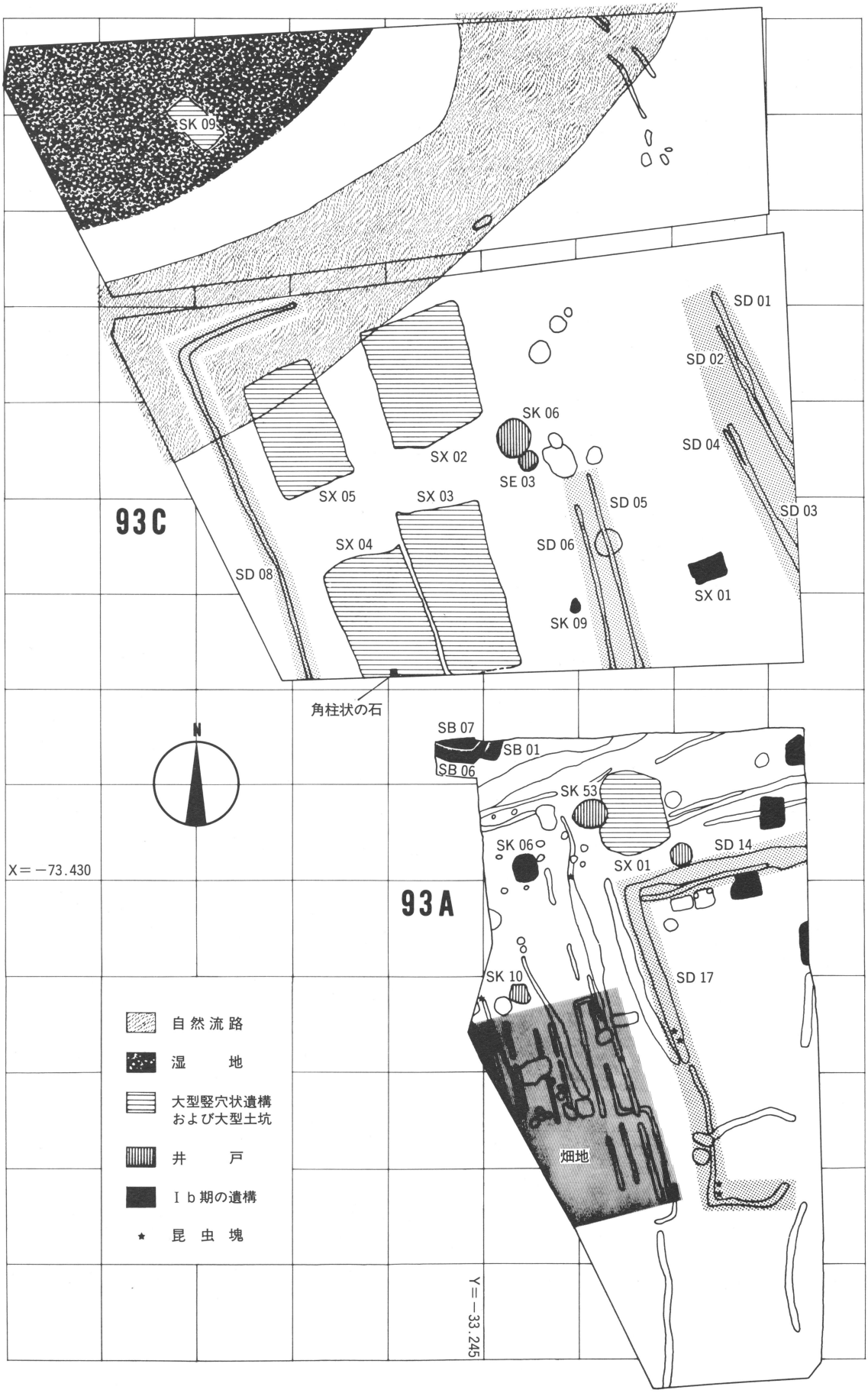
以上のことから、C区では、微高地上に区画溝で囲まれた広い区域が存在し、その内側に大型倉庫群と井戸が展開していた状況が推定される。また、C区の北西部からG区に続く湿地部分では、居住域とは異なる様相が展開していたと思われる。　　(栗林典昭)



Ca区　完掘状況



Ca区　SE03たち割り状況



第３図　Ａ・Ｃ区Ⅱ期主要遺構配置図（Ｉ：600）

A・C区の遺物

（Ⅰ期） Ⅰ期の遺物は、C区の南端からA区中央部分にかけて、Ⅱ期の遺物分布範囲のほぼ中央に細長い帯状になって分布する。Ⅰa期とⅠb期の時期差については、第2層上位と3層上位との間に洪水性の堆積が認められたため、層序で区別した。

Ⅰa期の遺物（第4図－9～11）は、岩崎17号窯式にほぼおさまる。図示した遺物のほかに、A区SB08・09からは、宝珠形の紐をもち、内面にかえりを設けた杯蓋や土師質甕などが出土しており、この時期の一括資料の好例といえよう。

Ⅰb期の遺物（第4図－1～8）は、高蔵寺2号～黒笹90号窯式にほぼおさまる。図示した遺物のほかに、A区SB01・06出土遺物など一括性の高い資料がある。

また、隣接する遺跡と比較すると、田所遺跡93G・H区や大毛池田遺跡93A・B区にはほぼⅠ期の遺構が展開する。近接のⅠa期に併行する遺跡としては、浅井古墳群があげられる。第5図－9は、C区第2層中より出土した緑釉陶器である。なお、Ⅰa期とⅠb期間の第2層からは、遺構に伴わないⅠ期の遺物が多く出土している。

（Ⅱ期） Ⅱ期の遺物は遺跡のほぼ全域に広がって分布する。時期的には鎌倉時代をほぼ網羅する。C区の大型竪穴状遺構・SX05出土資料（第5図－1～3）はⅡ期の初頭に位置する。出土状況は、上から3・2・1の順で重なっていた。この遺構の東に隣接するSX02からも同時期に比定できる資料が出土しており、遺構の配置が、2棟一単位で構築されていることの裏付けとなろう。なお、G区からも同様に大型竪穴状遺構が2棟一単位の配置で確認されている。遺物についてはⅡ期のものが若干出土し、共通する点が多い。今後の調査により遺構の位置・遺物などから、大型竪穴状遺構の性格が明らかになろう。

A区の大型土坑・SX01の遺物（第5図－4～6）はⅡ期の中心とし、一括資料として好例となっている。第5図－7は「南無大□」と表記してあり、卒塔婆であろう。また、煤の付着した遺物や栴檀（せんだん）の種子が多量に出土している。

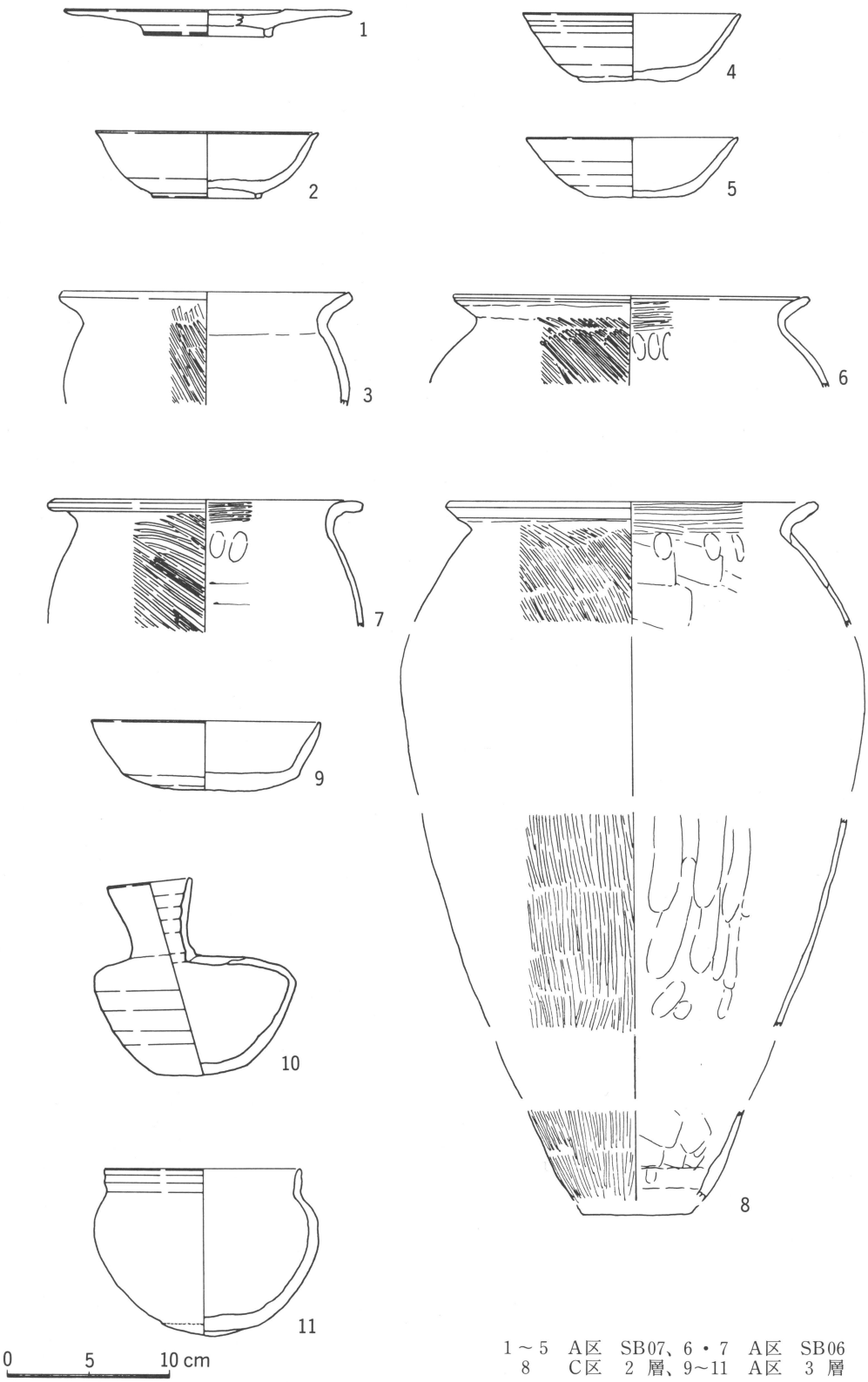
A区のSK04出土資料（第5図－8）は、常滑の甕であり、肩部に2カ所、底部にも焼成後の穿孔がある。これらの痕跡や土坑の底に据えられていること、口縁部上に曲物が残存していることから、この甕は井戸の井筒として転用されたものと考えられる。

このほか特筆すべき遺物としては、青磁・白磁など磁器の椀類、「元武通宝」をはじめⅡ期に属すると思われる宋銭が多数出土している。

（Ⅲ期） Ⅲ期に属する遺物は、A・C区ではほとんど出土していない。しかし、遺跡の西側に相当するF区では当該期の遺構に伴って古瀬戸（四耳壺）などが出土している。

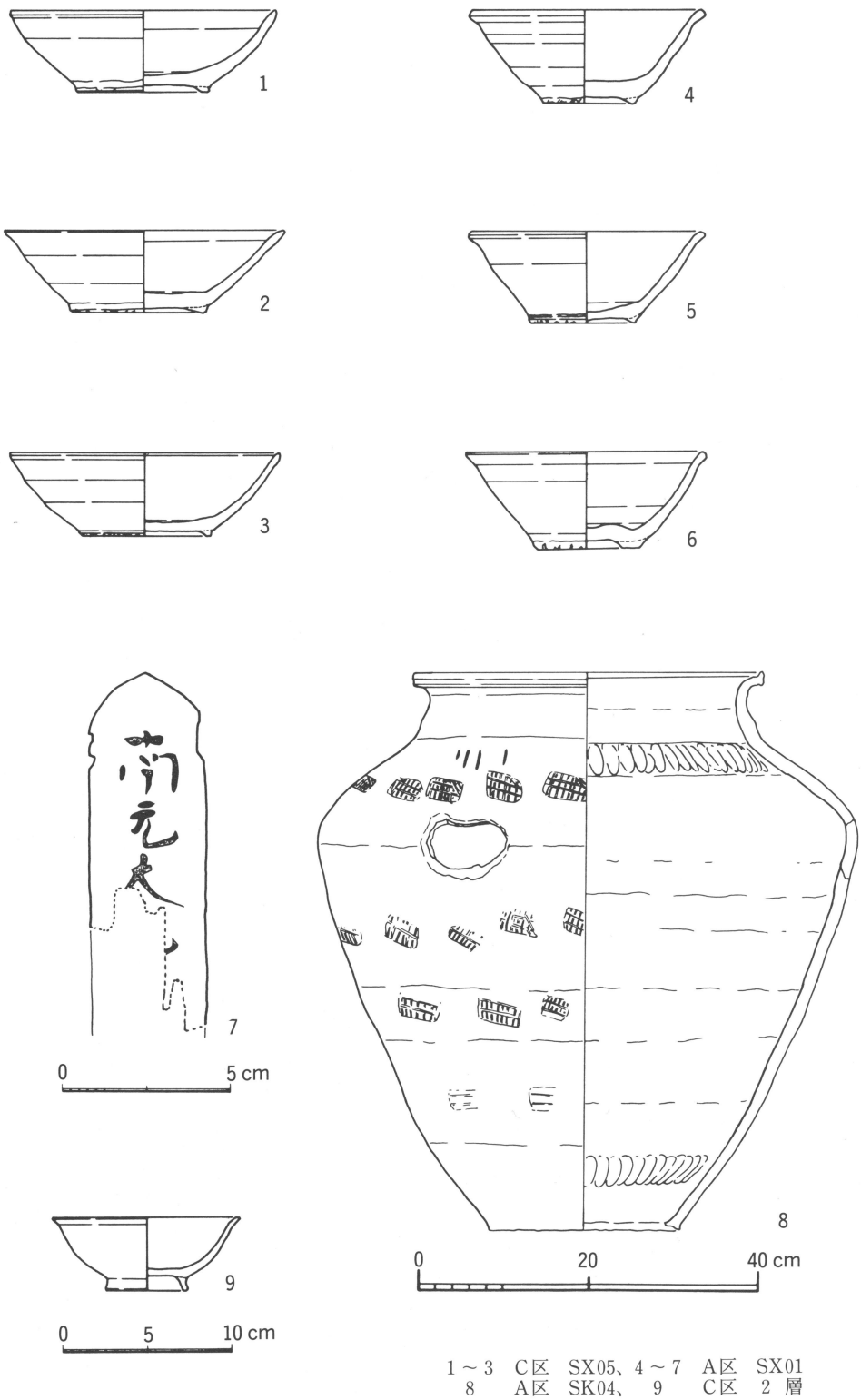
以上のことから、Ⅱ期からⅢ期にかけての遺構の動向が北東から南西に移行している可能性がある。

（永井宏幸）



1～5　A区　SB07、6・7　A区　SB06
8　　C区　2 層、9～11　A区　3 層

第 4 図　Ⅰ期の遺物（1：4）



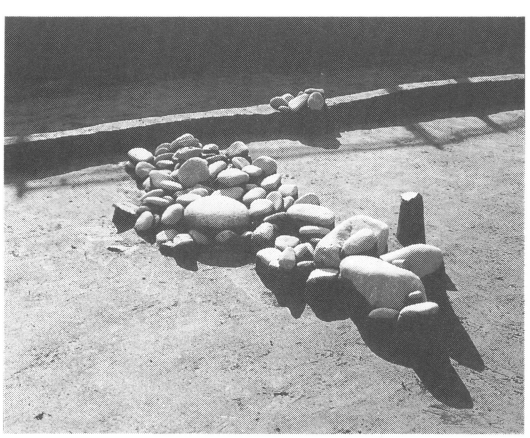
1～3　C区　SX05、4～7　A区　SX01
8　A区　SK04、　9　C区　2 層

第5図　Ⅰ～Ⅱ期の遺物（7　1：2、8　1：8、その他　1：4）

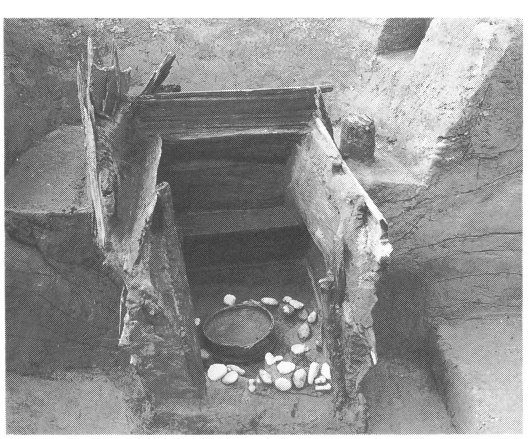
E～G区　E区では調査区の北端などで溝４条と土坑２基を検出したが、全体として遺構は希薄であった。また、旧地形が南方形へ緩やかに下がっていくことを確認した。これらのことから、E区は本遺跡の南限域であると考えられる。

F区では溝22条と土坑38基を検出した。このうちⅠｂ期の遺構としては、調査区の北東部分で炭化物を伴った土坑を数基、南東部分で東西方向の溝１条を検出した。遺構内からは、11～12世紀頃の須恵器や灰釉陶器が出土している。なお、調査区南東部分の下面から９世紀頃の須恵器がまとまって出土しており、この時期の遺構はさらに広がる可能性をもっている。これらのことから、F区の東部分に、A区の北西部から続くⅠｂ期の居住域が展開していることも想定できる。Ⅱ期の遺構としては、調査区の東部分から東西方向の溝数条とこれに直交する南北方向の溝４条、方形土坑十数基を検出した。このうち南北方向の溝２条は、いずれも幅１ｍ前後で深さ0.3ｍであり、西側にL字状に屈曲しており、何らかの意味をもった区画溝であると推定できる。Ⅲ期の遺構としては、拳大ないしは30㎝程度の河原石からなる集石を４基確認した。集石の下からは骨片や四耳壺片が出土しており、集石墓であると考えられる。

G区では調査区全体にⅡ期の遺構が展開する。調査区東部分で北東から南西方向の溝ＳＤ07を検出したが、これは最大幅2.05ｍ、深さ0.6ｍ、断面がV字形で堀状の溝である。このＳＤ07の東側では、方形土坑９基が密集した状態で確認された。ＳＫ18を例にとると、長軸315㎝、短軸270㎝、深さ75㎝で、埋土は褐灰色シルトと灰白色シルトとの斑土であった。ＳＤ07の東側は、おそらく墓域であったと考えられる。この区域の下層では、東のC区北西部分から続く湿地状の堆積が認められる。井戸を５基確認し、このうち調査区南西部分の２基は良好な状態で確認された。ＳＥ04では井戸枠が非常に良好な状態で残存していた。ＳＥ05の埋土からは完形に近い灰釉系陶器が多数出土している。調査区南西部分ではまた、大型の竪穴状遺構ＳＸ01・02を２基ほぼ東西に並んだ状態で検出した。ＳＸ01は9.5×17ｍ以上の平面規模をもっている。ＳＸ01・02はC区の大型竪穴状遺構４棟と類似している。このことから、ＳＤ07の西側は居住域であったと考えられる。　（今西康二）



F区　集石墓



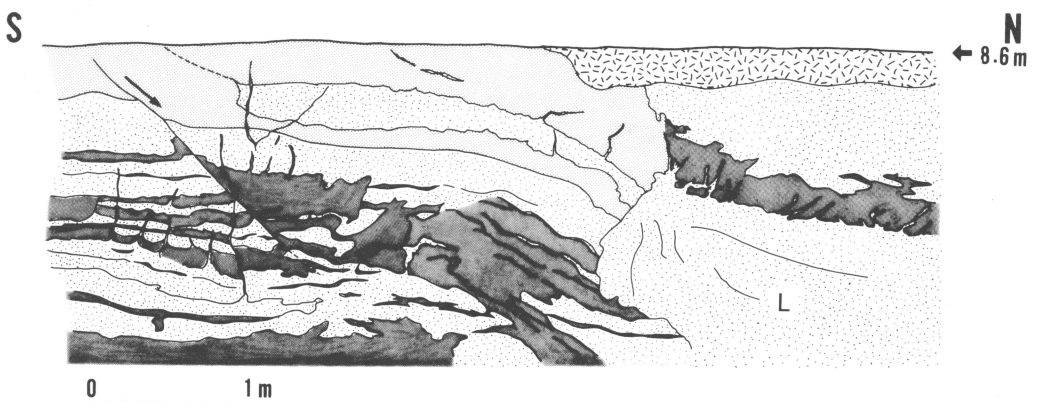
G区　ＳＥ04

地震痕　大毛沖遺跡では、少なくとも新旧２時期の古地震による地震痕が確認された。

新期の地震痕は、液状化した砂層が上位の地層を引き裂く『砂脈』で、現代の水田耕作土直下まで噴き上がり上端は削剝されていた。この砂脈には平面形態で、①直線状を呈するもの、②網目状を呈するもの、③円形あるいは楕円形を呈するものの３つがあった。これらの地震痕は、1891年に発生した濃尾地震による地震痕と考えられる。①～③の形態は、濃尾地震発生の際の「岐阜－一宮線」（断層）の活動を反映しているものと考えられる。

旧期の地震痕は、断層運動により形成されたとう曲構造（第６図）である。この構造は、93Ｃ区の旧河川の横断トレンチ３カ所で確認されたもので、少なくとも20ｍ以上連続して観察された。また、とう曲部の上部にはシルト質砂層の水平堆積がみられる。さらにそのシルト質砂層は、12世紀代と考えられる大型の竪穴状遺構に掘り込まれている。したがって、このとう曲構造は、少なくとも12世紀以前の地震により形成されたものと考えられる。

とう曲構造から断層はＮ58°Ｅ方向に延びると推定される。とう曲により変形した地層は上部で45°下部で65°以上の北落ちの傾斜を示し、垂直方向の変位量は１ｍをこえる。この断層は、「岐阜－一宮線」と斜交するように発達すると推定されるが、「岐阜－一宮線」の活動にともなって形成されたものであろう。したがって、とう曲の形成は、1891年に発生した濃尾地震の１サイクル前の活動（仮称「古濃尾地震」）を反映したものであり、単に遺跡における地震痕の発見だけでなく防災面でも大きな意義をもつ。詳細な地震痕の記載や地震発生時期の検討については、本年報の研究編の論考として示した。　（服部俊之）



(A)　←の部分で正断層が発生している。Ｌの部分は噴砂による砂層。

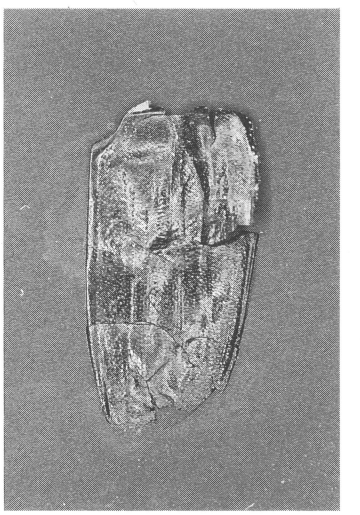
第６図　地震による地層の変形

昆虫遺存体　鎌倉時代の居住域を区画する溝の西側に集中して、南北に延びる畝状遺構が十数条確認された。畝条遺構は畑作地と推定されるが、この遺構に伴い、数百個体の昆虫片の塊で満たされた土坑が7カ所発見された。この土坑は、直径10～20cmの楕円形、皿状を呈し、底には約3cmの厚さで昆虫の体節片のみが集積している。内部は明灰色のシルトにより覆われていた。これらの昆虫は森　勇一氏（明和高校教諭）によりヒメコガネを主体とし、一部マメコガネを含むものであることが判明した。昆虫遺体が集積するには、一般に次の3つの場合が考えられる。

①昆虫食の大型鳥類の糞（ペレット）②草食獣の糞に集まる食屍性昆虫のすみか③縦穴の底の屍体に集まった食屍性昆虫の遺骸。

しかし、今回の昆虫片は昆虫の種類や土坑の大きさなどから、上記のいずれにも該当しない。ヒメコガネ・マメコガネは、ダイズ・クワ・ブドウやカキなどの畑作物や果樹を食い荒らす害虫である。発見された場所が畑作地と考えられる畝状遺構であることから、鎌倉時代、当時の人々が畑の作物を食い荒らす害虫を捕まえて殺し、溝の周囲に埋めたのではないかと考えられる。もし、この推論が妥当であるならば、鎌倉時代における害虫駆除の一つの方法をかいまみることになろう。

（鬼頭　剛）



大毛沖遺跡のヒメコガネ

まとめ　今回の調査によって下記の成果が得られた。

1．A区では、奈良時代の住居跡（Ⅰａ期）を検出できた。なかでもＳＢ09は造付け竈を持つ竪穴住居であった。また、奈良～平安時代の住居跡（Ⅰｂ期）を含めると計9棟の竪穴住居が確認され、古代の居住域であったことがわかる。Ⅱ期には、中世の居住域を区画する溝、さらにその西側には生産域が展開することがわかった。生産域では、ほぼ南北方向に延びる畝条遺構より昆虫塊が7カ所確認された。これは生産域であることの傍証資料であり、また、人為的な廃棄とするならば、当時の害虫駆除を復原できる特記事項となろう。

2．AからC区にかけて展開する自然流路からは、尾張平野では初見である大規模地震による変形した地層が確認できた。また、CからG区にかけて自然流路に沿って広がる湿地帯には墓域が展開している。

3．E区については、大毛沖遺跡の南限域であることがわかった。F区では、Ⅲ期の集石遺構から四耳壺・骨片などが出土することから、墓域が展開していたと思われる。

（永井宏幸）

西 上 免 遺 跡

調査の経過　西上免遺跡は弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されている。行政的には一宮市今伊勢町馬寄および尾西市開明に所在する。90年度から継続調査を実施し、弥生中期から室町時代にかけての遺構が検出された。今年度も６～７月に東海北陸自動車道建設予定地内で、91年度調査区の南側550㎡を調査した。

遺構と遺物　現況は標高約6.4ｍの水田で、調査区北半では厚さ25㎝の耕作土層直下から基盤層である灰色シルト層が現れ、これを掘りこんで遺構が存在する。主要な遺構は次のとおりである。

古墳時代初頭：墳丘墓ＳＺ01・02、溝ＳＤ12（墳丘墓の周溝かと考えられる）

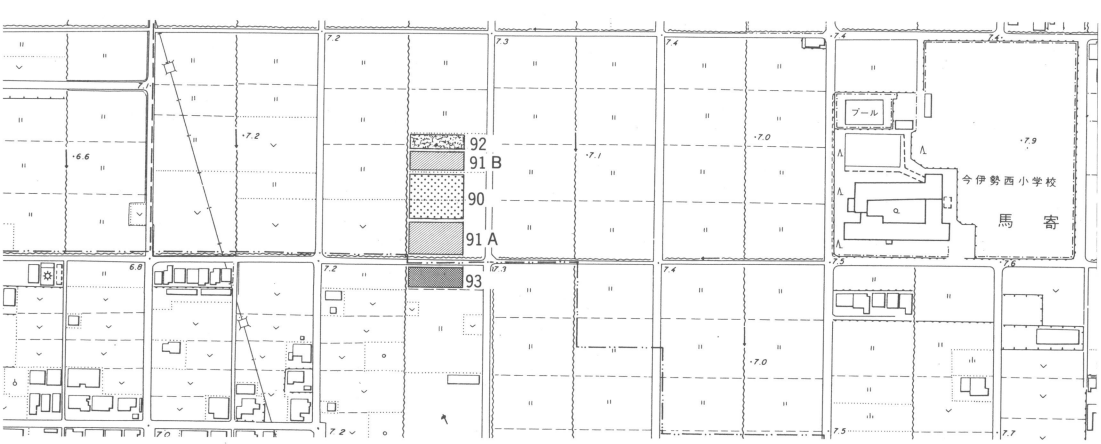
鎌倉・室町時代：溝ＳＤ04（ＳＤ03の下層に部分的に残存する）、土坑ＳＫ02

戦国時代から江戸時代前期：溝ＳＤ03

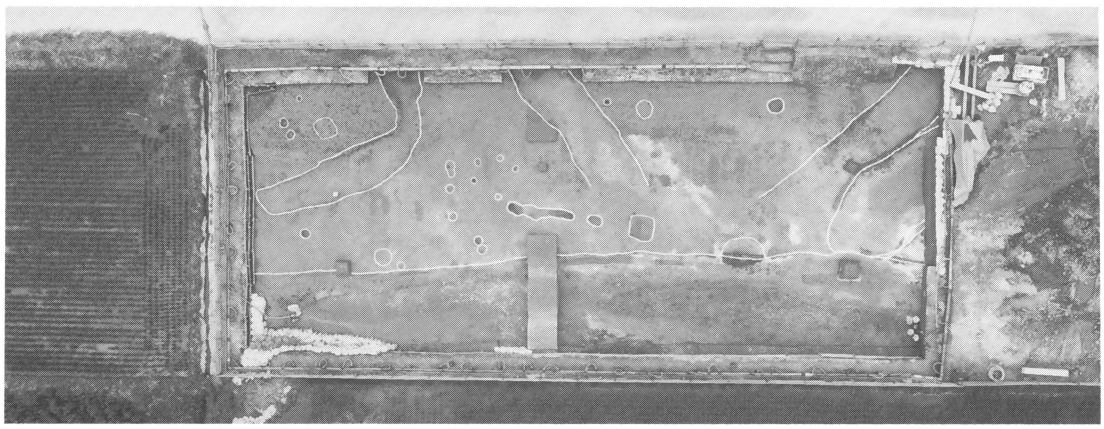
江戸時代中期から明治初期：溝ＳＤ02と杭列

ＳＺ01は、確認した周溝が91Ａ区の溝（ＳＸ01）と対応しており、一辺の溝の中央に開口部をもち開口部周辺の溝幅が拡張する広義の前方後方型墳丘墓と推定される。周溝からは、Ｓ字甕や精緻なつくりをした小型高杯、ほぼ完器に復元できるパレス壺も出土している。ＳＺ02は、他の二辺の溝は確認できないが、おそらくは一隅に開口部をもつ墳丘墓と推定される。周溝からはパレス壺と、その近くから20㎝角の方形の石が出土している。二体のパレス壺はともに、波線文と赤彩とが施されているが、口縁部が普通に見られるものとは異なっている。

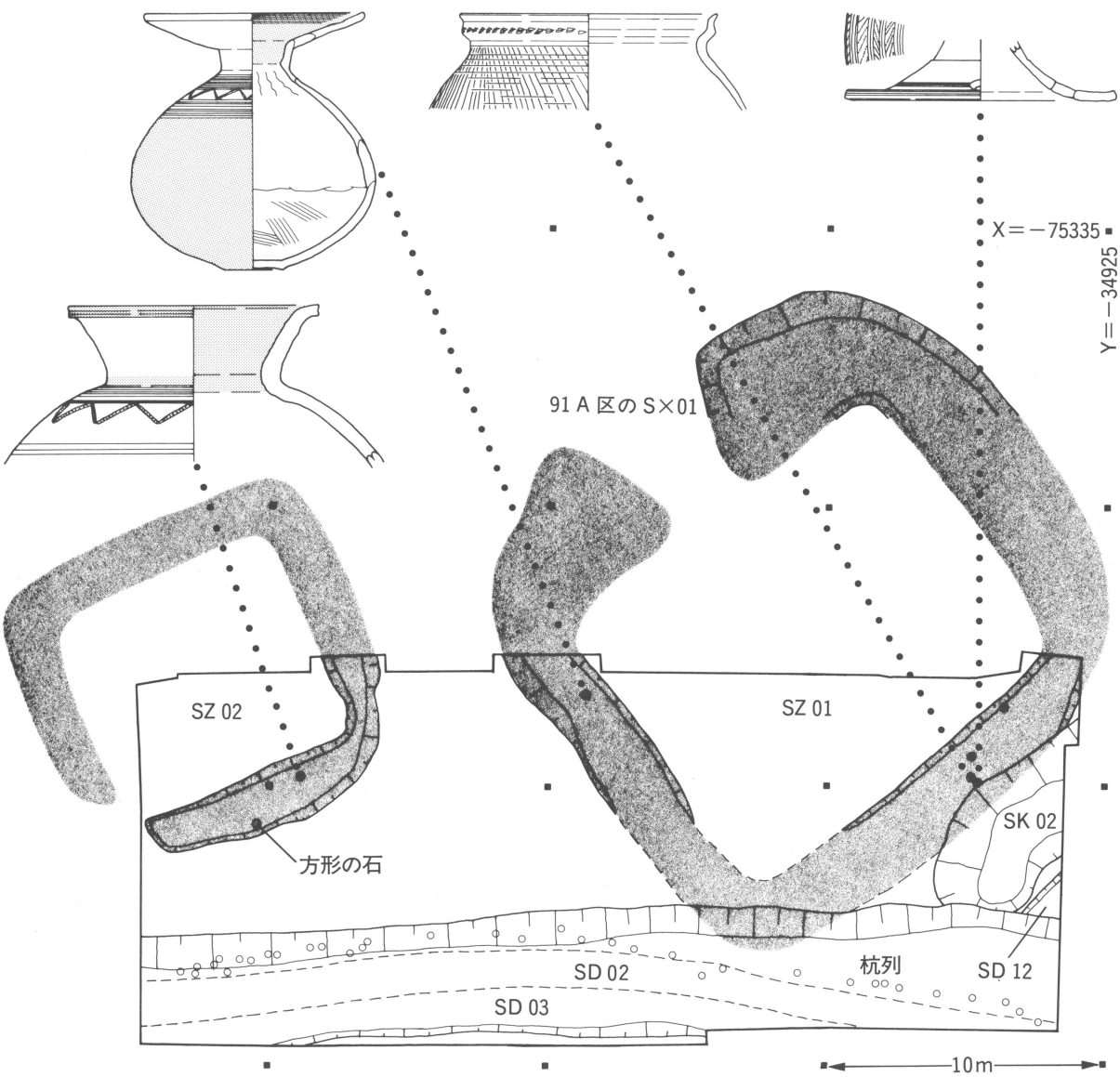
ＳＤ02・03・04は東から西に向けて流れており、鎌倉時代から明治初期まで流路を多少変遷させながらもほぼこの場所に存続した溝と考えられる。明治17年頃の地籍図や天保年間の村絵図に見られるものであろう。ＳＤ03は幅4.5m、深さ0.65mで、多くの中・近世遺物が出土している。ＳＤ02は幅２m、深さ0.5mで箱型の断面であり、北側に護岸のための杭列をもち、また、埋土から人為的に埋められた様子がうかがえる。　（今西康二）



第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：5000）



調査区全景



第 2 図　主要遺構と出土遺物（ｌ：250、遺物はｌ：４）

東海北陸自動車道試掘調査

東海北陸自動車道建設予定地内、(仮称) 林野遺跡、(仮称) 門間A遺跡、大毛遺跡、(仮称) 福塚遺跡、(仮称) 西上免南遺跡、(仮称) 大和町A遺跡、(仮称) 馬引遺跡における遺跡の有無およびその範囲の確認を目的に行った。調査期間および調査面積は下の表のとおりである。

(仮称) 林野遺跡 (一宮市大和町北高井、苅安賀、萩原町林野) 西尾張中央道の東側10地点で調査を行った。3箇所で時期不明の落ち込みを確認したが、明確な遺物包含層は確認されなかった。

(仮称) 門間A遺跡 (葉栗郡木曽川町大字黒田、大字門間) 10地点で調査を行った。東よりの5地点と西からの2地点から古墳時代の溝や土坑・竪穴住居などの遺構が検出できた。また、それらの地点の間で井戸など平安時代から中世にかけての遺構を検出した。

大毛遺跡 (葉栗郡木曽川町大字黒田) 昨年度、一宮市大毛地内を試掘したのに引き続き木曽川町地内4箇所を調査した。各地点、耕作土直下から古代から中世にかけての遺構及び包含層を確認した。

(仮称) 福塚遺跡 (葉栗郡木曽川町大字黒田四の通り、五の通り、六の通り) 4地点で試掘調査を行った。各トレンチとも耕作土直下に湿地状の堆積層である灰色シルトが堆積しており、明確な遺構及び遺物包含層は確認できなかった。

(仮称) 西上免南遺跡 (尾西市開明字西上免、字東新規道) 5箇所で調査を行った結果、南2地点で奈良時代の溝及び土坑を確認した。その拡がりを確認するため、さらに南に3箇所のトレンチを設定したが、明確な遺構は確認されなかった。。

(仮称) 開明A遺跡 (尾西市開明字苅安賀道) 4箇所のうち南の2地点で中世の土坑を確認した。水田面直下から鎌倉時代を中心とする遺物が出土し、TT.3からは黄褐色細粒砂層を掘り込んでいる土坑が確認され、その埋土からは縄文晩期の土器が出土した。中世から縄文晩期にかけての小規模な遺跡と推定される。

(仮称) 大和町A遺跡 (一宮市苅安賀字川田、字火口上) 最も北の地点で溝2条を確認、中世から近世にかけての土器が多量に出土した。他3地点では出土遺物がきわめて少なく、明確な遺構・遺物包含層は確認されなかった。

(仮称) 馬引遺跡 (一宮市大和町馬引字西出、尾西市籠屋4丁目) 南2地点では、攪乱が激しく明確な遺構・遺物包含層は確認されなかった。北2地点では中世の遺構及び包含層が確認された。

(太田芳巳)

遺跡名	調査期間	調査面積	遺跡名	調査期間	調査面積
林野	4/2～12	100㎡	西上免南	7/20～12/8	80㎡
門間A	4/23～5/24	100㎡	開明A	9/17～20	40㎡
大毛	4/28～5/26	40㎡	大和町A	12/8～13	50㎡
福塚	5/25～27	40㎡	馬引	12/13～14	40㎡

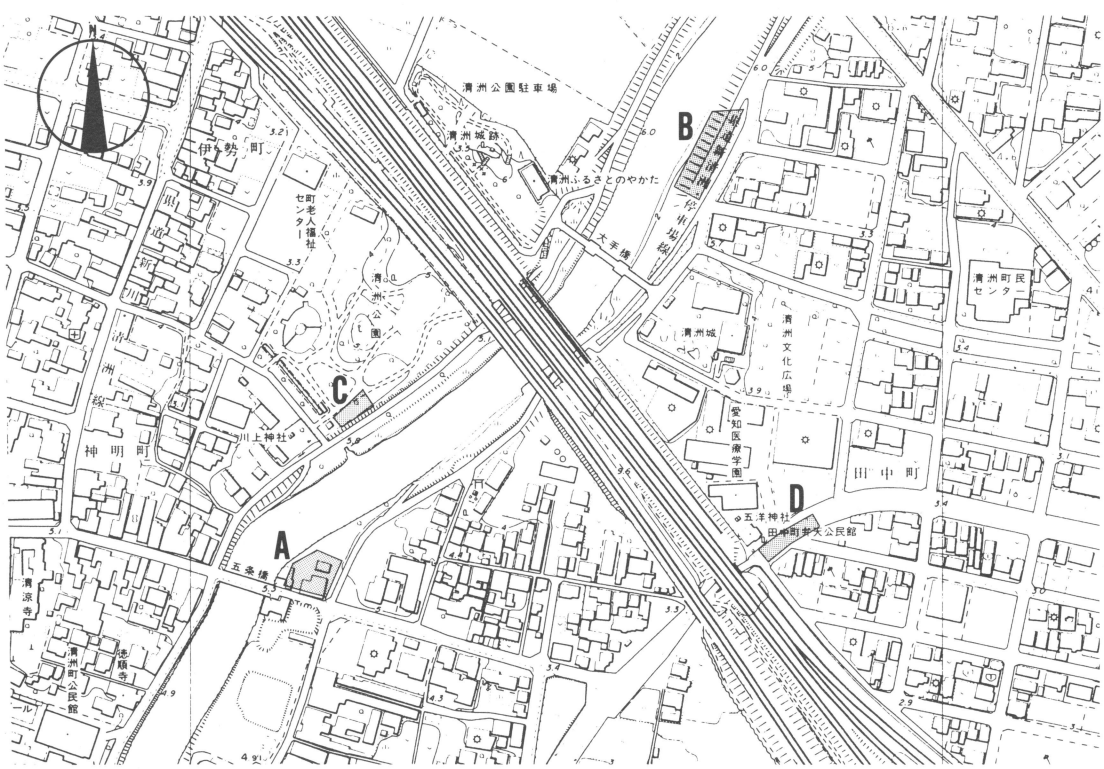


木曽川　赤ラインは東海北陸自動車道建設予定路線
写真は日本道路公団一宮工事事務所提供

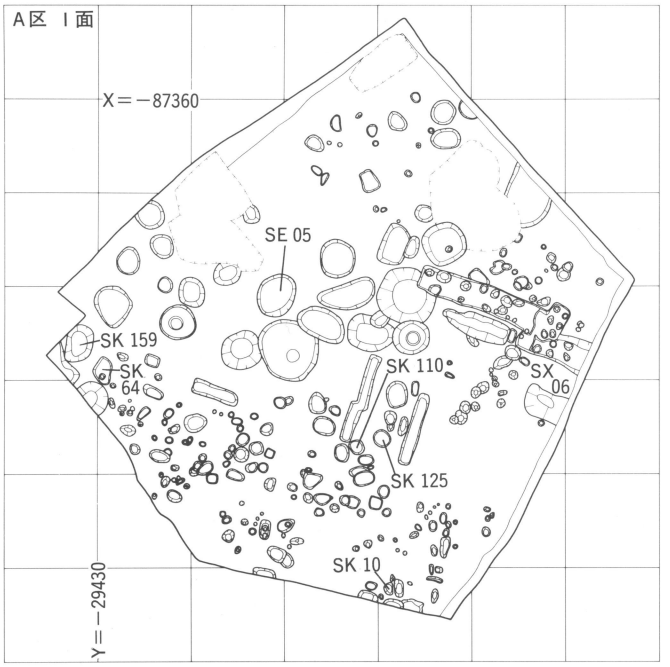
清 洲 城 下 町 遺 跡

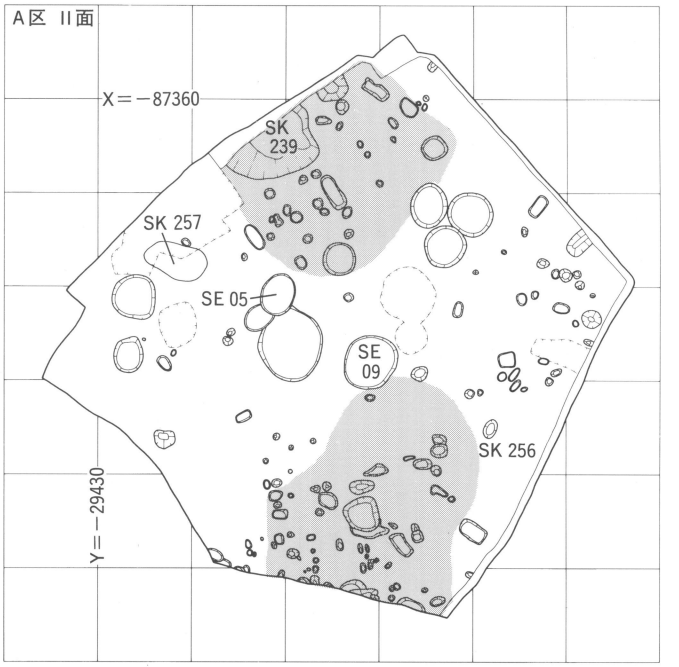
調査の経過　清洲城下町遺跡は、五条川流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡であり、行政的には西春日井郡清洲町に所在する。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は五条川改修に伴う調査1520㎡（A・B・C区）と県道清洲新川線ＪＲ古川架道橋建設に伴う調査500㎡（D区）を実施した。

調査の概要　A区は自然堤防の西端に位置し、中世、城下町期、宿場町期の多数の土坑、ピット、井戸を検出した。中でも、百代寺窯式期の一括遺物が出土した土坑（ＳＫ256)、大窯Ⅰ期の一括遺物が出土した土坑（ＳＫ239)、半胴甕が合わせ口になって出土した宿場町期（18世紀後半）の一括遺物を含む土坑（ＳＫ159）は注目すべき遺構である。また井戸（ＳＥ05）の底から城下町後期の金製のキセル、金メッキを施した飾り金具が出土した。B区では宿場町期の溝、土坑を検出したが、五条川の旧堤防は確認されなかった。D区は自然堤防の縁にあたり、中世から城下町前期の溝、土坑、井戸を検出した。特に、大窯Ⅰ期の遺物が一括出土した溝（ＳＤ01）は、過去の調査から想定されている方形居館群の一部であろう。C区は清須城本丸とも想定される地内にあり、明治初期の溝と城下町後期の集石を確認した。集石の共伴遺物に金箔瓦、花押を墨書した瓦があり、当時の清須城を解明する貴重な資料となるであろう。　（大竹正吾）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5,000）





第２図　A区遺構全体図（1/400）　※アミは焼土部分



A区Ｉ面全景



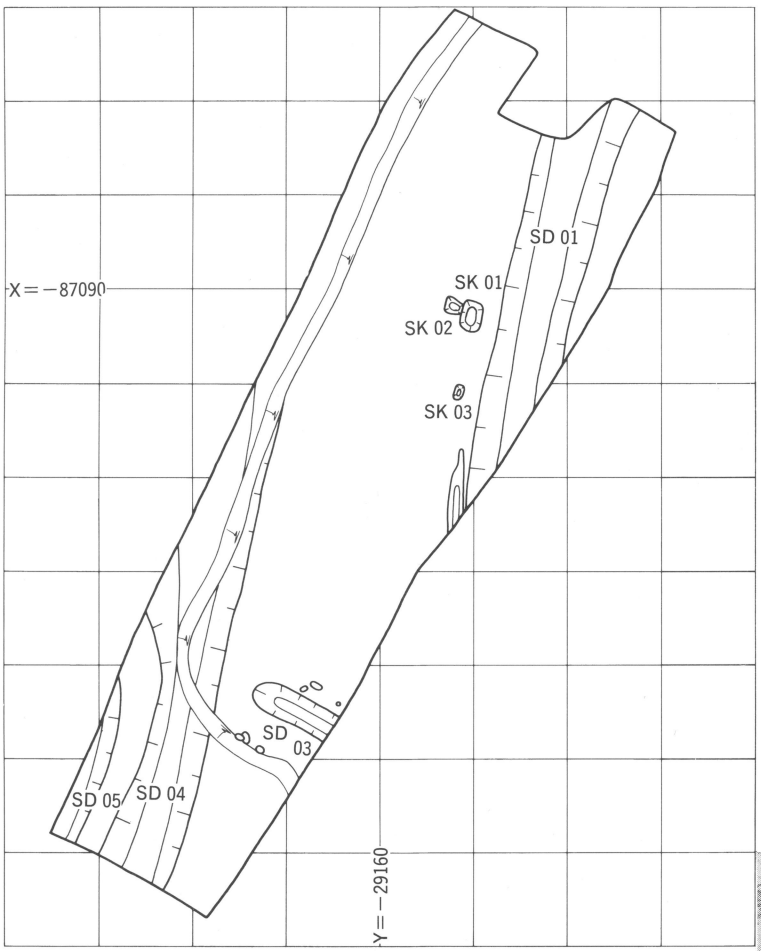
A区II面全景



A区ＳＫ125遺物出土状況



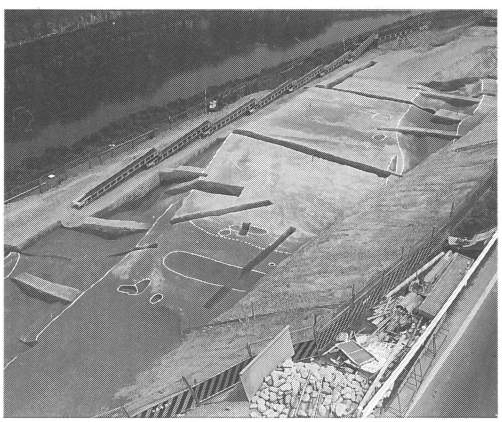
A区焼土面検出状況



第３図　Ｂ区遺構全体図（Ｉ：400）



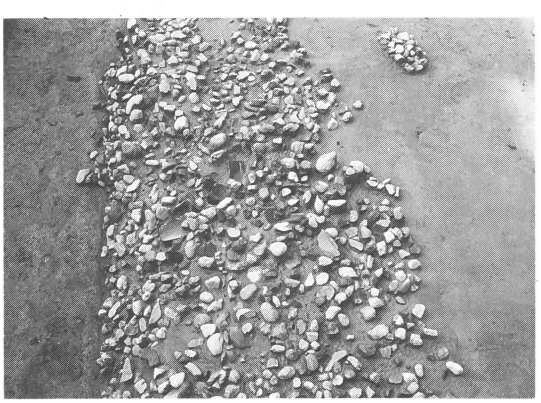
Ｂ区全景　南より



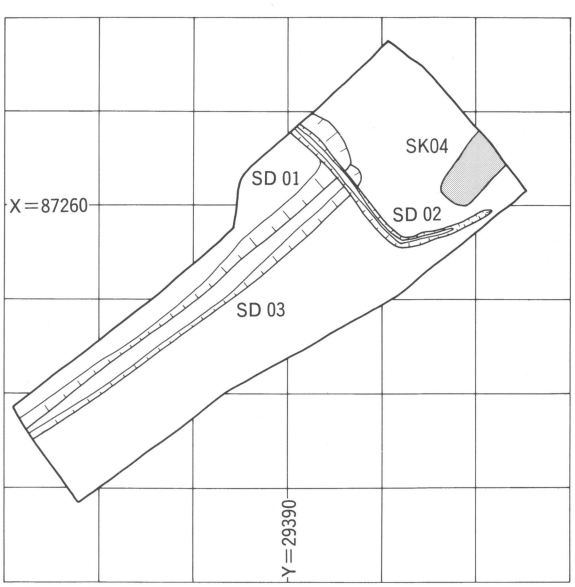
Ｂ区全景　西より



Ｃ区ＳＸ04全景　東より



Ｃ区ＳＸ04　北より



第４図　Ｃ区遺構全体図（Ｉ：400）

五条川改修関連（A・B・C区）

A区　五条川左岸、五条橋の北東に位置し調査区の南側には美濃街道が東西に走る。検出した遺構は、土坑335（15）基、ピット385（10）基、井戸17（6）基、その他12（2）基で、溝は検出されなかった。（　）内の数字は宿場町の時期の内数である。主要な遺構として、昭和の防空濠（SX06）宿場町期の土坑（SK125・159）城下町期の土坑（SK239）井戸（SE05）、中世の土坑（SK256・257）がある。なおA区及びSK239・256等については平成6年3月刊行の報告書『清洲城下町遺跡Ⅳ』に掲載した。ここでは報告書に掲載できなかった城下町期のSK10・64・110、SE05・09とSK257について述べる。

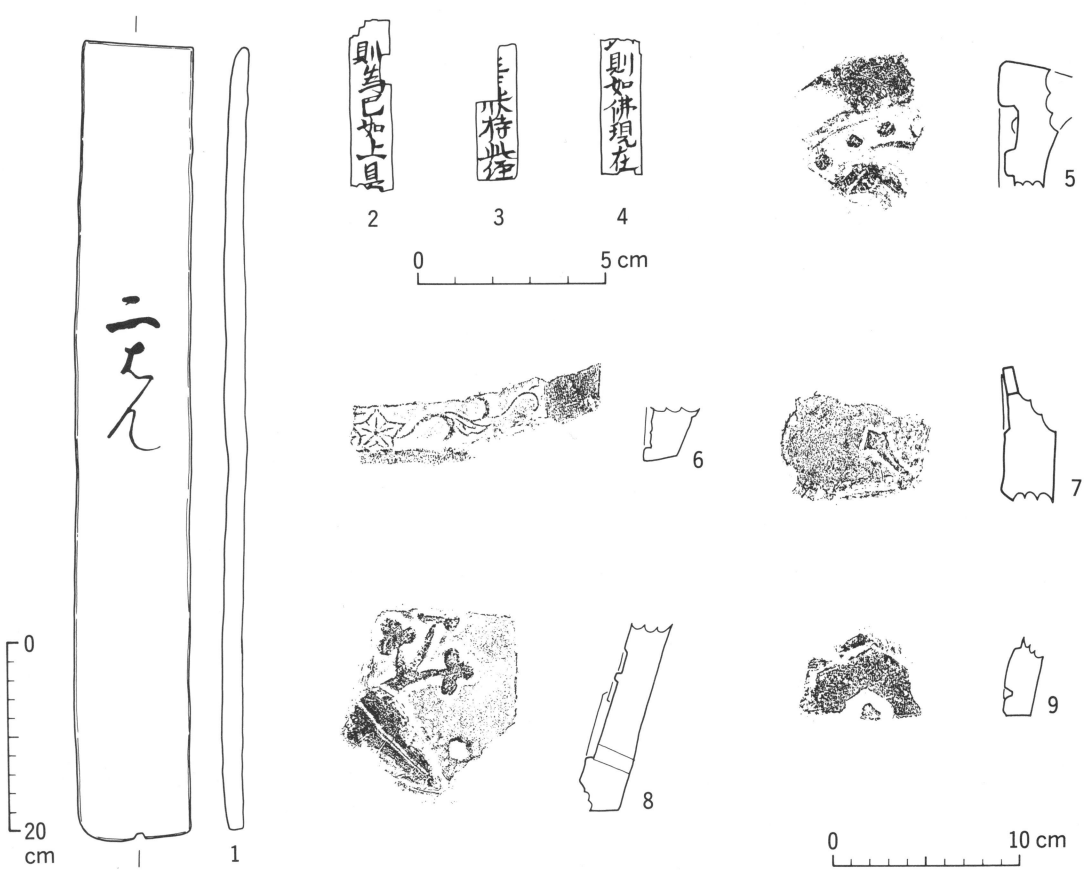
SK10　長径62cm×短径48cmを測る炭混じりの埋土で10の銅緑釉の稜皿が出土。

SK64　長径152cm×短径100cmを測り少量の炭が混じった埋土で、11～15の遺物が出土。15は銅製の皿（灯明皿）、他に天目茶碗片2点、甕片1点、土師質皿片16点。

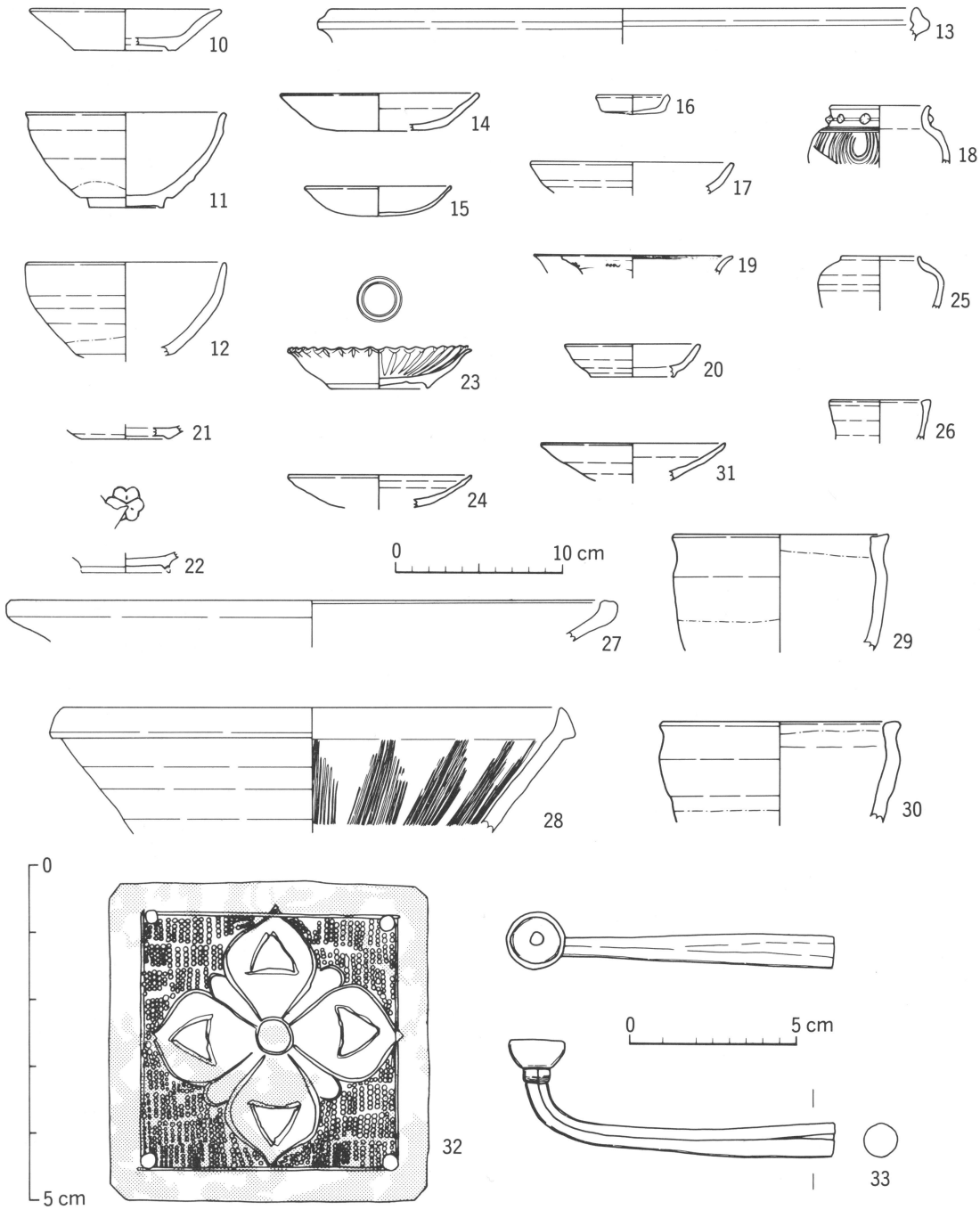
SK110　長径82cm×短径70cmを測り砂炭混じりの埋土で16～18の遺物が出土。18は擂座の茶入れで擂座部分には灰釉が施される。他に天聖元宝1点と平瓦1点。

SE05　桶による二段組の井戸で径64cm、長さ97cmが上段桶で上部は一部腐っていた。5、20～33の遺物が出土。32は銅板に金メッキの飾り金具、33は金製のキセル。

SE09　桶による二段組の井戸。径64cm、長さ84.5cmの上段桶の桶板には1の「二ばん」の墨書がある。下段の桶の長さ81.3cm。



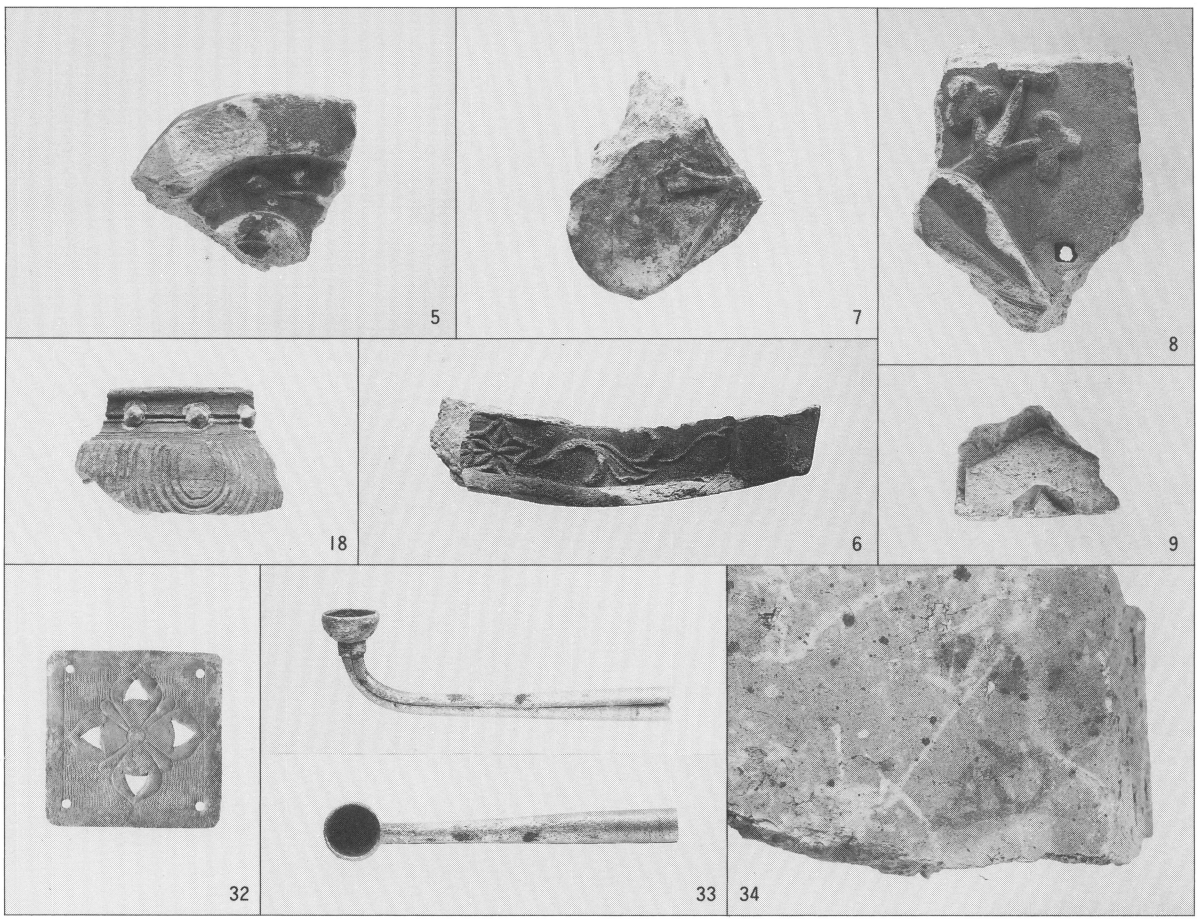
第5図　A・C区出土遺物実測図



※アミは金メッキ残存部分

番号	器種	遺構番号	口径(cm)	釉	その他
10	稜皿	SK10	11.4	銅緑	
11	天目茶碗	SK64	12.0	鉄	化粧掛け
12	天目茶碗	SK64	11.7	鉄	
13	擂鉢	SK64	35.0	鉄	
14	土師質皿	SK64	11.8		
15	灯明皿	SK64	8.8		銅製
16	土師質皿	SK110	4.3		手づくね
17	丸皿	SK110	12.1	灰	
18	擂座茶入	SK110	5.8	鉄	
19	青花皿	SE05	11.8		
20	小皿	SE05	8.0	灰	
21	皿	SE05		鉄	底径推5.0cm
22	皿	SE05		灰	底径推5.4cm
23	襞皿	SE05	10.3	灰	
24	重圏皿	SE05	11.0		
25	茶入	SE05	4.6	鉄	
26	香炉	SE05	6.0	灰	
27	擂鉢	SE05	36.0	鉄	
28	擂鉢	SE05	28.8	鉄	
29	鉢	SE05	12.6	鉄	
30	鉢	SE05	14.0	鉄	
31	土師質皿	SE05	11.0		

第6図　A区出土遺物実測図



ＳＫ257 最大幅180cm、長さ336cmを測る。円礫と12世紀～14世紀代の山茶碗の破片を敷き詰めた状態で出土。その下の標高１ｍ40cm前後より２～４の柿経が出土。

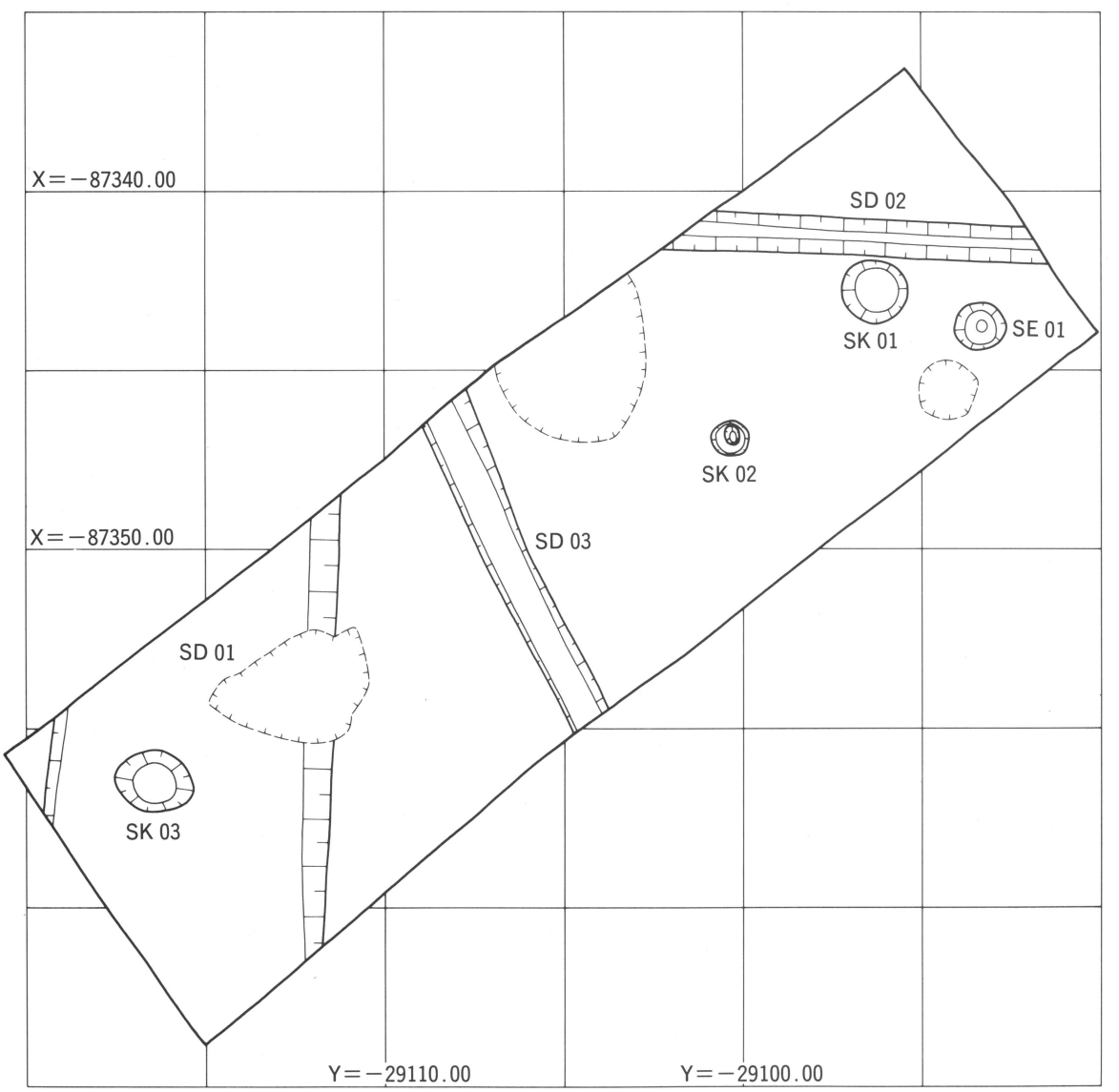
Ｂ区　五条川左岸、清洲橋とＪＲ東海道線の間に位置する。検出された遺構は溝５条、土坑９基で、いずれの遺構も19世紀代の陶磁器が出土した。現況が堤防のり面であったので江戸時代の堤防が確認できるのではと期待したが、本調査区では確認できなかった。

Ｃ区　五条川右岸、清洲公園の南東隅に位置し、清須城本丸地域に当たる。検出した遺構は溝３条と石の集積３ヶ所で、溝からは幕末から明治初期にかけての陶磁器が出土。石の集積のなかで調査区の北東から検出した幅約２ｍ長約４ｍのＳＸ04は、調査区の北側に続いていくものと思われる。10～15cmの円礫といぶし瓦の破片を用いて、自然堤防を形成している砂層の崩落を防ぐために築かれているようである。出土遺物として須恵器、山茶碗、擂鉢等の破片があるが宿場町期のものは全く出土していない。多量の平瓦片に混じって６～９の軒平瓦や飾り瓦、他に軒丸瓦が出土しており、７は金箔瓦、34は花押のある熨斗瓦で幅13.5cm、厚さ2.5cmを測る。花押は瓦の上面右下隅に書かれ、縁は斜めに切られているが反対側の縁はほぼ垂直に切られている。胎土は白色で１～３㎜の小石を含んでいる。

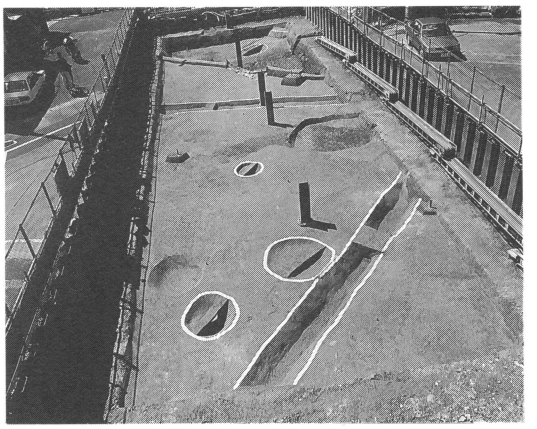
花押から人物の特定は非常に難しいが、江戸時代のようなパターン化した花押ではなく個性のある花押である。戦国から安土・桃山頃に比定され、松平忠吉の家臣で「清須三奉行」の一人である寺西藤左衛門のものに似てはいるが確定できない。名古屋市博物館の下村信博氏による御教示で、記して謝意を表するものである。　（小澤一弘）

清洲新川線関連D区

D区は五条川左岸の自然堤防の縁に位置する。調査前の状況は道路だが、明治17年の地籍図では畑地として記録されている。検出された遺構は溝３条、土坑２基、井戸２基であった。このうち南北の溝（ＳＤ01）は上層の削平にもかかわらず、幅7.86m、深さ1.2mを測る。遺物は埋土下層に集積し、土師器皿、陶磁器を中心に膨大な量の出土をみた。さらに木製品（漆椀、箸、柄杓、卒塔婆、鞘など）や骨（ヒト、イヌ、ウマ、シカ、ウシ、カメ、スッポン、キジなど）の残存状況も良好であった。遺物の所属時期は、陶磁器類から城下町前期（大窯Ⅰ期）が考えられ、直交する東西の溝（ＳＤ02）の検出状況、周辺地域の過年度調査成果などから方形居館の区画溝が想定される。詳しくは遺物の整理を待ちたいが、土師器皿、木製品に墨書が多くみられ興味深い。（蟹江吉弘）



第７図　Ｄ区遺構実測図（Ⅰ：200）



D区全景（北東から）



D区　ＳＤ01遺物出土状況（北東から）

まとめ　今回の調査を過年度の成果とあわせてまとめると次の様になる。

①　Ａ区の宿場町期の主な遺構として、合わせ口になった半胴甕が出土した土坑（ＳＫ159）があり、時期は18世紀後半である。また、五条川の旧堤防の裏ごめを確認した。

②　昨年度と今年度の調査から、五条橋の東、美濃街道沿い周辺では、大窯前半期に何回も遺構が堀り込まれたり整地されたりしており、標高４ｍ50cmから２ｍ60cmの間の遺構は大窯前期に属することが確認された。

③　Ａ区下面の広い範囲で焼土面が確認され、焼土を含む面の下から大窯Ⅰ期の遺物が多く出土し、同期の良好な一括資料を出土した土坑（ＳＫ239）等が検出された。井戸の在り方と地籍図の区画割がほぼ一致しており、街道沿いの屋敷のあり方を知る上で興味深い資料となった。

④　Ａ区において、従来の調査では後背湿地上か自然堤防の変換点に見られた中世の遺構（ＳＫ256）（百代寺窯式期）が自然堤防上で検出された。また、旧五条川の河道の縁から中世の土器や石を引き詰めた遺構（ＳＫ257）が確認されたが、性格ははっきりしていない。これらから中世には自然堤防が形成されており、この上に城下町期に堆積したと考えられる五条川の旧河道堆積物と増水による厚い堆積物が載っているのが確認できた。

⑤　Ｂ区では、いずれも19世紀頃の遺構を確認したが、五条川の旧堤防は確認できず、現在の堤防下に存在する可能性がある。

⑥　Ｃ区の自然堤防の縁にある集石は、性格は不明であるが共伴遺物に城下町期後期の金箔瓦、花押のある墨書瓦があり、清須城の本丸に係わり合いがある構造物の可能性がある。

⑦　Ｄ区の溝（ＳＤ01）からは城下町前期（大窯Ⅰ期）の陶磁器、土師器皿を中心した大量の遺物が出土し、ヒトの頭蓋骨をはじめ多種類の獣骨、木製品も含んでいる。この溝は地籍図、過年度の調査結果から方形居館の区画溝と想定される。

（大竹正吾、蟹江吉弘、小澤一弘）

一色青海遺跡

調査の経過　一色青海遺跡は、中島郡平和町須ヶ谷及び稲沢市儀長町地内に所在する。本遺跡は、一宮市街地から稲沢を経て平和町に至る三宅川により形成された標高１ｍ前後の自然堤防とその後背湿地上の荒蕪地に位置している。

周辺には、南東約1500ｍに尾張国分寺跡や堀之内花ノ木遺跡があり、７世紀から８世紀にかけて、この地域が尾張の中心的存在であったことをうかがわせる。また、北西約150ｍには、弥生時代の一色長畑遺跡やその西に続く跡ノ口遺跡がある。

後背湿地には、黒泥ないしは泥炭が堆積し、その層より弥生時代の土器を中心とした遺物がしばしば出土している。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、8800㎡を平成５年５月～平成６年１月にかけて実施した。

調査にあたっては、広い面積に加え。排土置き場やウエルポイント設置期間の関係により、調査区を第１図のようにＡ区(1750㎡)・Ｂ区(3200㎡)・Ｃ区(2530㎡)・Ｄ区(1050㎡)・Ｅ区（270㎡）の５区に分け、さらにＡ区をＡａ・Ａｂ区、Ｂ区をＢａ・Ｂｂ区、Ｃ区をＣａ・Ｃｂ区、Ｅ区をＥａ・Ｅｂ・Ｅｃ区と10小区に細分して調査を実施した。

調査の概要　調査の結果、検出できた遺構は、弥生時代中期末と中世の２期にまとまりをみることができる。前者をＡ期、後者をＢ期とする。

Ａ期の遺構には、方形周溝墓・竪穴住居・廃棄土坑などがある。方形周溝墓には。Ａａ区～Ｂａ区にかけて合計８基（Ａａ区５基・Ａｂ区１基・Ｂａ区２基）検出され、墓域を構成している。また、周溝の埋土中より、壺を中心とした土器がまとまって出土している。竪穴住居は８棟検出され、そのうち２棟は土器とともに炭化材が出土したことから火災住居と考えられる。そして、廃棄土坑については、Ａａ区ＳＫ09・23から大量の土器とともに炭化米やウリ・ブドウの種子・鯛の骨などの動・植物遺体も多数出土した。

Ｂ期の遺溝には、方形土坑・土坑などがあり、方形土坑は主軸方向の類似性が認められ、全調査区から検出されている。その数は約100基に達し、本遺跡の中世を代表する最多数の遺構となっている。

Ａ期の出土遺物としては、凹線文またはクシによる直線文・波状文などの文様を施した壺やタタキ手法による甕を中心とする弥生土器と石鏃・石斧・石剣などの石器がある。また、Ｂｂ区ＳＫ01では長さ10㎜、径２㎜の微小な管玉も出土した。

そして、Ｂ期はＡ期に比べ良好な出土遺物に恵まれず小片が多い中、外底部に墨書を施した北部系の灰釉系陶器が３点出土したことが目を引く。他に遺物は、土師器・貿易陶磁・銭貨などがあった。　（前田雅彦）

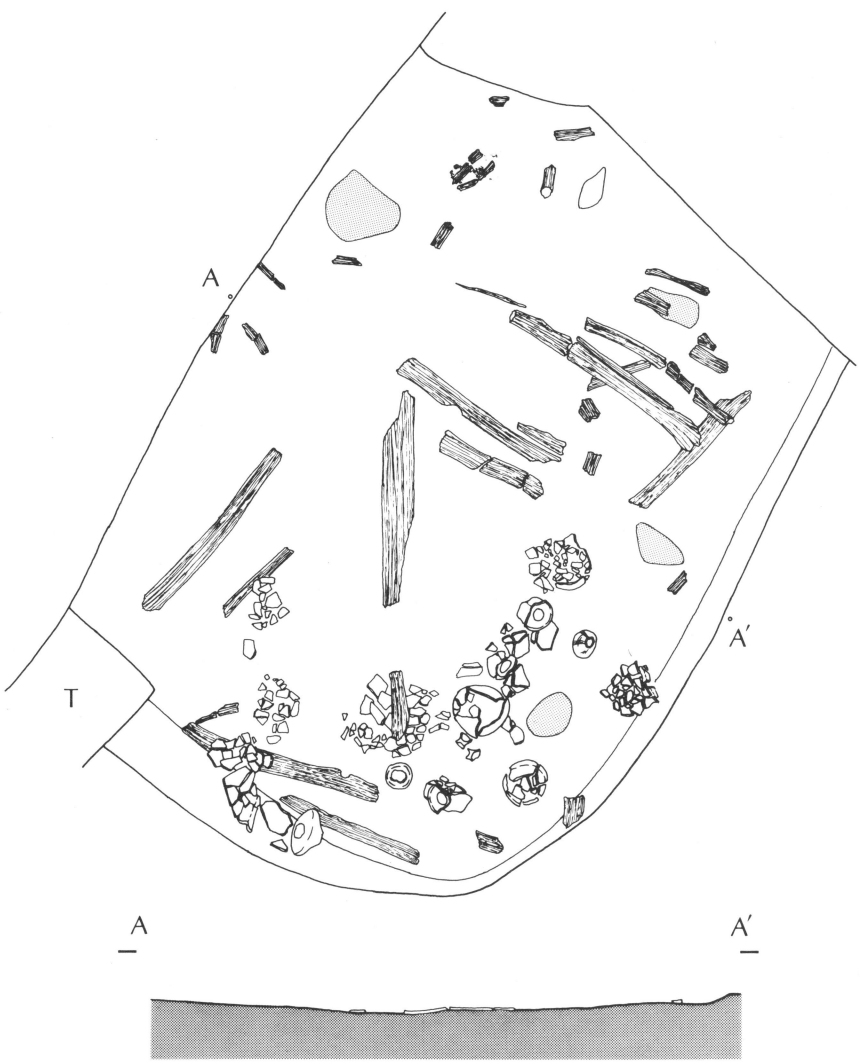

儀長町
色青海町
色長畑町
Ec
Eb
Ea
Aa
D
Cb
Ca
Bb
Ba
Ab
稲沢市外二町衛生組合
平和衛生処理場
井堀野口町
四社大神宮
稲荷社
井堀蒲六町
井堀高見
平和町総合運動場
井堀植木生産組合
井堀江西町
天神社
県道

第Ⅰ図　遺跡位置図

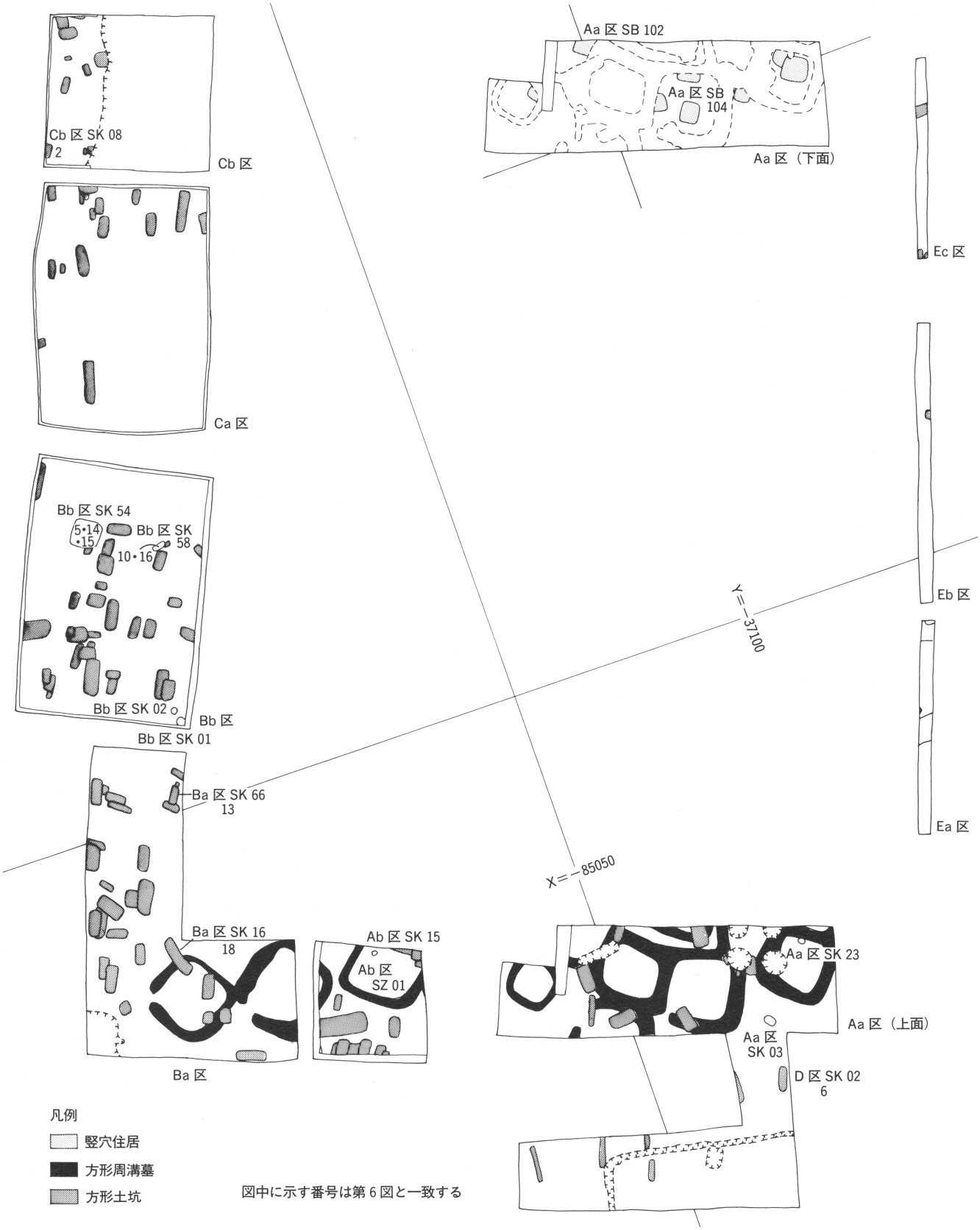
遺構　今回検出できた遺構には、A期の竪穴住居・方形周溝墓・廃棄土坑、B期の土坑がある。これらの分布状況は、A区では密、C区・D区・E区では希薄となる。時期別に整理すると、B期の遺構が調査区全域に存在するのに対し、A期の遺構Aa区・Ab区・Ba区を中心とし、Ca区・Cb区・Bb区では希薄となる。なお、全体的にD・E区では遺構が希薄であった。これはD区では検出面とした灰色細砂層が東側に向けて高度が下がり、微高地の東端部に該当し、E区では前面に遺構検出面が数十cm程度削平を受けているためである。

A期の遺構　A期の遺構は、検出面の違いにより下層をA－1期、上層をA－2期と区分する。

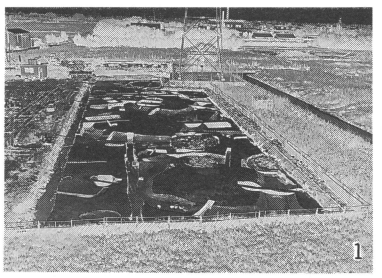
A－1期の遺構は、竪穴住居・土坑で構成される。分布範囲はAa区を中心としている。竪穴住居は8棟検出できた。平面形がいずれも一辺4m程度の隅丸方形である。このうち2棟（Aa区SB102・同SB104）は、いわゆる「火災住居」で、いずれも床面が被熱し



第2図　Aa区SB102（S＝1/40）



第 3 図　遺構略図（S＝1/2000）



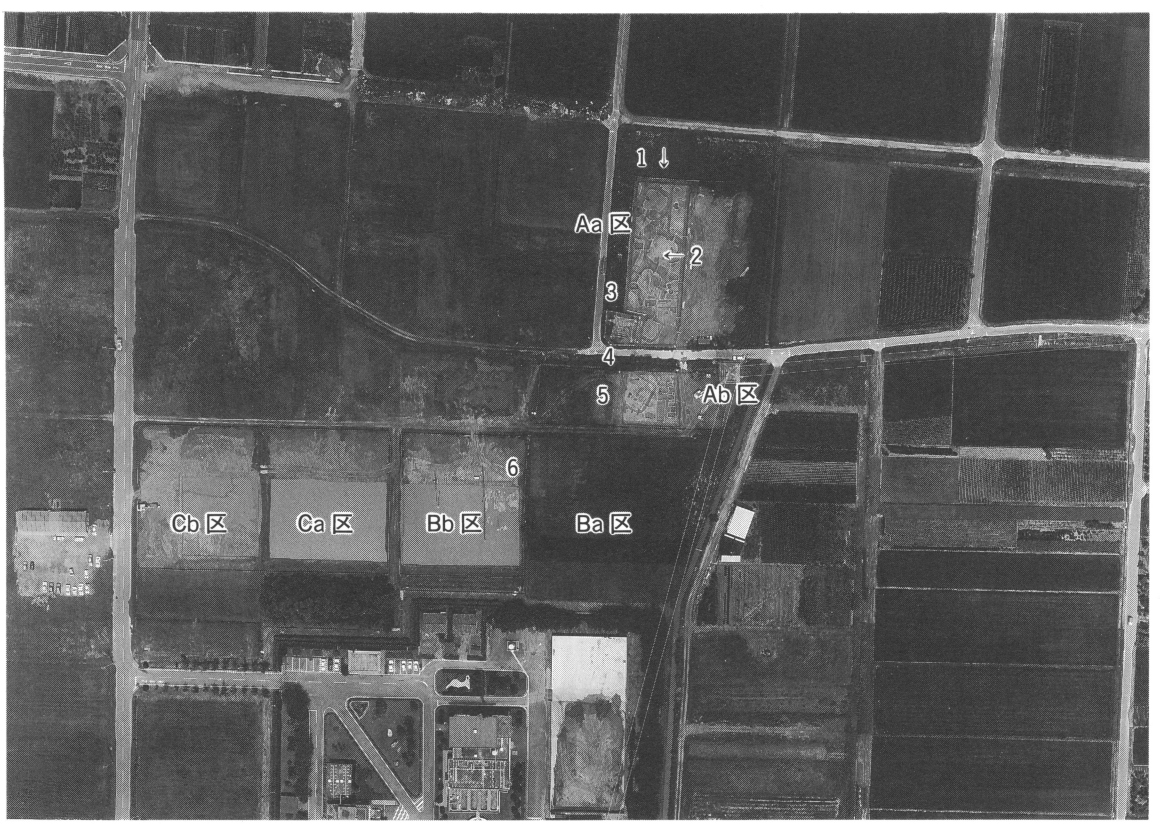
Ａａ区上面全景



Ａａ区　ＳＢ102



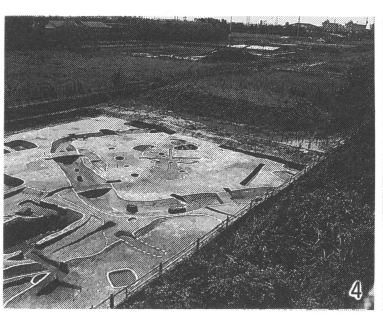
Ａａ区　ＳＢ104

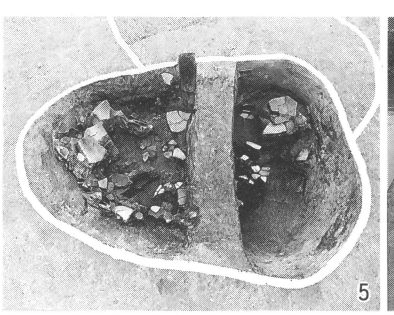


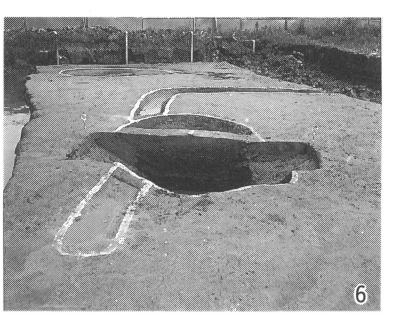
Ａｂ区　ＳＺ01

廃棄土坑Ａ
Ａｂ区ＳＫ15

廃棄土坑Ｂ
Ａａ区ＳＫ09







第４図　遺構写真

ているほか、炭化材が放射状に出土し、「垂木」等の上部構造材であったと考えられる。また、Ａａ区ＳＢ102（第２図）では、一部の土器が垂木の下側から出土していることから、住居が放置された後の出火ではなく、使用段階の出火であった可能性が強い。

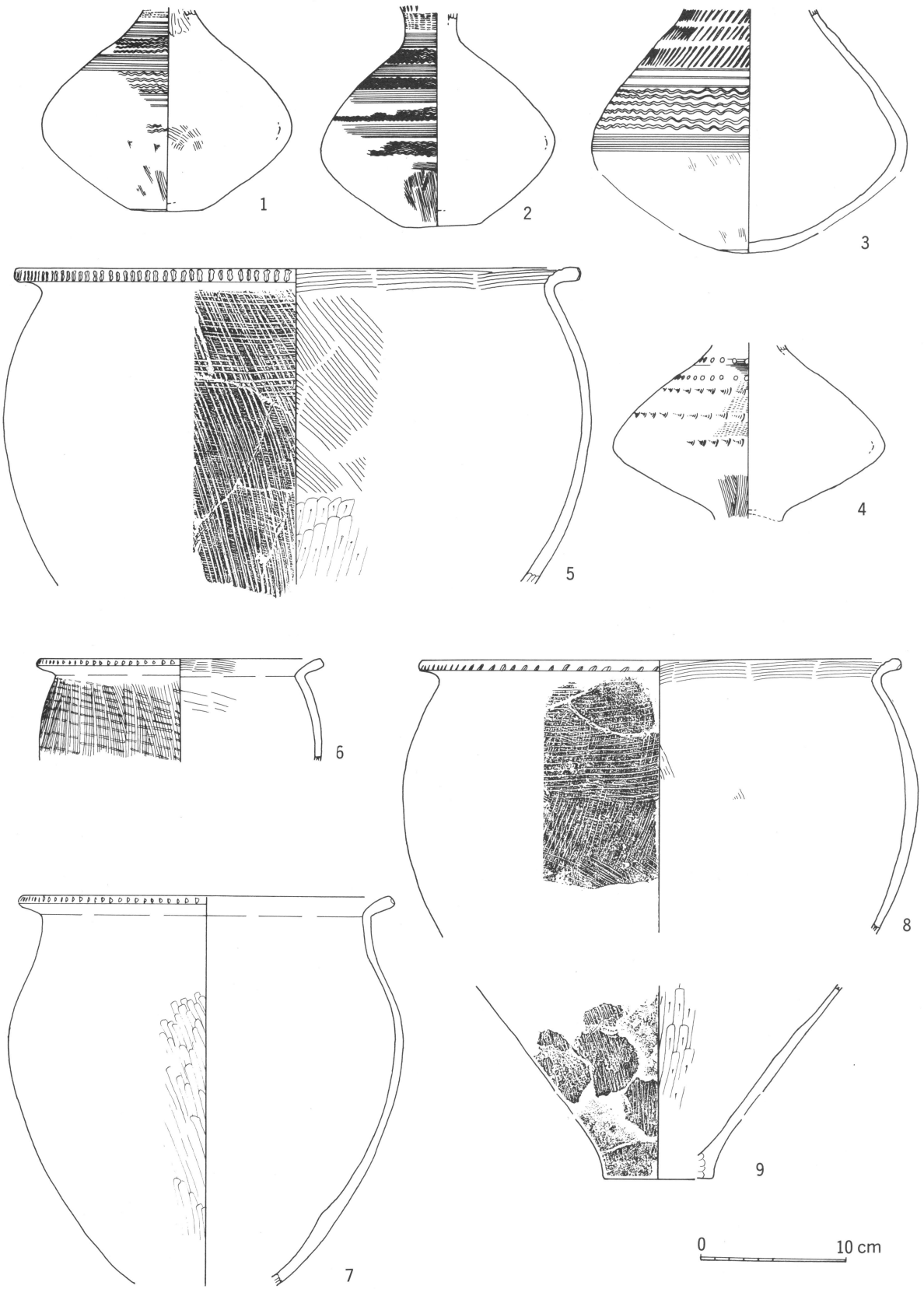
Ａ－２期の遺構では、Ａ－１期の遺構面の0.2m程度上層が検出面である。具体的には方形周溝墓・土坑・溝で構成される遺構群となる。分布範囲はＡａ区・Ａｂ区・Ｂａ区を中心とする。方形周溝墓は８基検出された。一辺12m程度と、一辺７m程度の二種類の規格がある。また、方向に類似性が認められ、一部は周溝を共有する。土坑は多数検出されているが、注目できるものに廃棄土坑がある。廃棄土坑は、平面形が円形ないし楕円形で、検出面からの深さが0.5m程度のものを廃棄土坑Ａ、平面形が直径１m程度、検出面からの深さが、１m程度のものを廃棄土坑Ｂと区分する。廃棄土坑ＡはＡｂ区、Ｂｂ区で３基検出された。基本的に埋土は１層で、大量の土器を出土することが特徴である。廃棄土坑ＢはＡａ区の北東部分で２基検出された。埋土は「縞」状の堆積物で、炭化米をはじめとする動・植物遺体が出土している。

Ｂ期の遺構　Ｂ期の遺構は、方形土坑が検出数約100基検出され、最も多い遺構となる。良好な出土遺物が得られない場合がほとんどで、年代を特定することは困難であるが、灰釉系陶器が出土する例がある。方形土坑は細分すると、方位の類似性から主軸をＮ－45°－ＥまたはＷ－45°－Ｎとするものと、Ｎ－75°－ＥまたはＷ－75°－Ｎとするものの二つに区分できる。ここでは前者をＡ群、後者をＢ群と呼称する。Ａ・Ｂ群の差は、分布域に現れ、前者が調査区の全域に分布するのに対し、後者はＡ区・Ｂａ区など、調査区の東側部分に集中する。ただしＤ区でこれが確認されていないことを考えると、方形土坑Ｂ群は、やや狭い範囲に限定されたものであった可能性が高い。いずれも出土遺物は乏しいが、少量の灰釉系陶器（第６図－２・６・13・18）がある。

そのほかのＢ期の遺構としては、形状などに共通性がみられない土坑がある。大半は直径１m未満、検出面からの深さが0.2m未満の規模である。その中でもＢｂ区ＳＫ54・同ＳＫ58は比較的大型の土坑である。前者からは第６図－５・14・15、後者からは同16が出土している。

遺物　今回の調査で出土した遺物は、コンテナー約200箱（一次整理段階）を数える。内訳は、土器・石器・金属製品があるが、土器が最も多い。時期的にはＡ期に属するものがほとんどで、Ｂ期に属するものは数箱を数えるに留まる。以下、遺物について時期別に説明を加える。

Ａ期の遺物（第５図）　Ａ期の遺物には弥生土器・石器などがある。掲載した資料は、いずれもＡｂ区ＳＺ01周溝から出土。器種には壺と甕がある。１～４は壺。いずれも口縁部を欠く。肩部を中心に、クシによる直線文・波状文・刻目文・簾状文・扇型文などを施す。５～９が甕。９は平底。８・９は同一個体となる。口唇部には、クシによる刻目文またはオシビキ文を施す。外面調整は、５・６・８・９がハケメ調整によるが、６はタタキ調整も施す。７は斜方向のやや幅の広いミガキ調整である。



第 5 図　A 期の遺物

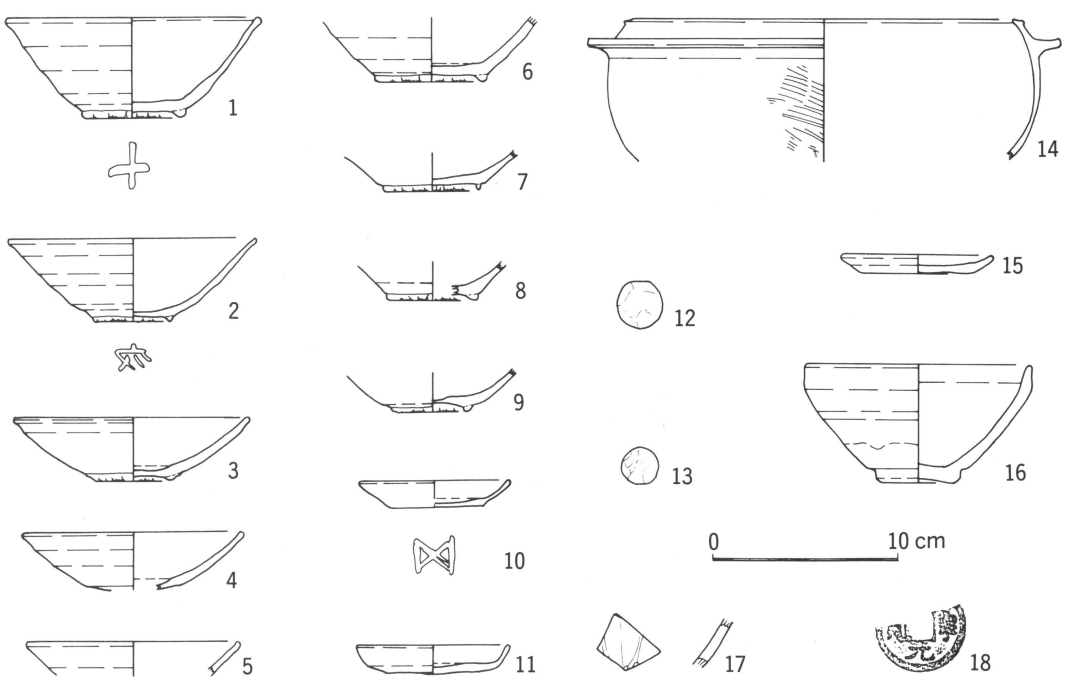
B期の遺物（第6図）　B期の遺物には灰釉系陶器・土師器・施釉陶器・銭貨などがある。第6図には遺構資料の他、包含層資料も図示した。1～13は灰釉系陶器。1～9は椀。いずれも北部系。1～3は外底部に墨書が確認される。1は『十』。2・3は判読できない。出土位置は、2がCb区SK08、5がBb区SK54、6がD区SK02。10・11は小皿。やはり北部系。10は、外底部に墨書を確認できるが判読できない。出土位置は、10がBb区SK58、11がBb区SK37。12・13は陶丸。13はBa区SK88出土。14・15は土師器。14は羽釜。体部外面の調整はハケメ調整。15は小皿。手づくねによる。いずれもBb区SK54出土。16は施釉陶器。器種は椀。Bb区SK58出土。17は貿易陶磁。青磁で器種は椀、18は銭貨。北宋銭で熙寧元宝（1068年初鋳）。

まとめ　今回の調査成果と課題を以下にまとめる。

1．A期は弥生時代中期末（高蔵式期）に限定でき、ごく短期間である。通常言われるように、当地域ではこの段階にこうした集落がいくつか知られている。また、一方で大規模集落が混乱する事実も指摘されており、この段階が社会的な変容期に該当する可能性が高い。一色青海遺跡は調査面積が8800㎡にも及ぶ関係上、こうした短期間の遺跡についての実体を把握する好例となり得よう。

2．B期の方形土坑は主軸の違いにより、A群・B群と区分することができた。これを過大評価すれば、本年度の調査区は大きく二つの概念で方形土坑が形成されたこととなる。分布状況の濃淡とあわせ、方形土坑の性格を判断する上で何らかの参考になると考えられる。

（池本正明）



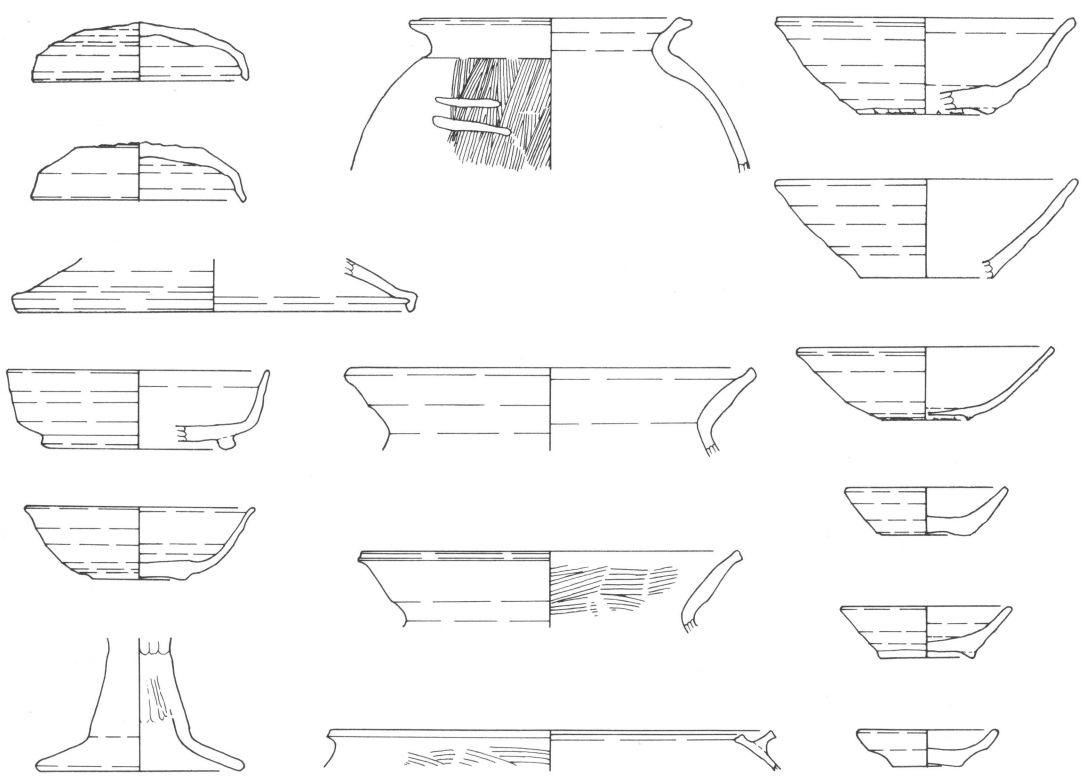
第6図　B期の遺物

正楽寺・儀長城遺跡

調査の経過　正楽寺・儀長城遺跡は、稲沢市儀長町に所在し、稲沢市のほぼ中央を蛇行しながら流れる三宅川が形成した自然堤防上の微高地に位置する。標高は2.6ｍ前後で三宅川右岸に立地し、平成３年度に本センターが調査した堀之内花ノ木遺跡に隣接している。発掘調査は、県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成６年１月～３月にかけて実施した。　（前田雅彦）

調査の概要　本年度の調査区は面積460㎡をはかる。調査区は東側が三宅川の堤防と接し、地形的には微高地の東端部にあたる。今回検出できた遺構は、竪穴住居・土坑・溝があるが、土坑のなかには堀立柱建物の柱穴の可能性をもつものも存在している。遺構の分布状況は西側が濃密で、東側は希薄となる。年代は６世紀～13世紀と、やや幅があるが、６～10世紀と13世紀にややまとまりをみる。出土遺物は、須恵器・土師器・灰釉陶器・灰釉系陶器などがある。数量はコンテナ約20箱（一次整理段階）を数える。

なお、本年度の調査区では遺跡の名称となっている「正楽寺」も「儀長城」もその実体を確認することができなかった。　（池本正明）



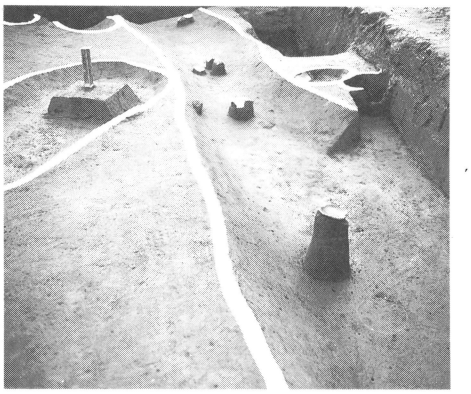
出土遺物実測図（1/4）



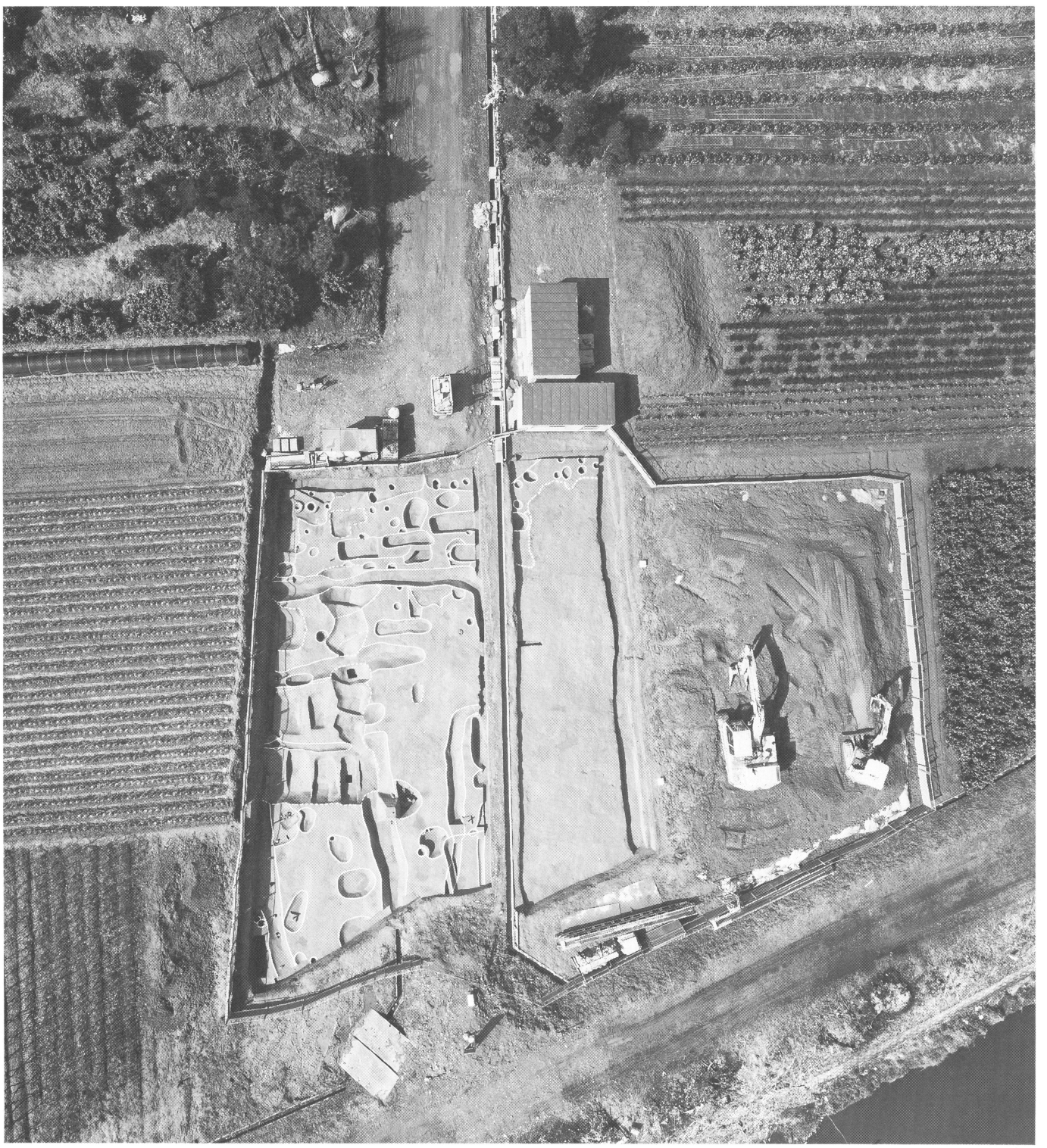
竪穴住居



土　坑



溝

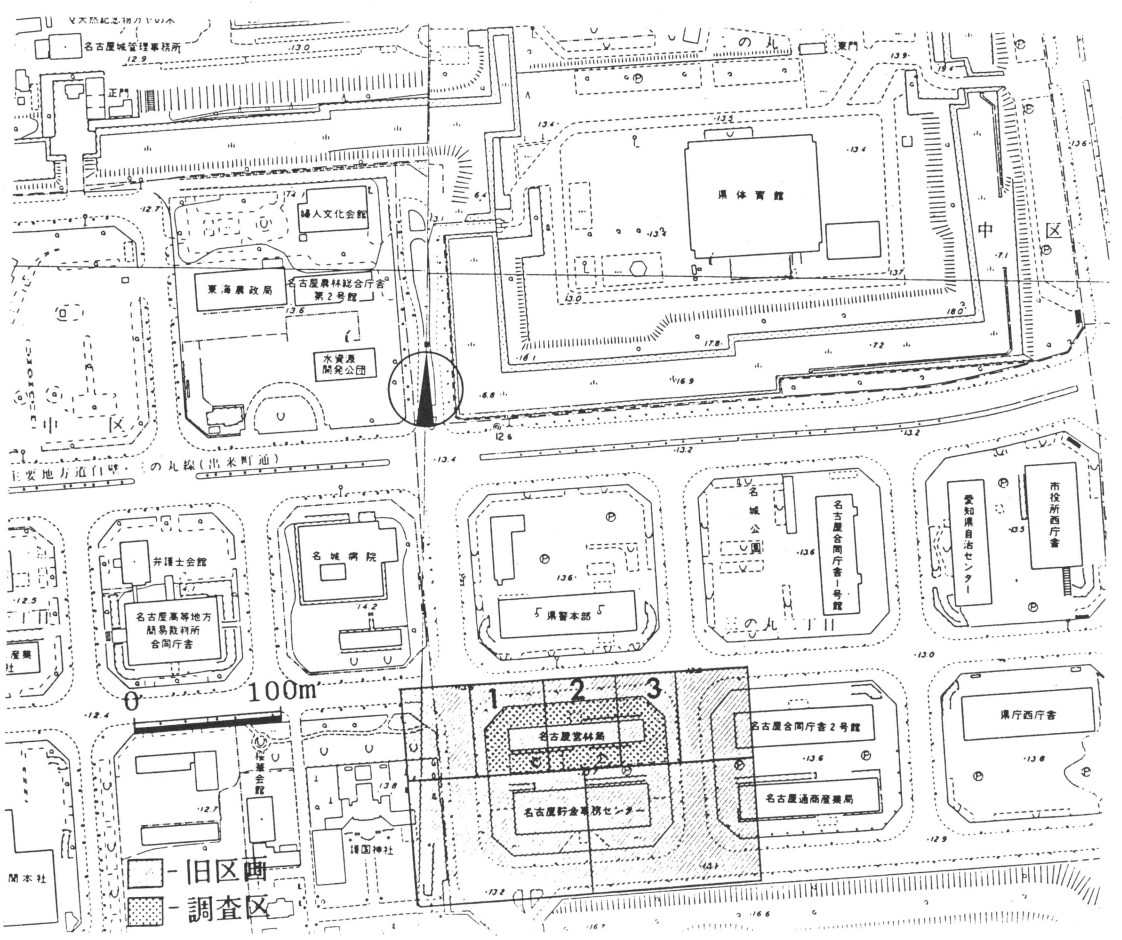


調査区全景

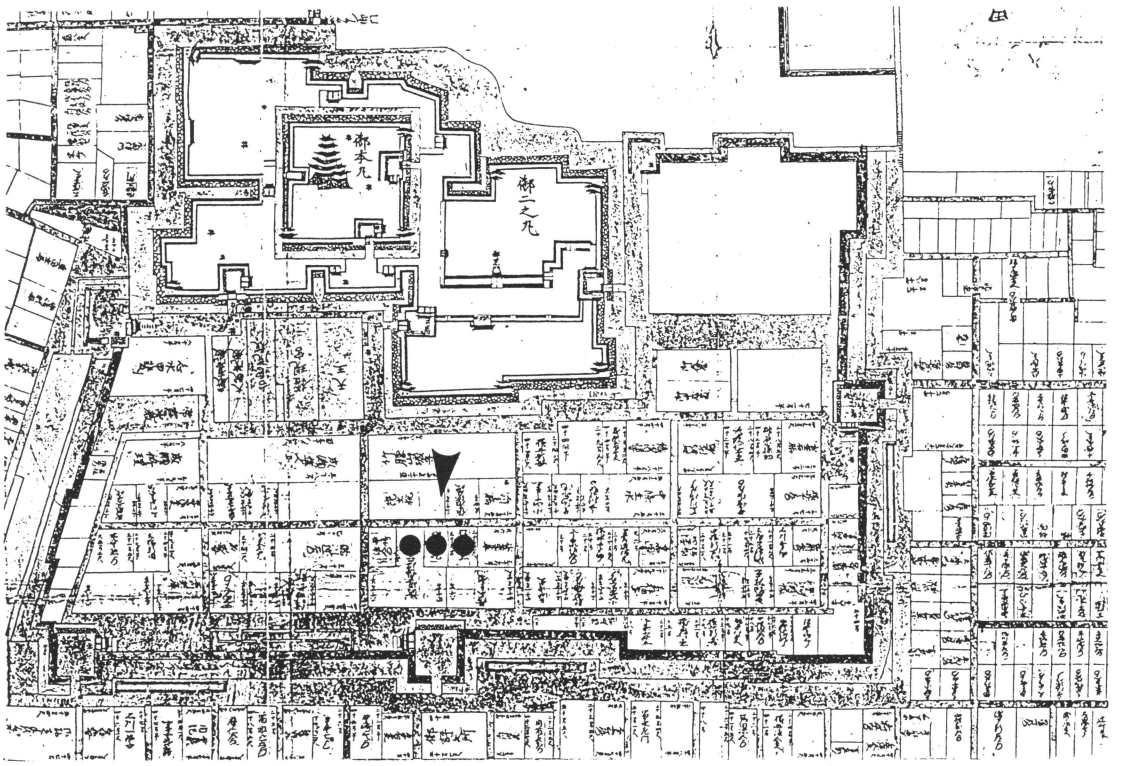
名古屋城三の丸遺跡

調査の経過　名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区三の丸地内に所在する複合遺跡で、弥生時代から現在に至るまでさまざまな時代における生活の痕跡が確認されている。現在まで7地点における発掘調査が実施されているが、平成5年度の調査は、愛知県による「三の丸共同施設（仮称）」が名古屋営林支局跡地に建設されることになり、その事前調査として実施した。調査面積は3404㎡である（第1図）。

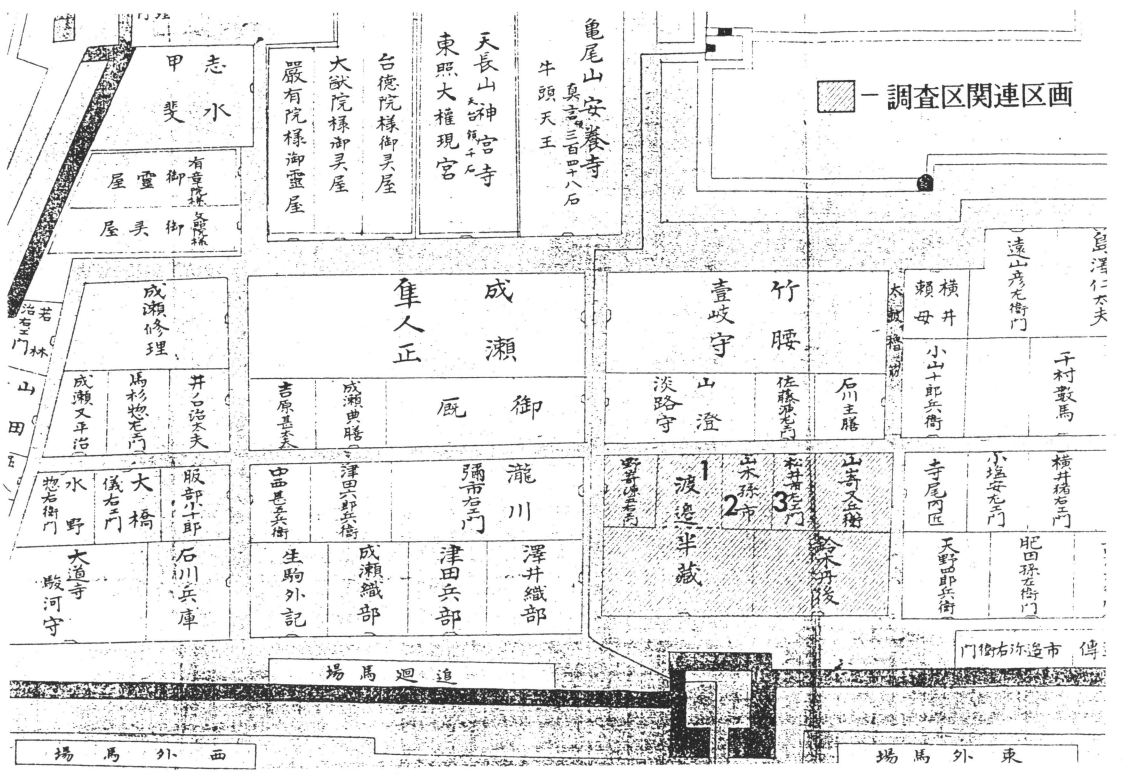
調査の概要　本遺跡は、名古屋台地の北西端に立地する。「三の丸」という区画は、近世城郭の中では家臣の居住域として機能していた場合が多いが、名古屋城もこの例にもれない。調査区は三の丸内では中央南端の旧本町御門に近く（第2図）、北辺を中小路、南辺を南御土居筋、東辺を御太鼓櫓筋、西辺を大名小路に囲まれた区画内に存在する（第1・3図）。この区画内には、大小併せて5～6軒の屋敷が江戸時代を通じて配されている。調査区内には、東西に3軒分のほぼ同幅の屋敷地が並立している。



第1図　調査位置図



第２図　尾府名古屋図（部分　宝永頃　蓬左文庫蔵）



第３図　名古屋城三の丸図（部分　正徳頃　鶴舞図書館蔵）

この屋敷地の伝邸関係は、第１表に示すようにかなり複数にわたっている。これは屋敷自体の性格が個人に帰属するものではなく、役宅的性格であったことを物語っている。調査地点における江戸時代最後の居住者は、１＝渡辺半蔵（一万三百三十石）、２＝横井万之助（六百石）、３＝松井雄之助（四百石）である（いずれも世襲名）。

調査区は旧庁舎を囲む部分を南北で二分割し、４月より北側から調査を進めた。現地説明会を10月に実施し、この後南側部分を11月より調査した。

調査区における基本層序としては、近世の遺物包含層の間に、熱田層がブロック状の塊となって多量に混じる土層があり、これがほぼ全域にわたって観察される。近世層はこの整地土と思われる層を指標として上下２層に分割し、近世上層は整地土層を取り除いた面で、近世下層は熱田層の最上面で戦国時代以前の遺構とともに検出を実施した。

遺構　近世上層で検出した遺構は、溝、土坑、柱穴、井戸、庭園跡などである。これらの遺構の時期は、遺構内の伴出遺物から18世紀末～明治時代初頭までのものと考えられるが、なかでも18世紀末～19世紀初頭の遺物が多くみられた。溝の中には屋敷境と思われるもの（Ａ・Ｂ・Ｃ）も検出されているが、溝の断面などから屋敷替えに伴う再掘削及び整地と思われる行為がうかがえる。庭園跡と思われる遺構は、屋敷地３で検出された。燈籠片、庭石と思われる玄武岩、根石を用いて据え置いた砂岩などが、掘り込みを持たずに蛇行して配されており、非実用的な配石であることから、庭の一部ではないかと考えられる。

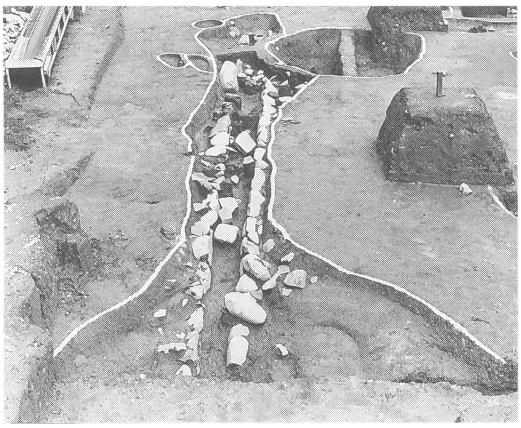
近世下層及び戦国時代以前の遺構は、堀、溝、大型土坑、土坑柱穴などである。これらの遺構の時期は、遺構伴出遺物から、弥生・古墳・戦国時代及び江戸時代前・中期のものと考えられるが、18世紀の遺物が多くみられた。

弥生・古墳時代の遺構は溝のみであるが、いずれも南北方向に掘削されており北側に向かってわずかに下る。時期は弥生時代に関しては中期のものと思われる。

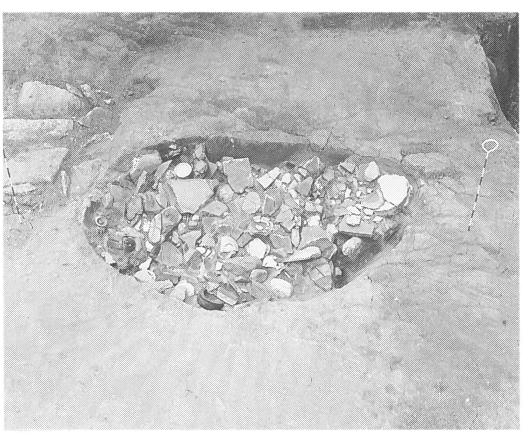
戦国時代の遺構は、堀、溝とこれに伴う柵列を検出した。調査区東端を南北に走る堀は、検出面での幅11.4ｍ（推定）、深さ４ｍを測り、断面形態は逆台形を呈する。調査区南西端でコーナーが検出された堀は、これより規模が小さく検出面での幅は3.6ｍ、深さ３ｍで、断面形態はやや袋状を呈する。さらに規模が小さく断面形態が逆三角形を呈する、いわゆる「薬研堀」も数条検出した。これらは、近世以前の那古野城関連の遺構と考えられる。

江戸時代前・中期の遺構は、溝、大型土坑、土坑などを検出した。なかでも大型土坑は上層では検出し得なかったもので、平面形態は方形を呈し地下式または半地下式の室的な構造が考えられる。深く掘削された遺構を南北の調査区で比べてみると、南側調査区に多く見受けられる。こうした検出状況は、南側調査区が江戸時代を通じてこの区画の屋敷裏にあたったこと、北側調査区は屋敷表に近かったという空間構成と無関係ではないであろう。

遺物　出土した遺物は江戸時代のものが圧倒的に多く、陶磁器を中心としてコンテナ800箱以上にのぼる。これらは各時代における居住者の暮らしを伝えるもの、家紋入りの瓦など居住者の推定に役立つものなど、膨大な情報をもたらすものである。平成６年度末の報告書刊行に向けて、現在整理検討中である。　（松田　訓・杉浦　茂・伊藤秀紀）



第４図　石組溝

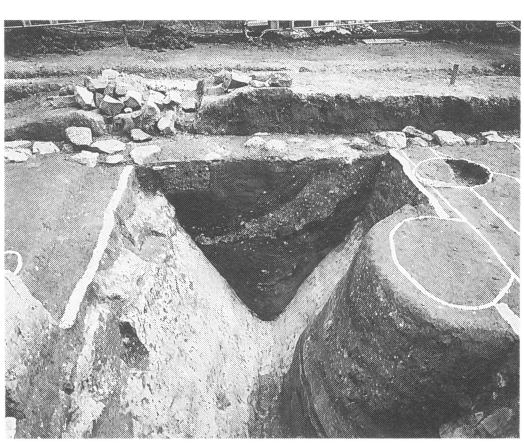


第５図　ＳＫ201遺物出土状態

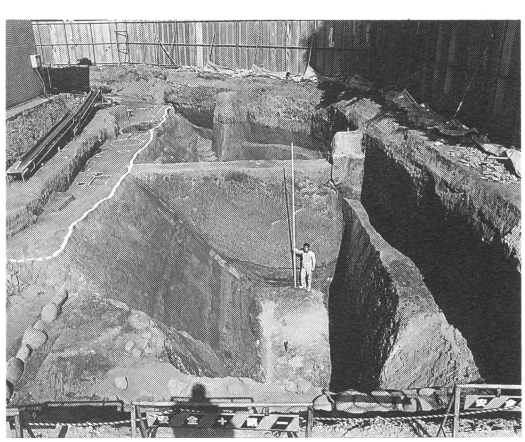
年代	屋敷地１	屋敷地２	屋敷地３
1600	清水　兵助 清水　兵助 佐枝　種定 長野　重政 伊達　半平 渡辺　奉綱 渡辺　顕綱 吉田六郎右衛門 織田　貞幹 山内　知重 （渡辺半蔵添地） 渡辺　定綱	山本内蔵助 山本宗兵衛 山本　秀熊 横井　時良 沢井　元智 松井　充房 臼井　常春 臼井　常義 山本　成昌	三宅逸平治 三宅逸平治 三宅　重良 津田　信明 松井　玄吉
1700	渡辺　直綱 渡辺　綱保 渡辺　綱通	山本　成之 桜井　尚定 千賀　信賢 佐藤　忠盈 佐藤　倶忠 成瀬　正明 松井　宜喬 横井　宏時 横井　時恭	松井　弐吉 松井　一澄 松井左治馬
1800	渡辺　綱光 渡辺　剛綱 渡辺　寧綱 渡辺　綱倫 渡辺　潤綱	横井　時邦 横井　金次郎 横井　万之助	松井　要人 松井要之助 松井　吉保
明治維新	⇩ 領地の寺部（甸師）へ	⇩ 領地の祖父江へ	⇩ 巾下元堀詰町で酒肆を

＊『金城温古録』『士林泝洄』『旧邸礎跡略』をもとに作成

第Ⅰ表　居住者の変遷



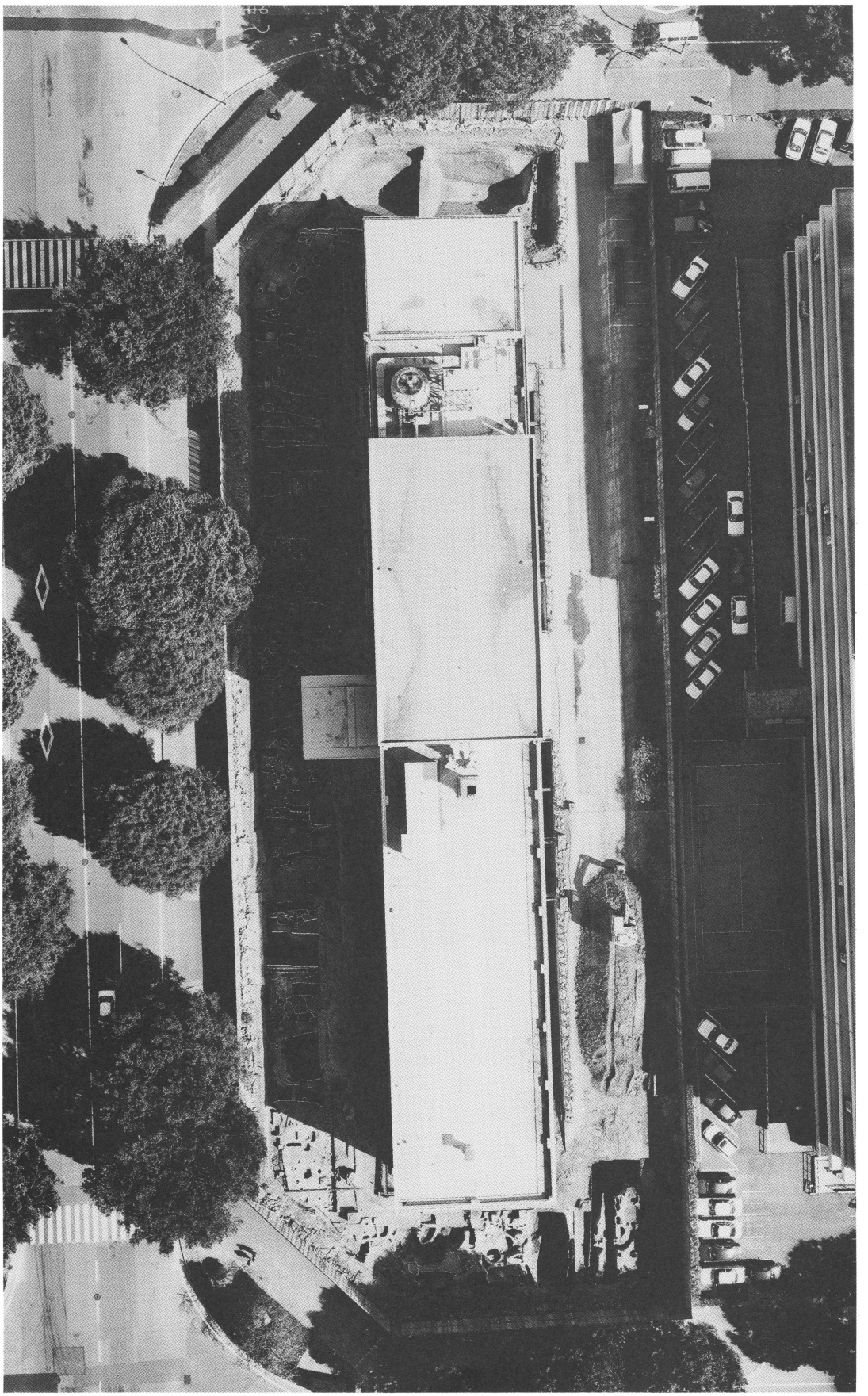
第６図　ＳＤ604



第７図　ＳＤ602



第 8 図　調査区主要遺構図



第 9 図　全景（北側調査区下層完掘写真）

刀池古窯跡群（かたないけこようせきぐん）

調査の経過　刀池古窯跡群は、常滑市に近接する知多市大興寺の丘陵地帯にいくつかの支群にわかれて所在する古窯跡群である。現在まで数回の発掘調査をうけているが、今回は知多市教育委員会が1985年に発掘調査した地点（「愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅵ）」では刀池古窯A群）を、愛知県企業庁による内陸用地造成に先だってさらに面積を広げて発掘調査した。

調査地点は、丘陵から西の伊勢湾に向かってのびる小さな尾根上に当たる。地形は、土取りや畑地の開墾のために現況ではかなり変化している。立木を伐採後、尾根の両斜面に沿って４本のトレンチを掘った結果、南北両斜面から窯跡が確認されたため、北側斜面をA区、南側斜面をB区として調査した。その結果、６基の窯が検出された。いずれも分焔柱をもつ窖窯である。以下、調査区ごとに記述する。

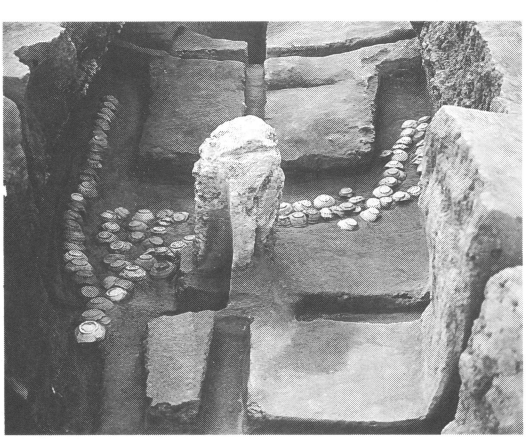
A区の概要　A区では、窯体は２基（ＳＹ01、02）検出された。ＳＹ01は、焼成室半ばより上部が土取りによって消失し、分焔柱も基部がわずかに残るのみで破損が激しい。ＳＹ01は1985年に知多市教育委員会が一部を調査した刀池11号窯に当たる。ＳＹ02は、残存長が９ｍ以上をはかり煙道部をやはり土取りで破壊されているが、それ以外はよくその原形を残している。分焔柱は約１ｍほどが残存している。

断ち割り調査の結果、両窯とも分焔柱は掘り抜きでつくられており、床面や壁面では補修の痕跡は確認されなかった。ＳＹ02では、床面下から山茶椀を伏せて並べた除湿・排水施設と思われる遺構が検出された。これは焼成室下半部から分焔柱に向かって左右の窯壁に沿って並べた茶椀列を、焼成室最下部で左壁沿いに合流させたものである。茶椀列の末端はそのまま細い溝に接続して前庭部まで伸びている。。

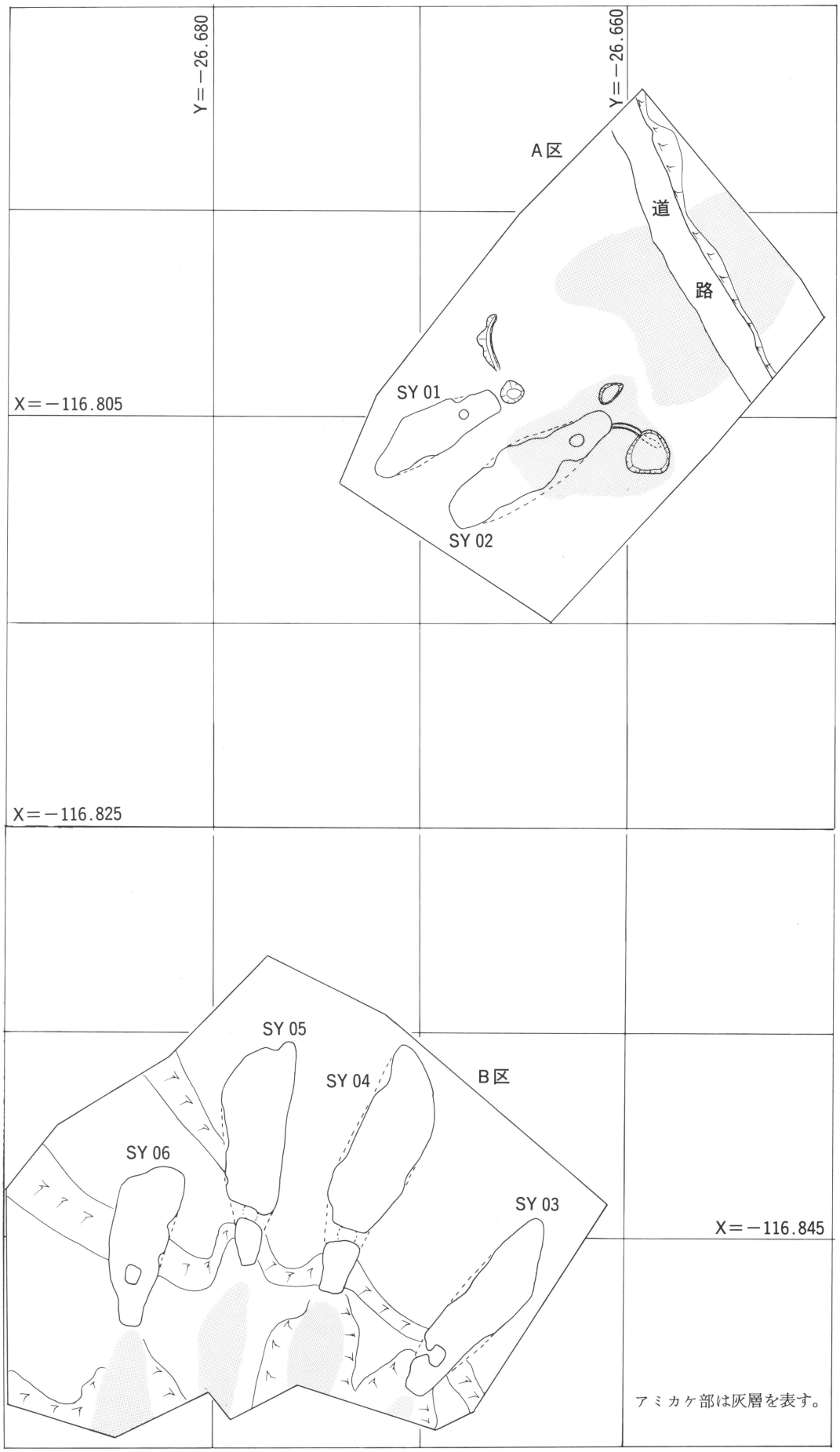
ＳＹ01、02の焚口前のかなり急な斜面には約50cmの厚さで灰層が広がり、灰原を形成し



A区全景（東より）



ＳＹ02除湿・排水施設（北より）

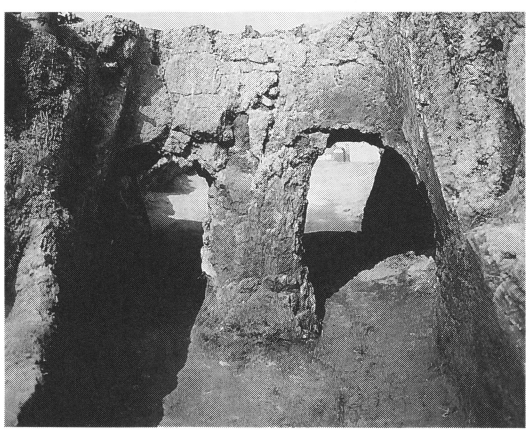

Y＝－26.680
Y＝－26.660
A区
道
路
SY 01
SY 02
X＝－116.805
X＝－116.825
SY 05
SY 04
B区
SY 06
SY 03
X＝－116.845
アミカケ部は灰層を表す。

第Ⅰ図　遺構配置図

ている。灰層は単一で間層はみられない。またＳＹ02を覆うように別の灰層が広がっている。この灰層はＳＹ01の灰層とも考えられるが、ＳＹ01はＳＹ02に先行する可能性もあり、今後の遺物の検討によってその性格を明らかにしたい。


Ｂ区全景（東より）

Ｂ区の概要　Ｂ区では、窯体は４基（ＳＹ03～06）検出された。ほぼ平行に築窯されているが、焚口のレベルにはかなり差がある。いずれも焼成室上部から煙道部にかけては土取りで破壊されて、全形を知ることはできない。また焚口付近は畑地の開墾で整地を受けているため、燃焼室の窯壁は大きく破損しているが、分焔柱は各窯とも予想外によく残り、特にＳＹ04、ＳＹ05では分焔柱部分の天井まで残っていた。


ＳＹ04分焔柱（南より）

Ｂ区では、Ａ区のＳＹ02でみられたような床面下の除湿・排水施設は、いずれの窯からも検出されなかった。ただＳＹ04では、床面直下から直径２cmほどの陶丸やほぼ同じ大きさのさいころ状の製品が30個ほど出土した。これらは意識的に並べられたとは考えられないが、なぜ床面下にこのような状態でおかれていたかは不明である。

Ｂ区の各窯の焚口前は、Ａ区と違い緩やかな斜面となっている。灰原は、この緩斜面に細長く広がっている。灰層の厚さは、わずか10cm弱である。調査区の設定の関係で、灰原は焚口に近い部分しか調査できなかったが、それぞれの窯の焚口のレベルに差があることから、各窯の灰原は明確に区分することができた。

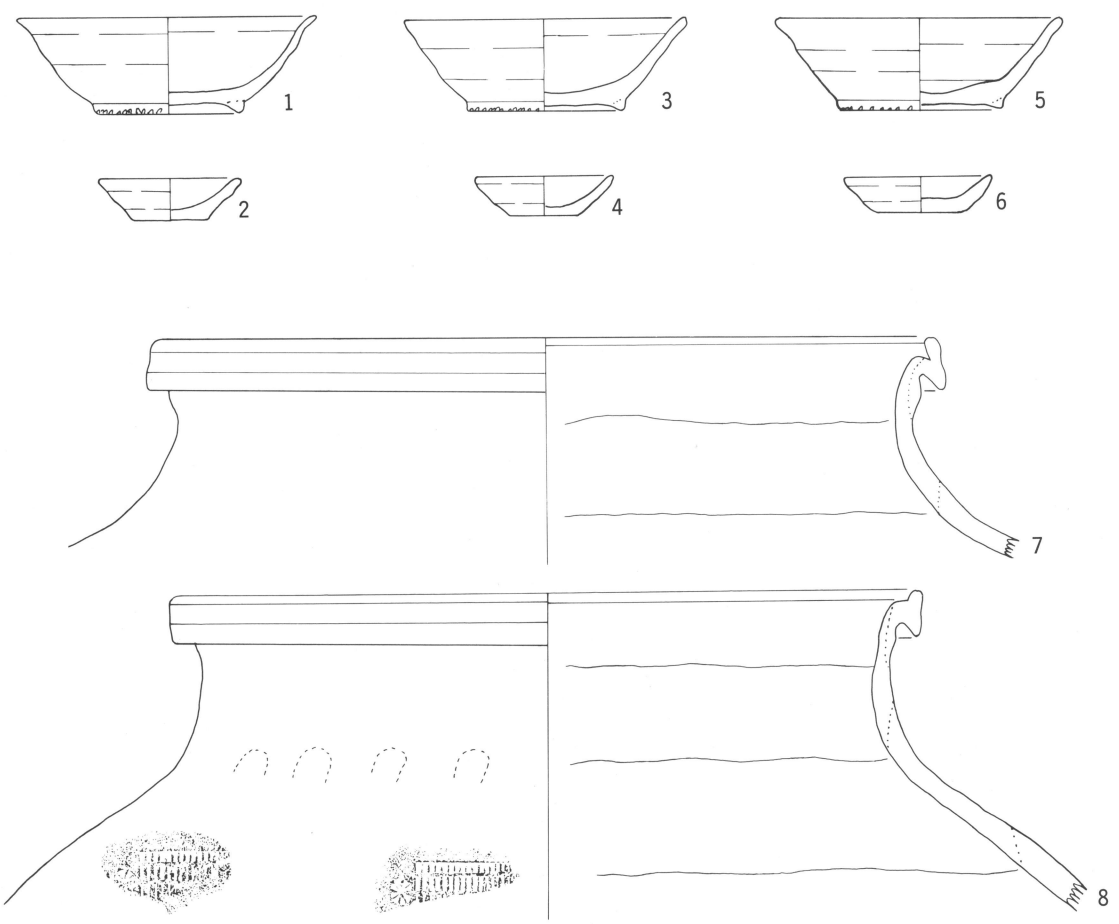
遺物　Ａ区の遺物は、ほとんどが山茶椀と小皿である。山茶椀は口径が15～16cm、器高が５cmほどで体部はやや丸みをおびている。口縁部は、薄くてやや外反するものと厚くて直立に近いものがみられる。籾痕をもち低くつぶれた高台をもつ。小皿は口径が７cm、器高が２cmほどで高台はついていない。これらの山茶椀・小皿は、12世紀末から13世紀初頭にかけての時期のものと思われる。他にはごく少数の鉢や陶錘がみられる。

Ｂ区の遺物は、甕が圧倒的に多い。直立する頸部をもつ広口壺に近い形態をもつものもみられる。４基の窯ともほぼ同じかたちの製品を生産している。口縁部は「Ｎ」字状に折り曲げられて縁帯を形成しているが、縁帯の幅は狭い。押印を施したものは少ないが、肩部に１列の押印列をもつものもある。その他の遺物として、山茶椀、陶丸などが少数みら

れる。B区の遺物は13世紀中～後葉の時期と思われる。

窯道具は、A・B区とも焼台のみ出土した。

まとめ　今回の発掘調査の結果、刀池11号窯以外に新たに5基の窯が調査され、知多市南部の古窯群の研究に新たな資料を加えることができた。また、遺物からみる限り、A区の2基、B区の4基はきわめて近い時期の窯といえるが、窯の位置関係からすべての窯が同時に操業していたとは考えられない。特にB区は出土遺物が属する窯が特定できるため、遺物の分析によって短い時間内での製品の形態の変化を明らかにできる可能性がある。またSY02にみられる除湿・排水施設や各窯の構造・遺物を他の古窯と比較・検討することで、工人集団の動きを含めた知多半島古窯跡群の中での窯業生産のありかたを考察する手がかりを得ることができたといえよう。（余合昭彦）



第2図　出土遺物（1/4）
1・2：SY01、3～6：SY02、7：SY06、8：SY05

烏帽子遺跡

調査の経過　烏帽子遺跡は東海市の高横須賀町に所在し、名古屋南部の臨海工業地帯から天白川を隔てた知多半島の西岸北部に位置する。地形的には、知多丘陵西側の沖積低地にあり、海岸線と並行する３条の砂堆列のうちの最も海岸線沿いの砂堆上に立地し、現地表面の標高は３ｍ前後である。また、本遺跡の周辺には、同砂堆上に、弥生時代の遺跡と製塩遺跡が散在している。

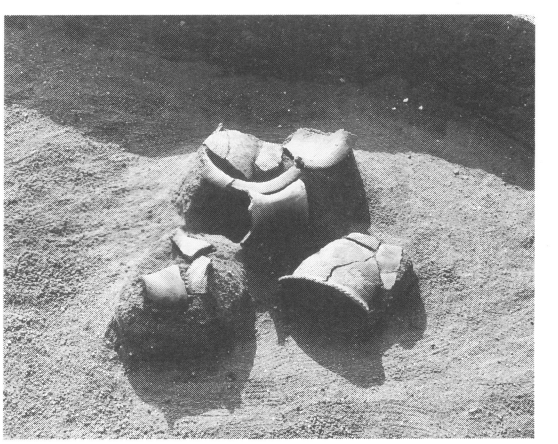
今回の調査は、国道155号線の建設に伴う事前調査として実施した。期間は、平成５年の11月から平成６年の２月までで、総面積2,040㎡である。

調査の概要　調査区は、国道155号線の建設予定地内を横断する通学路・生活道路の関係から、Ａ・Ｂ・Ｃの三区を設定し、Ａ区を調査した後、Ｂ・Ｃ両区を同時に調査した。

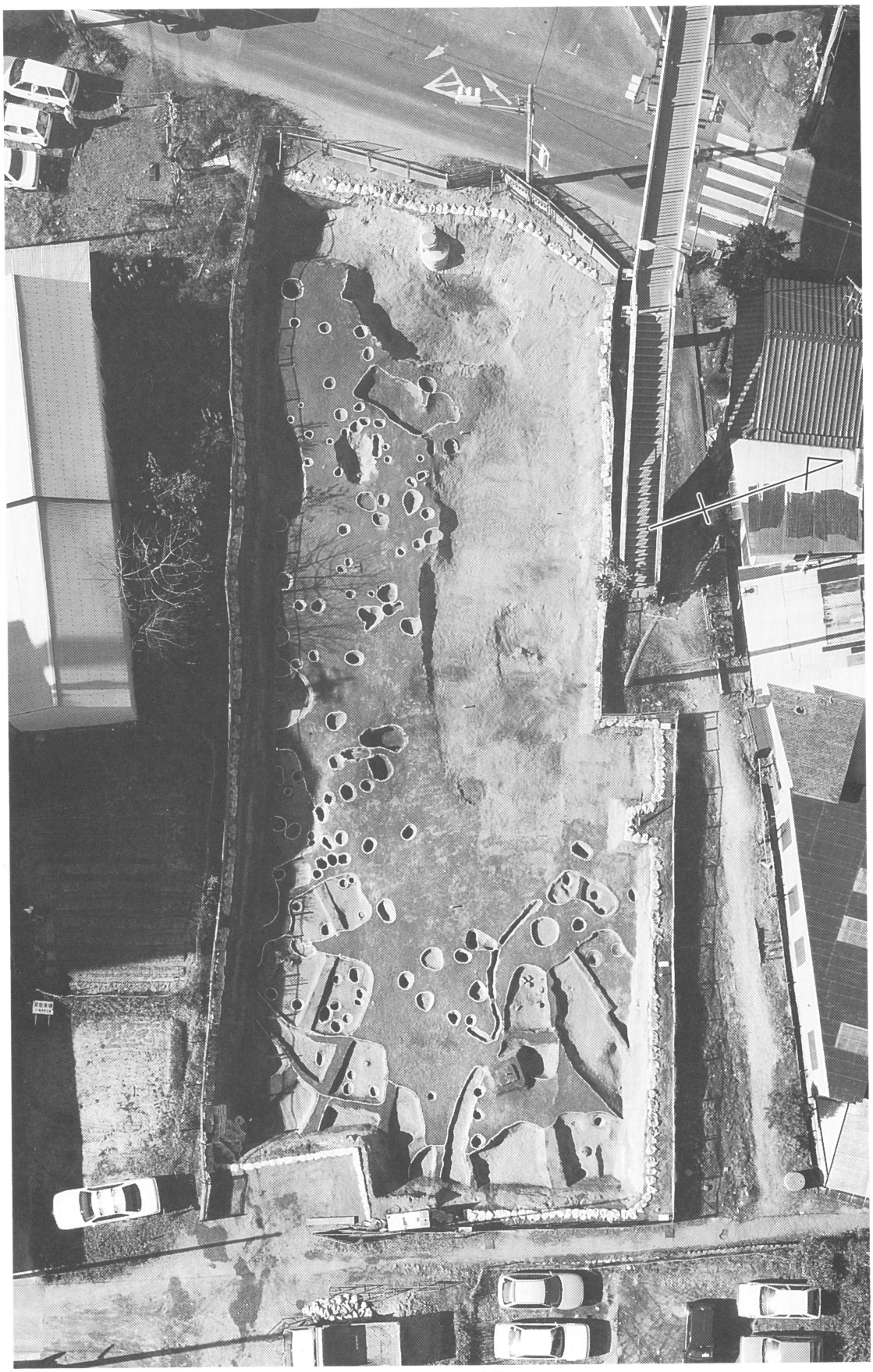
Ａ区では、現地表面下に濃茶褐色砂層・黒褐色砂層の遺物包含層の堆積が認められた。これらの層から、弥生時代から平安時代までの遺物が混在して出土したが、層位的に明瞭に分層することはできなかった。遺構としては、近世及び弥生時代から古代にかけての溝・土坑・ピットなどがある。近世の遺構については、調査区の南西角で東西方向の溝１条とピット群が検出された。調査以前に、尾張藩の第二代藩主徳川光友が造営した横須賀御殿の一角がＡ区の西部にかかる可能性が指摘されていたが、出土遺物が乏しいため、検出された遺構との関係は確認することができなかった。弥生時代から古代の遺構については、土坑多数と溝２条が検出された。土坑の中には住居跡かと思われる遺構もあるが、炉・カマドなどは検出されていない。遺物には、弥生土器・石器・須恵器・土師器・製塩土器・近世陶磁器などがある。特に、弥生土器は遺構内より中期の良好な一括資料をえることができた。須恵器・製塩土器も相当量出土しており、本センターが昭和63年度に調査した松崎遺跡にちかい内容を示している。

Ｂ区では、西半部に近世の盛土と思われるオリーブ色粘質土ブロック層が現地表面下にみられる。この盛土は、先に述べた横須賀御殿と関係するとも考えられる。中央部では、御庭焼の製品や窯道具がコンテナ20箱程度出土した。窯体遺構は検出されなかったが焼土・灰が確認でき、御庭焼の窯跡であるならば、生産が行われていたことになり、注目に値する。下層にはＡ区でみられた黒褐色砂層の遺物包含層が堆積する。

Ｃ区は、大幅な攪乱を受けており包含層の残存状況は悪い。（秋田幸純）



Ａ区　ＳＫ200弥生土器出土状態



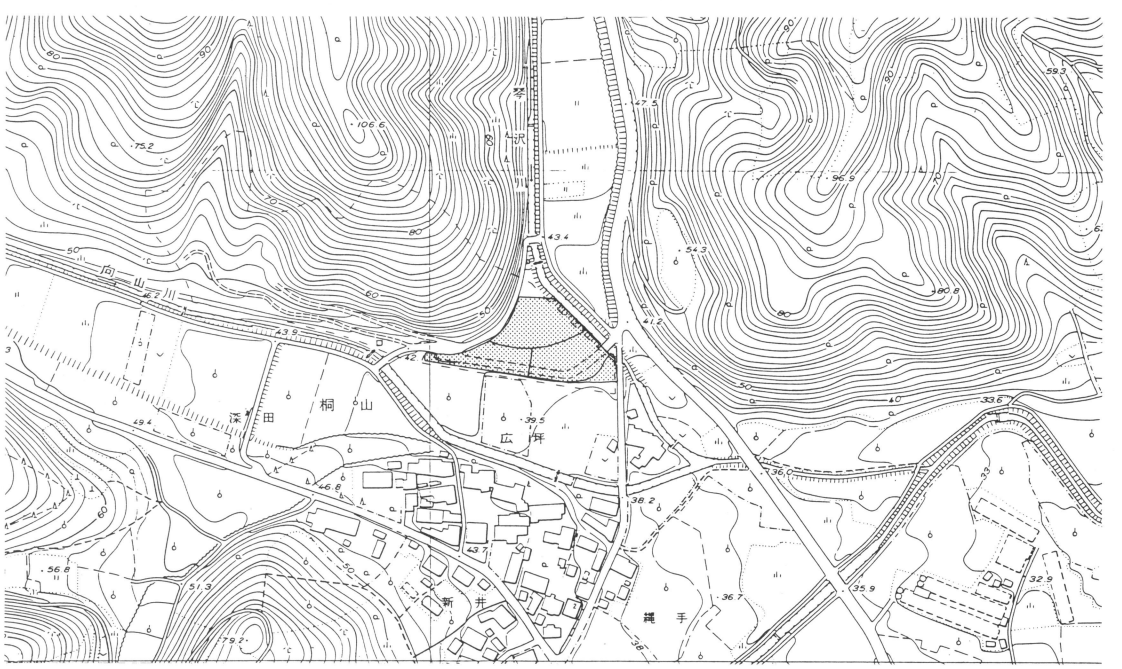
93 A 区　下面全景

広坪遺跡（ひろつぼいせき）

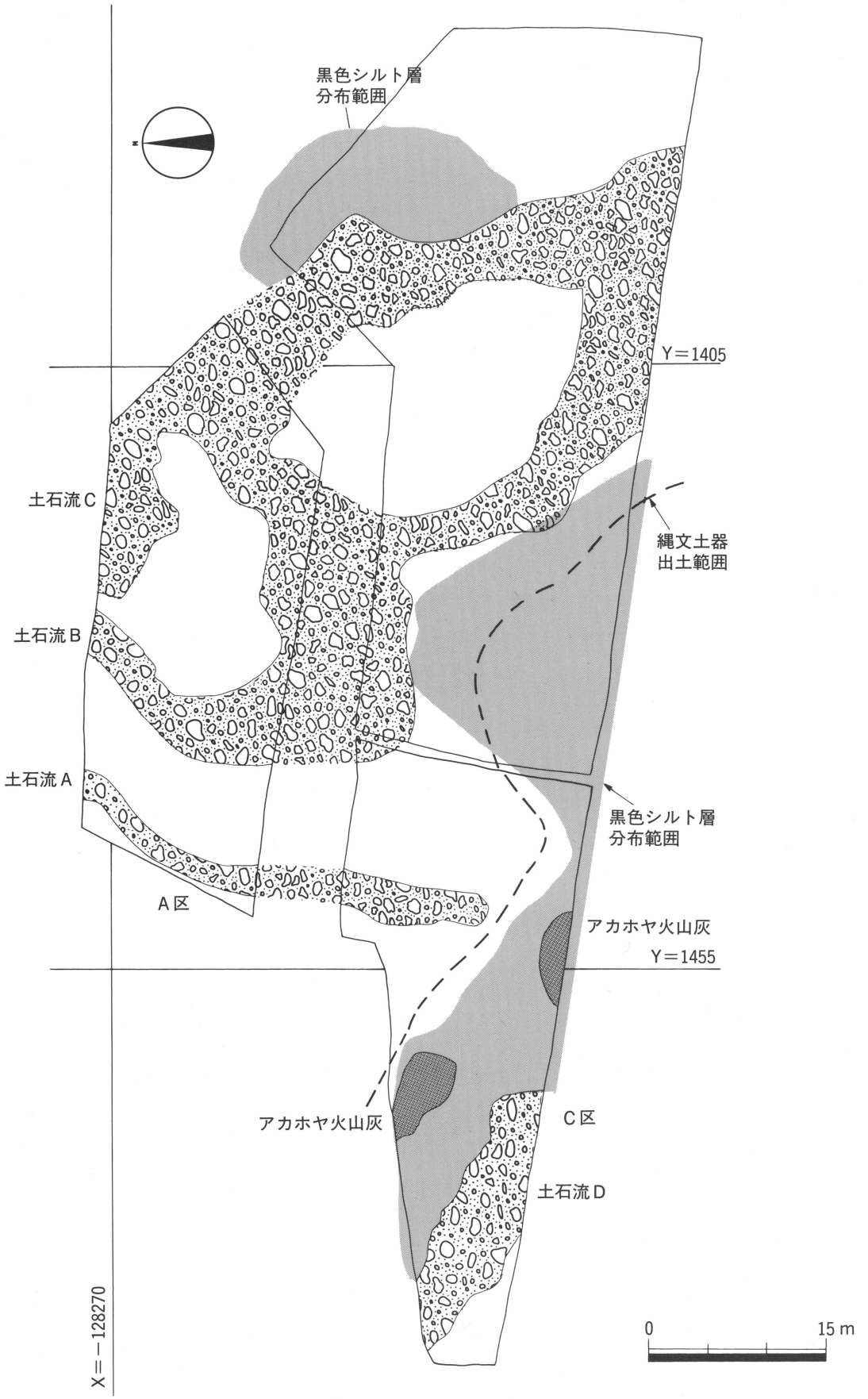
調査の経過　広坪遺跡は、額田郡幸田町大字桐山字広坪地内に所在する。琴沢川と向山川に挟まれた丘陵端部に位置し、標高は約38ｍである。本遺跡の発掘調査は、一般国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として、建設省中部地方建設局名四国道工事事務所より、愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積4,200㎡を平成５年９月から平成６年３月にかけて実施した。調査にあたっては、工事日程なども考慮して調査区をＡ、Ｂ、Ｃの３区画に分けて行った。（神谷知幸）

調査の概要　調査区は北は琴沢川と西は向山川にはさまれる谷底平野（土地条件図による）に位置し遺跡北西には丘陵地をひかえている。遺跡の層位は、両河川により形成された砂層と砂礫層の互層を基本とし、Ｂ区東部と西部及びＣ区にかけては、黒色シルト層の堆積が認められる。Ｂ区東部の黒色シルト層は北西部が厚く、南部及び東部が薄くなっており黒色シルト層に代わって下層に堆積している灰褐色シルト層が厚くなっている。Ｂ区西部の黒色シルト層は北部が薄く、南に下がるにつれ厚く一部溝状にくぼみを持っているところがある。Ｃ区中央部の黒色シルト層は、調査区を南北に横断する様に広がっており、南部では谷状に深く落ち込み、最も厚いところで最大120cmを測る。

このＣ区黒色シルト層中に、アカホヤ火山灰の堆積を確認した。特に、南部の谷状の落ち込みには厚く堆積しており、最大で厚さ26cmを測る。火山灰層は黄橙色と明黄褐色の２層に分かれ、下層の黄褐色層は薄く火山灰下降時の一次堆積、上層の明黄褐色層は周囲からの流れ込みによる二次堆積と考えられる。



第Ⅰ図　遺跡位置図（1/5000）



第2図　調査区略測図（S＝1/500）

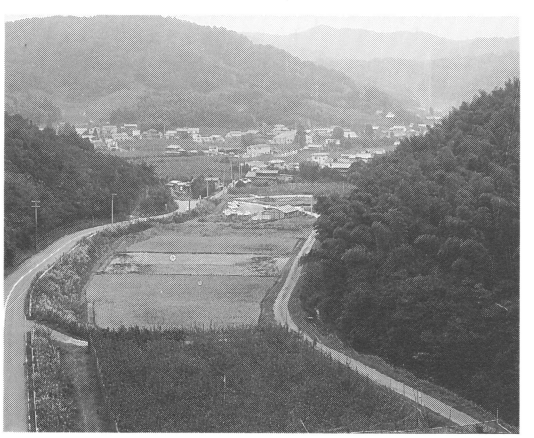
また、調査区の広い範囲にわたって土石流によって形成されたと考えられる溝状の砂礫の堆積層が検出されている。この土石流による堆積は４条確認されており、便宜上、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄと呼称する。土石流ＡはＡ区西部からＣ区北部にかけて南北に走っており、幅約２ｍ、深さ約70cmを測る。土石流Ｂ・Ｃは、Ａ区の南東部で１条になり、Ｂ区に入って２条に分かれ、再びＢ区の南で合流するという蛇行線を描く。土石流Ｄは、Ｃ区西部で検出され幅約６ｍを測る。

本遺跡から出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、灰釉陶器、灰釉系陶器等がある。

縄文時代の遺物は、早期と中期初頭のものがある。早期の土器は押型文土器（第３図３・４）と繊維痕を残す貝殻条痕文土器である。また、中期初頭の土器は、半截竹管による隆帯に爪形の連続刺突文を施したものやヘラ状具による三角状の連続刺突文を施したもので、北屋敷式に比定されるものである。（第３図５～11）。石器は石鏃（第３図１・２）と黒曜石等のチップなどが出土している。

弥生時代の遺物には、欠山式を主体とする台付き甕、壺等がある。これらの遺物は、土石流Ｂ・Ｃ及びＢ区東部の黒色シルト層より出土している。

灰釉陶器は、井ケ谷78号窯式から黒笹90号・折戸53号・東山72号窯式までと幅広くみられる。器種は瓶が２点出土している以外はすべて椀である。灰釉系陶器も鎌倉期から室町



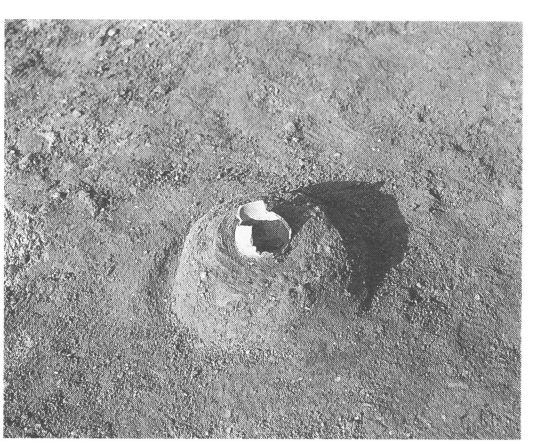
調査区遠景



土石流Ａ

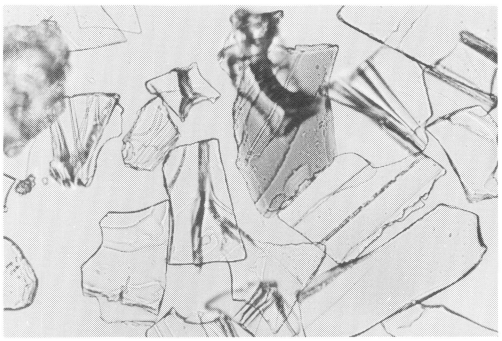


土石流Ｂ



弥生土器出土状況

期までの幅広い中でとらえられるが、灰釉陶器も含めてその出土数は縄文・弥生土器と比べ少ない。

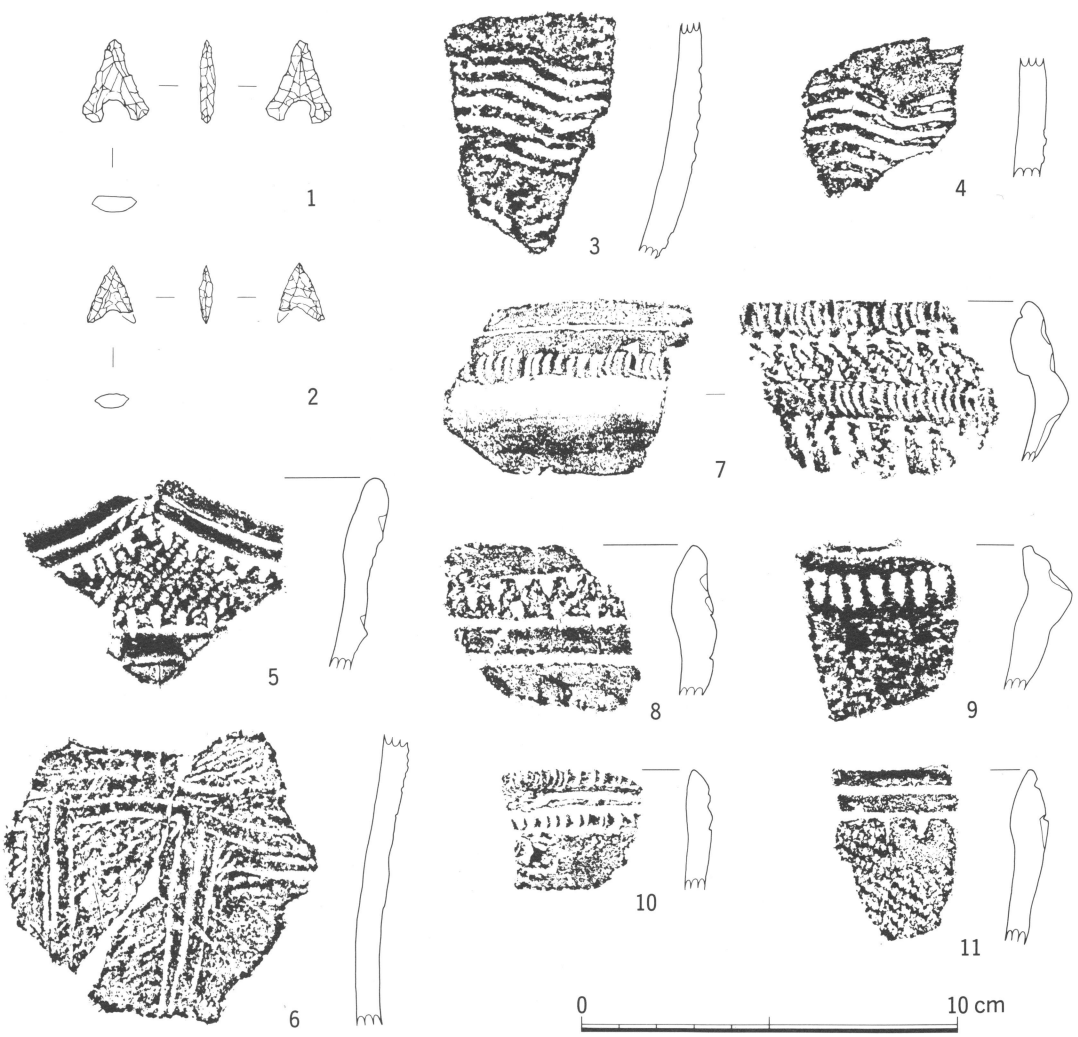


アカホヤ火山灰の火山ガラス
1辺0.25㎜程度の大きさの火山ガラス中央に褐色のガラスが見られる。

まとめ

広坪遺跡は、出土した遺物から縄文、弥生、平安から室町時代にかけての複合遺跡と考えられるが、各時期をとおして明確な遺構は検出されなかった。しかし縄文時代については、当地域でも類例の少ないアカホヤ火山灰を検出したことが特筆できるだろう。特に今回の調査では、火山灰層の下層と上層からそれぞれ縄文早期と中期初頭の遺物が出土している。早期の押型文土器は、当地域でも類例が少なく貴重な資料である。また、各層の時期的な位置づけも比較的明確になっていることから、花粉分析、プラントオパール分析等の自然科学的な分析により、当時期の自然環境の変化を明らかにする上でも重要な資料が得られたといえる。

（水谷寛明）



第3図　縄文土器・石器実測図版

島 田 陣 屋 遺 跡

調査の経過　島田陣屋遺跡は、新城市野田字西郷に所在する。本遺跡は豊川の右岸に形成された低位段丘の末端に位置し、現在の豊川までは約150m離れている。遺跡の標高は約26mから31mで、遺跡東南に広がる沖積平野との比高差は約３mを測る。島田陣屋は、1625年（寛永２年）に島田成重が3000石の知行を受けたのが始まりで、1868年（明治元年）に明治政府の命令で建物が取り壊されるまで存続した。

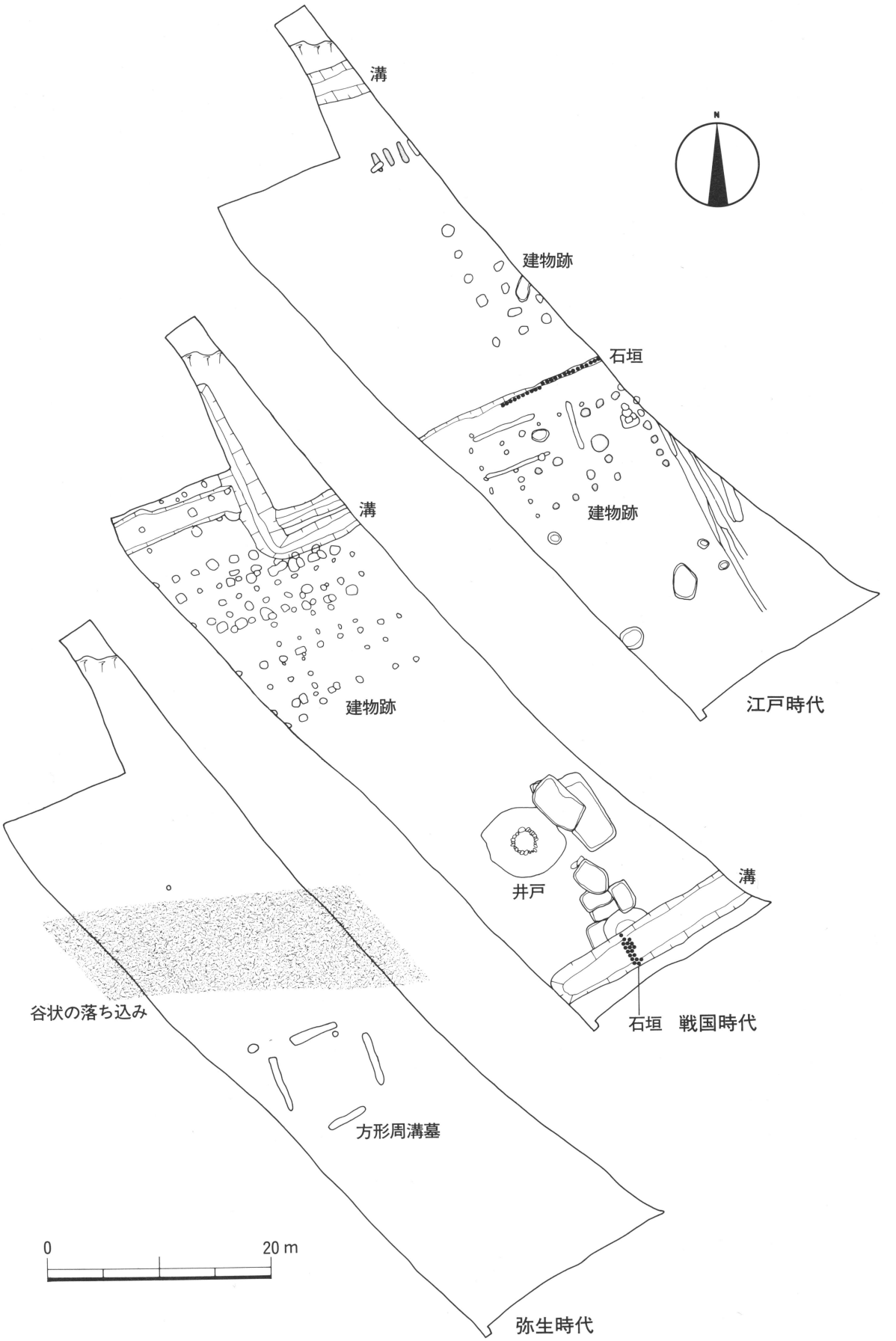
発掘調査は、野田城大橋建設に際する橋梁改築に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積2,682㎡のうち昨年度は1,000㎡、今年度は平成５年７月から12月にかけて1,682㎡を調査した。（神谷知幸）

調査の概要　今年度の調査では、弥生時代後期の方形周溝墓、戦国時代の溝、建物跡、井戸、土坑、江戸時代の石垣、溝、建物跡、廃棄土坑、埋設甕等の遺構が検出された。遺構は検出されていないが、弥生時代中期の土器、須恵器も出土している。

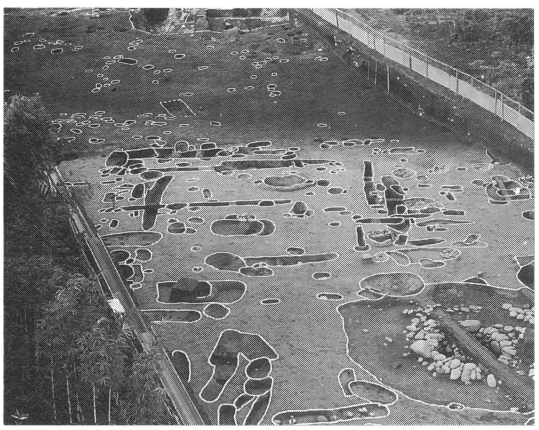
遺跡の基本層序は、調査区北半では上層から暗褐色土層（耕作土）、黒色土層（しまりのあるシルト層で、豊川流域にみられるいわゆる黒ボク層）、黄橙色土層（基盤、上位はしまりのあるシルト層で下位は礫を含む砂層）である。調査区南半は、江戸時代の削平を受け黒ボク層は遺存しておらず、暗褐色土層下に黄灰色土層、黄褐色土層（近世の整地層）が堆積している。また、調査区中央よりやや北側では、基盤層が低く落ち込み、谷状の落ち込みが東西に走っている。この落ち込みには黒ボク層が厚く堆積し、最も厚いところで約1.2mを測る。昨年度調査区の北部で検出された後背湿地状の「落ち込み」と同様のものであろう。



第１図　島田陣屋遺跡調査区位置図（Ｓ＝1/5000）



第２図　主要遺構配置図（Ｓ＝1/500）

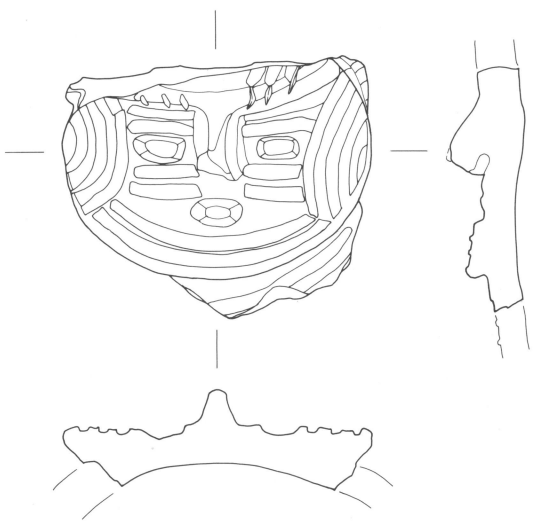


方形周溝墓



方形周溝墓土器出土状況

弥生時代　弥生時代の遺構としては、調査区中央で方形周溝墓が１基検出されている。周溝の四隅が切れるタイプで、規模は一辺約９ｍを測り、溝は垂直に掘られている。墳丘部は削平を受け遺存しておらず、主体部等は確認できなかった。東、南、西側の周溝からは、それぞれ供献土器の壺が出土しており、土器の年代からこの方形周溝墓は弥生時代後期の欠山式期に属すると考えられる。また、北側の周溝からは、人面付土器が１点出土している。顔面部分のみ遺存しており、鼻と眉はＴ字状の粘土紐を貼り付け、目と口は太く浅い沈線で表現されている。顎と頬には弧状の沈線が巡らされ、顔面には所々赤彩が残っている。人面付土器の年代観は、当遺構出土の他の土器とは一致しない。当遺跡では弥生時代中期に属する土器も出土しており、この時期に帰属するものであろう。



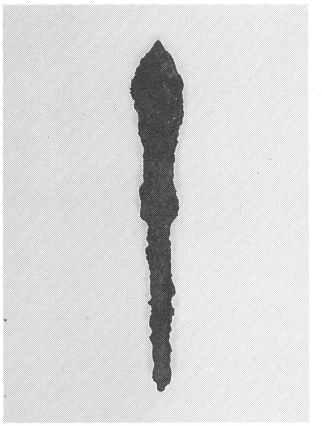
第３図　人面付土器実測図（１：２）

他に弥生時代の遺物は、調査区中央部の谷状の落ち込みに堆積した黒ボク層中より欠山式を主体とする土器が出土している。

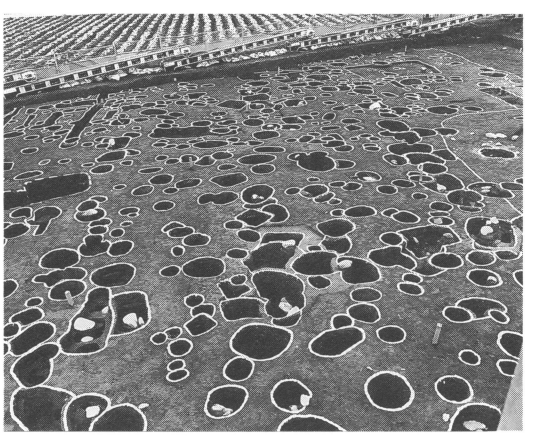
戦国時代　調査区北部と南部で区画溝が検出されている。北側の溝は断面箱形で、幅2.8m、深さ1.7ｍを測り、南北に走りＬ字状に屈曲し東へのびる。この溝の西側には幅2.7m、深さ0.5mの浅い溝が走っている。これらの溝からは、15世紀から16世紀に比定される常滑産甕、鍋、土師器皿、瓦器、輸入陶磁器（青磁・染付）等の遺物が出土している。南側の溝は、幅3.7m、深さ1.5mを測り、調査区西端で立ち上がることから出入口の存在が推定される。この溝は西側を埋め側面に石垣を築き、出入口部分を拡張した状況が確認されている。

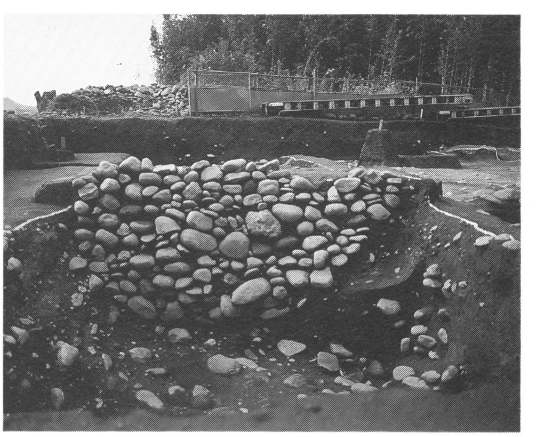
溝で区画された範囲では、複数の掘立柱建物、井戸、土坑等の遺構が検出された。建物

の柱穴は、調査区北部で多数検出されている。柱穴は黒ボク層を切って深く掘り込まれ、根石を残すものもみられる。建物の主軸方位は、N－75°－EとN－70°－Eの2種類が確認され、前者の建物は北側の溝と切り合っている。なお、この建物柱穴から鉄鏃が1点出土している。


鉄鏃

調査区南部では、石組の井戸が検出されている。井戸の掘形は、直径約6mを測る。石組は上部が円形に組まれ、下部はほぼ正方形を呈する。上部の石組の直径は約1.8mである。検出面から深さ3.8mまで掘り下げたが、それ以下は激しい湧水のため最下部の構造は確認できなかった。井戸内は人頭大の礫により一度に埋められており、埋土上位から常滑産甕、土師器皿等が出土している。遺物の年代から、16世紀には廃絶されたものと考えられる。井戸東側には、長方形を呈する土坑が2基検出され、井戸埋土と同時期の遺物が出土している。


掘立柱建物跡

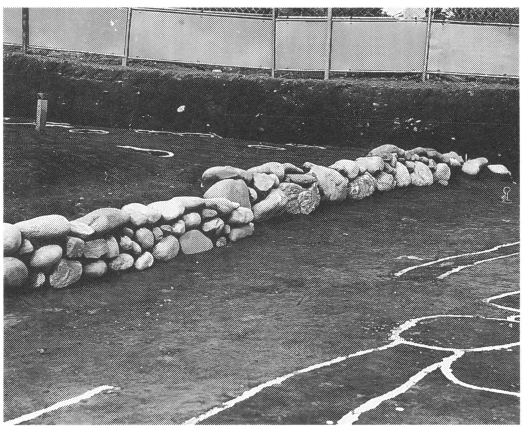

溝内石垣


井戸石組

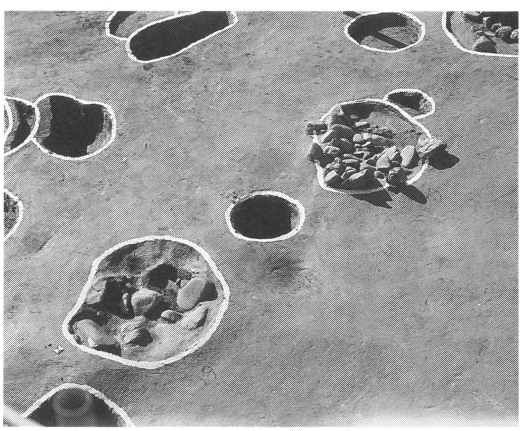

井戸断割状況

江戸時代　江戸時代には当地は島田氏の陣屋になるが、今回の調査では陣屋の敷地内を区画する溝と石垣が検出されている。昨年度の調査成果と合わせると陣屋の敷地内が南北に大きく３つに区画されていたことが明らかになった。

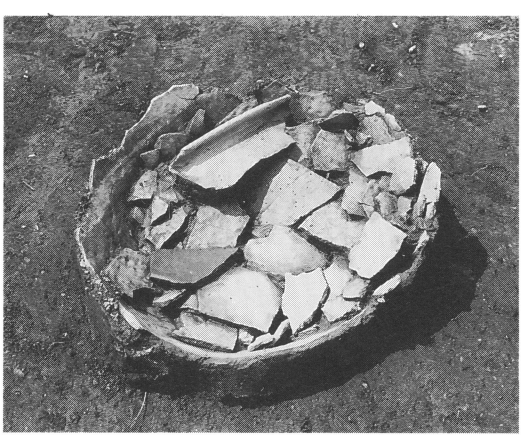
溝は幅3.0m、深さ1.0mを測り、断面形は箱形を呈する。石垣は調査区のほぼ中央で検出され、３段程遺存している。石垣の並びは途中にずれている部分があり、積み直し等の改築を受けたものと考えられる。西側の石列は人頭大の偏平な礫を水平に積み上げ、東側の石列は基底に大きな礫を配しその上に人頭大の礫を積み上げる等、築造方法に違いが認められる。


石　垣

石垣の北と南から、それぞれ建物跡が検出された。石垣北の建物は掘立柱で、柱穴は径0.9mと大きく、黒ボク層を切って基盤層まで掘り込まれている。石垣南の建物は、柱穴の底面を固く叩きしめ、拳大の礫が密に敷き詰められている。


柱　穴

この他に調査区南部では、廃棄土坑２基、常滑産の大型甕を埋設した土坑４基を確認している。


埋設甕

まとめ　今年度の調査では、昨年度の調査では希薄であった島田陣屋に関わる遺構が多数検出された。特に陣屋敷地内の区画、構造を窺うことができる資料が得られたのは、大きな成果であろう。また、文献に記されていない戦国期の遺構、遺物も多数検出されている。陣屋以前に当地に屋敷地が存在したことは、島田陣屋の成立を考える上でも重要な意味をもつものであろう。戦国期の屋敷地は、遺構の切り合いからさらに複数の時期区分が可能であり、今後江戸時代も含め屋敷地の構造の変遷を明らかにすることは重要な課題と考えられる。

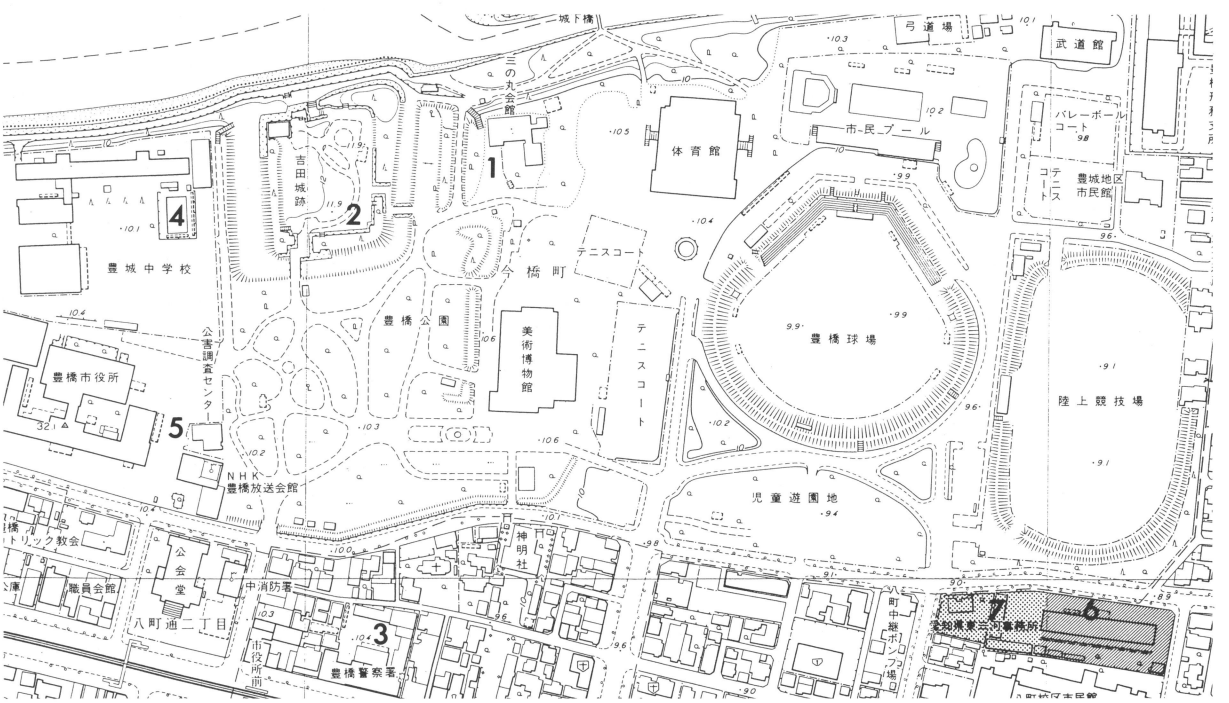
（原田　幹）

吉田城遺跡

調査の経緯　吉田城遺跡は、豊橋市八町通に所在し、豊川の左岸、朝倉川と合流する段丘上に位置する。本センターでは愛知県東三河総合庁舎建設に伴い、愛知県東三河事務所跡地を昨年度はA区（平成5年1月～3月・2,600㎡、第1図の6地点）と今年度はB区（4月～7月・2,700㎡、第1図の7地点）の2つに区分して発掘調査を実施した。

吉田城関連の発掘調査は、これまでに豊橋市教育委員会によって行われてきた。古くは昭和59年に三の丸地区（第1図、1地点）の調査が行われ、吉田城関係の遺構をはじめとする各時代の遺構が検出され、江戸時代の馬場跡や米蔵跡が確認されている。平成元年には本丸地区（第1図、2地点）が調査され、御殿跡と思われる遺構等が検出された。平成3年には二の丸地区（第1図、4地点）において、今橋城の時期の濠（幅8m、深さ4.5m）や大型の土坑（20m×13m）、平成5年には三の丸地区（第1図、5地点）で、今橋城や吉田城の溝や堀、歩兵第十八連隊関係の遺構が確認されている。

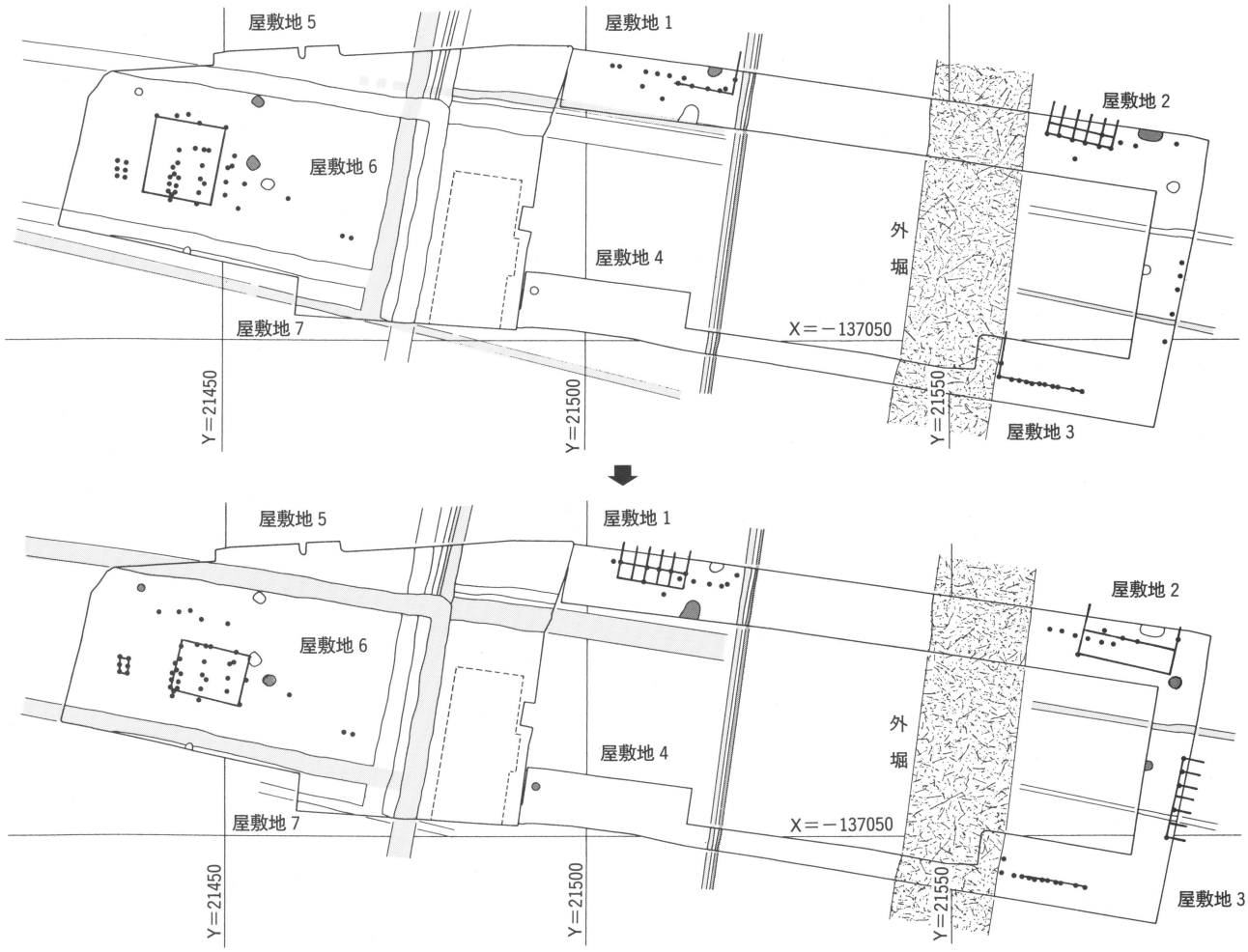
本センターでは、平成2年に豊橋警察署地点（第1図、3地点）を発掘調査しており、武家屋敷地区（家老西村孫次右衛門と東隣りの西村国治の屋敷地）の調査を行った。近世の遺構や16世紀の遺構が検出されており、中世吉田城（今橋城）の構造を考える上での好資料となった。昨年の調査区（第1図、6地点）では、外堀と4軒の武家屋敷地の他、中世（13世紀代）の遺構も確認されている。　（水谷寛明）



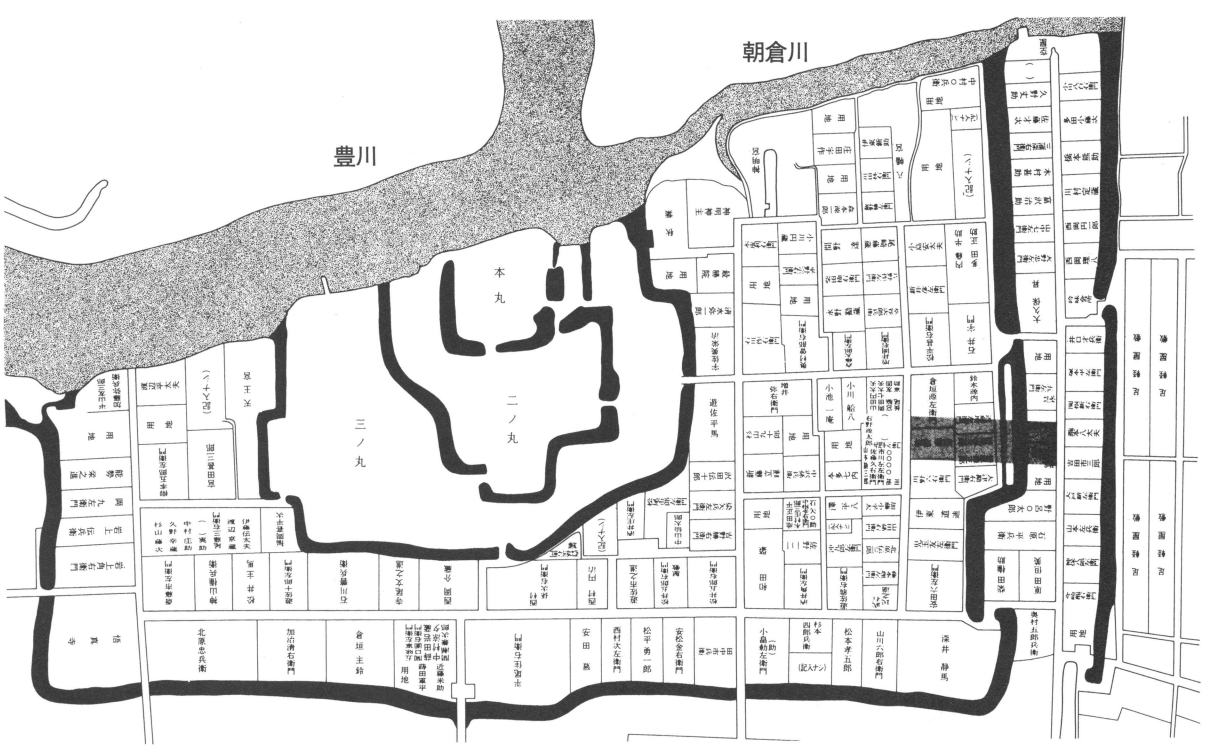
第1図　調査区位置図（1/5000）



第 2 図　主要遺構配置図（1/250）



第 3 図　主要遺構変遷図



第 4 図　「吉田藩士屋敷図」（豊橋市美術博物館所蔵）

調査の概要　昨年度の調査区(面積2,600㎡)も含めて、旧愛知県東三河事務所地点全体(総面積5,300㎡)をまとめておきたい。遺構は、大きく古代・中世・近世前期(16世紀末～18世紀後葉)・近世後期(18世紀末～19世紀中葉)・近代(歩兵第十八連隊関連)の5時期に分けることができる。出土遺物は、コンテナ約400箱に及び、その大部分を近世陶磁器類・瓦類が占めている。

古代　古代の遺構としては、径約60cm、深さ約80cm程の柱穴列と土坑数基を確認している。この柱穴列はこれ以外には確認されておらず、柵列と想定することができる。時期は、出土した須恵器などから8世紀後葉と考えられる。

中世　中世の遺構としては、区画溝や井戸、竪穴住居跡、集席遺構などが確認されている。しかし、集落の構造を捉えられるほど、良好には残存していなかった。時期としては、出土した渥美産の山茶椀などから13世紀代が想定される。

近世　本遺跡の中心となる近世の主な遺構としては、外堀と7軒の武家屋敷地が検出されている。それぞれの屋敷地では、屋敷境の溝や排水溝、井戸、建物の礎石や柱穴、廃棄土坑などが確認されてはいるが、6軒分は周辺部分しか検出されておらず、全体を想定することは困難である。しかし、屋敷地6とした部分はほぼ1軒分を含んでおり、本遺跡の武家屋敷の構造を考える上で重要な地点であると思われる。各屋敷地の居住者を「吉田藩士屋敷図」(第4図)や嘉永7年(1854)・安政6年(1859)の「吉田藩士分限帳」『豊橋市史第6巻』から割り出してみると、以下の表のようにまとめることができる。

屋敷地の居住者

	役　職	収　　入	居 住 者 名	屋敷地面積
屋敷地1	玄関番	35俵	近藤増右衛門	約480坪
屋敷地2	城　番	40俵	草野九兵衛	約305坪
屋敷地3	玄関番	5石 2人扶持	徳島小左衛門	約390坪 用地含む
屋敷地4	武具方	40俵	田沼小弥太 (替三郎か)	合わせて 約459坪
	大納戸	60石	若原源之助 (源三郎か)	
屋敷地5	用　人	230石	倉垣源左衛門	約900坪
屋敷地6	－	－	佐野恭吾	約410坪
屋敷地7	馬　廻	70石	川野六右衛門	約460坪

出土した瀬戸・美濃産や肥前産の陶磁器類などから、16世紀末から18世紀後葉(前期)と18世紀末～19世紀中葉(後期)の2時期が想定され、遺構の方からも18世紀後葉に屋敷替えが行われているように考えられる(第3図)。詳しい検討は、来年度作成する報告書に委ねることとしたい。また、創建時の時期の遺構も確認されており、吉田城以前の状況も窺うことができる。

廃藩後の明治時代に建設された歩兵第十八連隊に関するものと思われる煉瓦建物の基礎と暗渠が確認されている。この暗渠がやや問題で、後期の屋敷地の区画溝を再利用しているのではないかと考えられ、現在出土遺物の整理を進めているところである。(小嶋廣也)

川地（かわじ）遺跡

調査の経過　川地遺跡は、渥美郡渥美町大字亀山字川地に所在する。本遺跡は渥美町の中心地である福江と伊良湖岬のほぼ中間に位置し、標高４ｍほどの台地縁辺部に立地している。台地東側には丘陵地をひかえ、西側には沖積平野が広がっている。

発掘調査は県道堀切・中山線の建設に伴う事前調査として、愛知県土木部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積840㎡を平成５年４月から７月にかけて実施した。

なお、本遺跡は従来「川地貝塚」の名称で呼ばれてきたが、渥美町教育委員会発行の報告書にならい「川地遺跡」とした。　（神谷知幸）

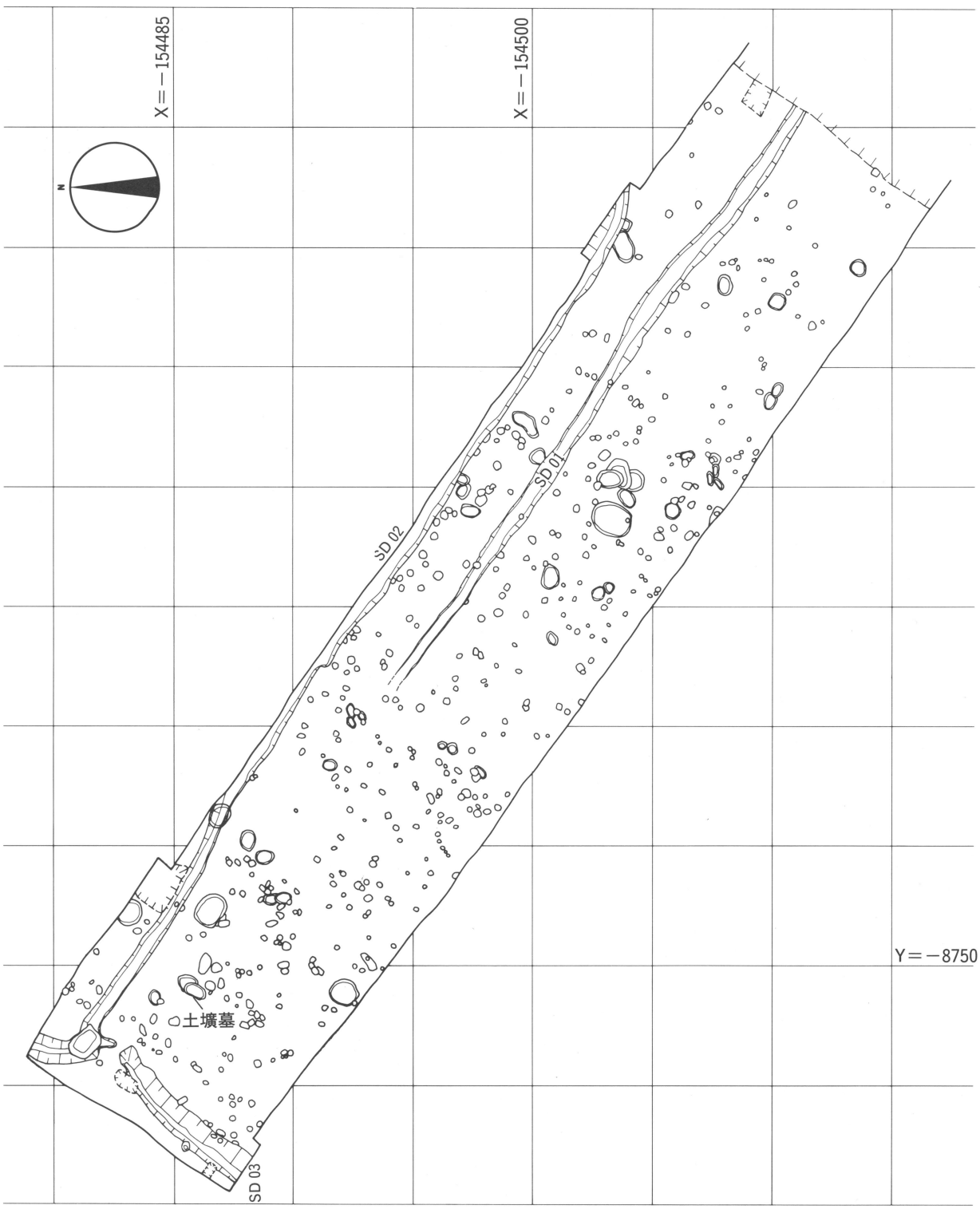
過去の調査　川地遺跡は、大正11年（1922）に清野謙次により調査され、縄文時代後期の貝塚として知られるようになった。この調査では、24体の埋葬人骨をはじめ、縄文後期の土器、石錘、石鏃等の石器、魚骨製の耳飾、骨角器、貝輪等の遺物が多数出土している。特に人骨に関する記録は、『人類学雑誌』に詳しく報告されている。

平成３年（1991）には、渥美町教育委員会により当調査区の北側と南側の360㎡が調査され、土壙墓、溝等の遺構が検出されている。遺物は縄文土器、石器、牙飾等の人工遺物と獣骨、魚骨、貝等の自然遺物が出土している。

調査の概要　調査区の基本層序は、上層から表土、耕作土、黒褐色土層、黄橙色土層（基盤）である。縄文時代の遺物包含層である黒色土層の堆積は厚いところで約30㎝あり、調査区西部は耕作による攪乱を受け遺存していない。

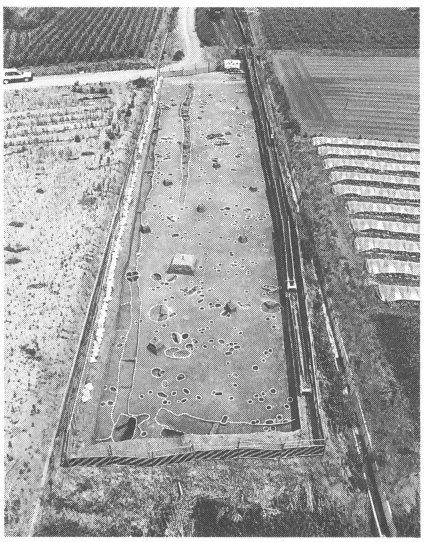


第Ⅰ図　川地遺跡調査区位置図（Ⅰ：5000）



第 2 図　川地遺跡遺構図（ S ＝ I/250）

今回の調査では、土坑墓、土坑、溝等の遺構が検出された。遺構にともなって出土した遺物は少なく、時期の特定ができない遺構も少なくない。遺物は縄文時代だけでなく中世、戦国時代のものも出土している。

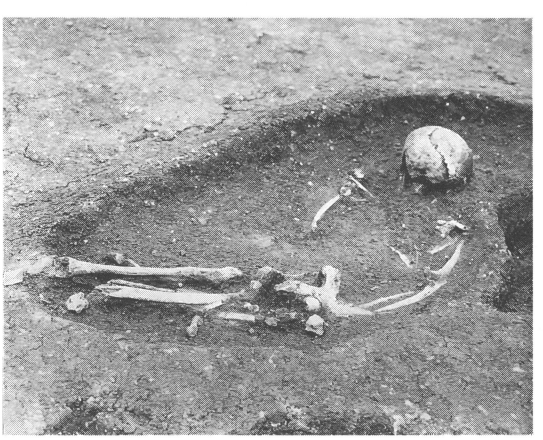

調査区全景

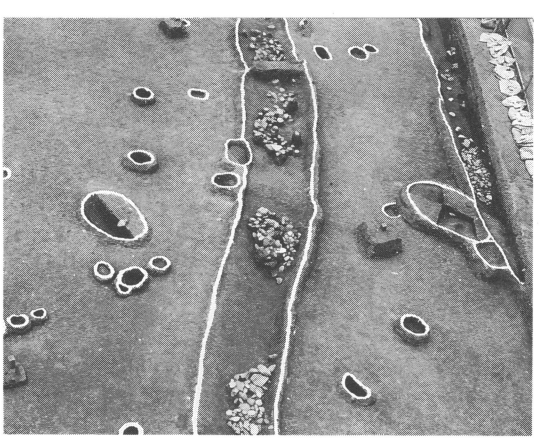
遺　構

大正11年の調査では、貝層は厚いところで45cmほど残っていたと報告されているが、最近の耕作により攪乱を受け、わずかに破砕貝の散布が認められるだけであった。破砕貝及び獣骨、魚骨は調査区北西の台地端部に偏って散布しており、貝塚はこの付近に形成されていたと推定される。

調査区北西部では、土坑墓を１基検出した。土坑の規模は95cm×57cmを測り、平面形は楕円形を呈する。人骨の埋葬形態伏臥屈葬で、頭位は北東である。人骨の遺存状態は比較的良好で、ほぼ完全な状態で各部位の骨を取り上げることができた。平成３年度の渥美町教育委員会の調査でも、当調査区北側に隣接する調査区の台地端部付近で土坑墓が２基検出されていることから、貝塚と重複するように台地端部に墓域が展開していたものと考えられる。

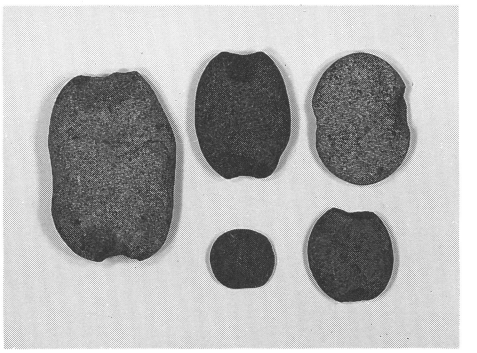
溝は３条検出された。調査区北壁に沿って検出したＳＤ02は、調査区北西端部でＬ字状に屈曲し、渥美町教育委員会の調査で検出された溝（ＳＤ01）に続く。屈曲部分には1.4m×1.0m、深さ1.1mを測る長方形の土坑が掘り込まれている。ＳＤ01はＳＤ02にほぼ並行し、ＳＤ03と直交する。ＳＤ01とＳＤ02からは、礫とともに縄文時代の石器が大量に出土した。出土状況は複数のブロックに分けられ、まとまって投棄されたものと考えられる。石器に混在して戦国期の天目茶椀、擂鉢等の遺物が出土しており、溝は戦国期のものと考えられる。


人骨検出状況


ＳＤ01・02遺物出土状況

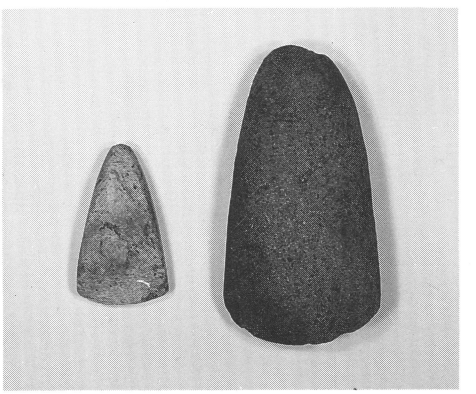
遺　物　今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、石器、中世及び戦国時代の陶器、人骨、獣骨、魚骨等の自然遺物がある。

縄文土器は黒色土層より出土したものが多く、遺構に伴うものは少ない。中期と晩期の土器が若干みられるが、大半は縄文時代後期に属するものである。特に堀之内式から加曽利B式に並行するものと元住吉山式から宮滝式に並行するものが主体となっている。



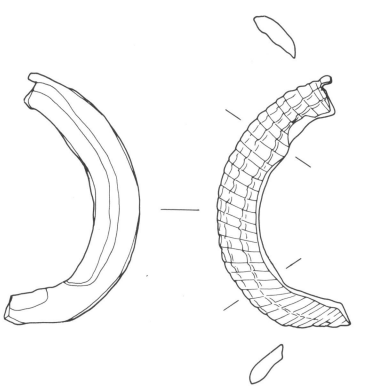
石　錘

石器は黒色土層だけでなく戦国期の溝（SD01～03）からも多く出土している。最も多いのは石錘で、本遺跡の石器組成の特色となっている。偏平な礫の両端を打ち欠いた切り目石錘が主体で、有溝石錘は少ない。法量は7㎝前後の中型品が主体で、10㎝以上の大型品、4㎝以下の小型品もある。他に石鏃、磨製石斧、凹石、磨石、石棒の破片等がある。打製石斧がほとんどみられないのも特色であろう。また、円礫を打ち欠いてつくられた用途不明の剝片が多く出土している。細部調整はほとんど施されない粗雑なもので、自然面をそのまま残している。



磨製石斧

貝製品では、貝輪が2点出土した。いずれも約1/2を欠損しており、表面は著しく磨滅している。



第3図　貝輪実測図（S＝1/2）

まとめ　川地遺跡は、著名な吉胡貝塚や伊川津貝塚などに先行する縄文時代後期の貝塚として位置づけられている。今回の調査では、貝層が攪乱を受け遺存していなかったこともあり、貝塚の明確な時期比定はできなかったが、出土土器からみる限り縄文時代後期に形成された可能性は高い。渥美半島では、晩期に多くの貝塚が形成されるが、それらに先行して形成された貝塚としてその意味は重要なものであろう。

また、今回の調査では縄文時代の遺構だけでなく、戦国時代の溝も検出された。3状の溝は屋敷地等を区画する溝と考えられ、SD02によって区画される範囲、SD01とSD03によって区画される範囲の2つの敷地の存在が想定される。　（原田　幹）